

# 田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次)

陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書

1997・12

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

# 田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次)

陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書

1997・12

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

カラ－図版1

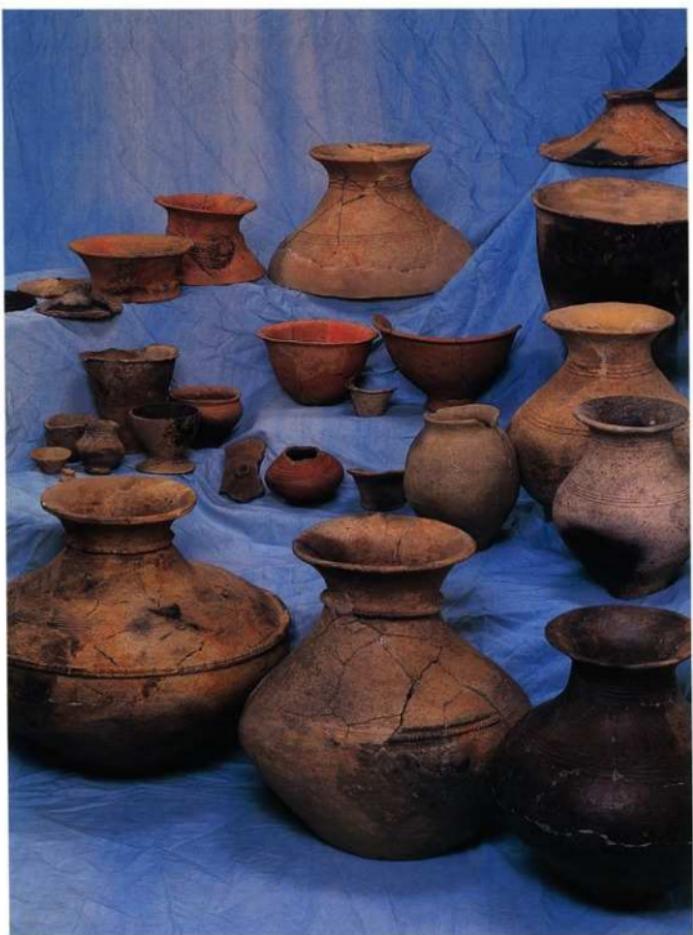
田井中遺跡95-2区



第1面井戸218出土舟形土製品



第0層出土珠文鏡



第3面落込み 848 出土弥生前期土器

## 序 文

我が国最大級の沖積平野である河内平野には、未知の遺跡が地中深くに数多く埋もれている。その一端を解明したのは、1976年から10年余にわたって実施した近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査である。しかし沖積地の遺跡は、丘陵地の遺跡と違って地表にその痕跡を残すことは少なく、不意の工事に際して発見されることが多い。

河内平野南端の八尾市に所在する田井中遺跡は、1975年陸上自衛隊八尾駐屯地内の下水道工事に際して弥生土器が出土したことで周知され、また志紀遺跡は1983年府営住宅建設に際して発見されるに至った。その後八尾駐屯地内の施設建設や、隣接する八尾空港北濠・平野川改修工事、あるいは府営住宅改築工事に伴う発掘調査が、財団法人八尾市文化財調査研究会や大阪府教育委員会などによって今日に至るまで継続的に実施してきた。

その結果田井中遺跡では、北濠周辺に営まれた弥生時代前期中段階の集落がまもなく八尾駐屯地内へと移動し、弥生時代を通じて住み続けたこと、志紀遺跡は、弥生時代前期から近代に至るまでおもに耕作地として利用されていたことが明らかとなった。

今回の調査は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会ならびに財団法人大阪文化財センター統合後の財団法人大阪府文化財調査研究センターが担当することになった。調査地は、田井中弥生集落の中心部分と想定される箇所から、同時期の水田遺構を検出している志紀遺跡に接する箇所にかけてで、3ヵ年にわたって発掘調査を実施した。詳細は本書をご覧いただきたいが、多量の遺物とともに弥生時代前期の方形周溝墓を検出するなど、多大な成果をおさめることができた。

最後に調査に際しては、大阪府教育委員会、大阪防衛施設局、陸上自衛隊八尾駐屯地をはじめとする関係各位より、多大なるご指導・ご協力を頂いた。衷心より感謝の意を表するとともに、今後とも当センターの事業になお一層のご支援を賜るようお願いする。

1997年12月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 坪井清足



## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市空港1丁目所在田井中遺跡、八尾市志紀町西所在志紀遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、陸上自衛隊八尾駐屯地内隊舎・体育館厚生センター・整備格納庫・官舎等建設に伴い、大阪防衛施設局の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、1994年度（田井中遺跡1次調査）は財団法人大阪府埋蔵文化財協会が、1995・1996年度（田井中遺跡2次・3次調査、志紀遺跡防1次）は財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。
3. 調査期間ならびに調査担当者は以下の通りである。

田井中遺跡1次調査 1994年3月25日～1994年8月31日

　　調査第2係　技師 林日佐子

田井中遺跡2次調査（田井中その2） 1995年3月1日～1996年3月31日

　　中部調査事務所　調査第1係　係長 岩崎二郎　技師 駒井正明

田井中遺跡3次調査（田井中その3） 1995年12月16日～1997年3月31日

　　中部調査事務所　調査第1係　技師 駒井正明　本間元樹　専門調査員 田坂佳子

志紀遺跡（防衛施設局） 1995年10月28日～1996年3月31日

　　中部調査事務所　調査第1係　係長 岩崎二郎

続く報告書作成作業は、1997年12月22日まで行った。

4. 調査中に検出した地震痕跡については寒川 旭氏（通産省工業技術院地質調査所）より、動物遺体については安部みき子氏（大阪市立大学医学部）より玉稿を賜わった。また<sup>14</sup>C年代測定は山田治氏（京都産業大学理学部）に、花粉、珪藻、プランクトン・オパール分析はパリノ・サーヴェイ懇親会およびパレオ・ラボに委託した。

5. 調査・整理にあたっては、防衛施設庁大阪防衛施設局、陸上自衛隊八尾駐屯地をはじめ、以下の方々からご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表する（五十音順、所属・敬称略）。

栗田 熊、飯田文夫、石田成年、伊藤 実、乾 哲也、今泉里司、上原一廣、永栄文晴、

太田 理、岡田清一、金岡明矩、北野 重、楠原一輝、小池 寛、河野正博、佐々木憲一、

佐藤一夫、篠田靖弘、下條信行、白石耕治、關本憲治、高島達之、高萩千秋、田中清美、

田中涼子、坪田真一、中西義史、長沼 孝、成海佳子、西村公助、西山周一、福宜田佳男、

濱田竜彦、原田昌則、樋口 熊、日野 宏、藤井信夫、福永信雄、松田 潔、松田順一郎、

松村慈城、松本憲明、光石鴎巳、三宅久仁夫、村山 央、森井貞雄、森本めぐみ、安川豊史、

安田正穂、山田清朗、山田幸弘、山本三郎、山本忠尚、吉田野乃、吉村 健、米田敏幸、

和氣清章、渡辺正巳

（現地調査） 今泉恵美子、遠藤圭介、尾根史郎、佐野陽子、信田美津、田口理恵、玉西康人、  
辻口菜穂子、中村亮二、林 京子、林 憲昭、宮澤 伸、山田 裕

(現地調査・整理) 楠本佳子、佐藤陽子、辻田多江、辻田有美、東野穂澄、松下知代、山本麻理

6. 現場写真は主に調査担当者が、遺物写真は片山彰一（中部調査事務所調査第1係）・立花正治（南部調査事務所調査第1係）がそれぞれ撮影した。また自然遺物・石材鑑定等は山口誠治（同調査第3係）が行った。また土器は三好孝一（同調査第3係）に、石器については石神幸子（普及資料課）より教示を得た。
7. 本書の執筆は各調査担当者が行い、文責は目次に示した。編集実務は主に本間が担当した。
8. 調査、整理の過程で作成した図面類、写真、出土遺物などは、~~大阪府文化財調査研究センター~~ 中部調査事務所で保管している。

## 凡 例

1. 本書に掲載した遺構実測図、その他の図に付された北方位は、全て国土座標第VI座標系の座標北を示す。図中の座標値は、km、mを省略した。
2. 本書で用いる標高は全て東京湾平均海面で、図中では原則的にT.P.+を省略した。
3. 土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』1995年版を用いた。
4. 田井中遺跡については、西から順に各調査区を報告した。（第4章～第9章）。
5. 本書では、本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号は全て一致する。
6. 原則的に、出土遺物のうち土器類は縮尺1/4、打製石器は同2/3、磨製石器は同1/2で掲載した。
7. 土器類の断面については、須恵器を黒塗り、瓦器をスクリーントーン、その他を白抜きとした。
8. 打製石器の黒塗り部分は、新欠を表す。

# 目 次

## 巻頭図版

序文	.....	i
例言	.....	ii
凡例	.....	iii
目次	.....	iii
第1章 調査に至る経緯と経過	..... (駒井)	1
第2章 位置と環境	..... (田坂)	3
第3章 調査・整理の方法		
第1節 調査の方法	..... (本間)	7
第2節 整理の方法	..... (田坂・駒井)	8
第4章 田井中遺跡95-2区の調査成果		
第1節 層序	..... (駒井)	12
第2節 遺構	..... (駒井)	14
第3節 土器	..... (田坂)	25
第4節 石器	..... (駒井・本間)	96
第5節 その他の遺物	..... (田坂)	127
第6節 小結	..... (駒井)	131
第5章 田井中遺跡94-1区の調査成果	..... (林)	133
第6章 田井中遺跡96-3区の調査成果	..... (本間)	147
第7章 田井中遺跡95-1区の調査成果	..... (駒井)	155
第8章 田井中遺跡96-2区の調査成果	..... (本間)	175
第9章 田井中遺跡96-1区の調査成果	..... (本間)	199
第10章 志紀遺跡95-1・2区の調査成果	..... (岩崎)	233
第11章 自然科学的分析		
第1節 田井中遺跡・志紀遺跡における自然科学的分析の概要	..... (本間)	238
田井中遺跡95-2区で検出された液状化跡	..... (寒川 旭)	239
田井中遺跡95-2区・志紀遺跡95-2区における古環境復元	..... (パリノ・サーヴェイ)	242
田井中遺跡96-1区の古環境分析	..... (パレオ・ラボ)	278
田井中遺跡出土の脊椎動物遺体	..... (安部みき子)	302
田井中遺跡出土植物遺体について	..... (山口誠治)	311
田井中遺跡95-2区出土土器付着炭化物について	..... (山口誠治)	317
第12章 考察		
第1節 田井中遺跡の変遷	..... (駒井)	320
第2節 弥生時代前期の区画墓	..... (本間)	324
第3節 田井中遺跡95-2区落込み848出土の前期弥生土器	..... (田坂)	340
第4節 田井中遺跡95-2区出土の石器	..... (駒井・本間)	352
第5節 田井中遺跡周辺の戦争遺跡	..... (駒井)	360

## 写真図版

## 報告書抄録

## 卷頭カラー図版

- 1 田井中遺跡95-2区 上：第1面戸戸218出土舟形土製品 下：第0層出土珠文鏡  
 2 田井中遺跡95-2区 第3面落込み848出土弥生前期土器

## 目次

図1 調査地位置	2	図66 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器16	84
図2 田井中・志紀遺跡周辺の主要遺跡分布	3	図67 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器17	85
図3 田井中・志紀遺跡周辺の地形	4	図68 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器18	86
図4 弥生時代前期土器形態分類	9	図69 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器19	87
図5 土器調整凡例	11	図70 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器20	88
		図71 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器21	89
図6 95-2区 東辺・南辺断面	13	図72 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器22	90
図7 95-2区 第1面	14	図73 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器23	91
図8 95-2区 第1面戸戸250・218	15	図74 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器24	92
図9 95-2区 第1面竪穴住居364	16	図75 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器25	93
図10 95-2区 第1面井戸388	17	図76 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器26	94
図11 95-2区 第1面土坑188・戸戸187	18	図77 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器27	95
図12 95-2区 第1面土坑395	19	図78 95-2区 第3面溝・土坑出土弥生土器	96
図13 95-2区 第2面	22	図79 95-2区 石縁	97
図14 95-2区 第3面	23	図80 95-2区 尖頭器	98
図15 95-2区 第3面落込み848	24	図81 95-2区 石小刀・石難	99
図16 95-2区 第0層出土土器	26	図82 95-2区 石剣1	100
図17 95-2区 第1面出土土器・土製品	27	図83 95-2区 石剣2	101
図18 95-2区 第0層出土生土器	30	図84 95-2区 スクレイバー1	102
図19 95-2区 第1面戸戸出土弥生土器	31	図85 95-2区 スクレイバー2	103
図20 95-2区 第1面溝・土坑出土 弥生土器・縄文土器	32	図86 95-2区 瓦形石器	104
		図87 95-2区 打製石器1	105
図21 95-2区 第1面土坑・ビット出土弥生土器	34	図88 95-2区 打製石器2	106
図22 95-2区 第1面土坑出土弥生土器	35	図89 95-2区 石核1	107
図23 95-2区 第1面溝334出土弥生土器1	37	図90 95-2区 石核2	108
図24 95-2区 第1面溝334出土弥生土器2	38	図91 95-2区 石核3	109
図25 95-2区 第1面溝334出土弥生土器3	39	図92 95-2区 石核4	110
図26 95-2区 第1面土坑188出土弥生土器1	41	図93 95-2区 玉臼・防錆軸・石矛・石難	111
図27 95-2区 第1面土坑188出土弥生土器2	42	図94 95-2区 磨製石斧1	113
図28 95-2区 第1面土坑188出土弥生土器3	43	図95 95-2区 磨製石斧2	114
図29 95-2区 第1面土坑188出土弥生土器4	44	図96 95-2区 磨製石斧3	115
図30 95-2区 第1面土坑188出土弥生土器5	45	図97 95-2区 破石1	116
図31 95-2区 第1面土坑188出土弥生土器6	46	図98 95-2区 破石2	117
図32 95-2区 第1面土坑188出土弥生土器7	47	図99 95-2区 磬石・椎	118
		図100 95-2区 石庖丁2	120
図33 95-2区 第1面土坑395出土弥生土器	48	図101 95-2区 石庖丁3	121
図34 95-2区 第1面溝334・土坑395出土弥生土器	49	図102 95-2区 石庖丁4	122
図35 95-2区 第1面竪穴住居364出土弥生土器	50	図103 95-2区 石庖丁	123
図36 95-2区 第1層出土弥生土器1	51	図104 95-2区 石庖丁未成品1	125
図37 95-2区 第1層出土弥生土器2	52	図105 95-2区 石庖丁未成品2・剥片石器	126
図38 95-2区 第2面溝・溝出土弥生土器	53	図106 95-2区 土製品1	128
図39 95-2区 第2面溝出土弥生土器	54	図107 95-2区 土製品2	129
図40 95-2区 第2面土坑出土弥生土器	55	図108 95-2区 第1面・第2面出土木製品	130
図41 95-2区 第2面ビット出土土器・弥生土器	56	図109 95-2区 第3面落込み848出土木製品	131
図42 95-2区 第2面溝593出土弥生土器1	57	図110 95-2区 第0層出土鏡	131
図43 95-2区 第2面溝593出土弥生土器2	58		
図44 95-2区 第2面溝593出土弥生土器3	59	図111 94-1区 基本層序	134
図45 95-2区 第2面溝593出土弥生土器4	60	図112 94-1区 西辺断面	134
図46 95-2区 第2面溝593出土弥生土器5	61	図113 94-1区 東辺断面	134
図47 95-2区 第2面土坑657出土弥生土器1	63	図114 94-1区 南辺断面	134
図48 95-2区 第2面土坑657出土弥生土器2	64	図115 94-1区 第1面溝1平面・断面	136
図49 95-2区 第2面土坑657出土弥生土器3	65	図116 94-1区 第2面溝2・3平面・断面	136
図50 95-2区 第2層・側溝出土弥生土器	66	図117 94-1区 第3面溝4平面・断面	136
図51 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器1	69	図118 94-1区 第1面溝1出土弥生土器・土製品	137
図52 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器2	70	図119 94-1区 第2面溝2出土弥生土器・土製品	137
図53 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器3	71	図120 94-1区 第3面溝4出土弥生土器・縄文土器	138
図54 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器4	72	図121 94-1区 第0層出土須恵器・土器・土製品	139
図55 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器5	73	図122 94-1区 第1層出土弥生土器・土製品	139
図56 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器6	74	図123 94-1区 第2層出土弥生土器1・土製品	140
図57 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器7	75	図124 94-1区 第2層出土弥生土器2	141
図58 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器8	76	図125 94-1区 第2層出土弥生土器3・土製品	142
図59 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器9	77	図126 94-1区 第3層出土弥生土器	143
図60 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器10	78	図127 94-1区 第2面溝2出土打製石器・磨製石器	143
図61 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器11	79	図128 94-1区 第1層出土打製石器・磨製石器	144
図62 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器12	80	図129 94-1区 第2層出土打製石器・磨製石器	145
図63 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器13	81	図130 94-1区 第3面溝4出土打製石器	145
図64 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器14	82	図131 94-1区 第0層出土打製石器	146
図65 95-2区 第3面落込み848出土弥生土器15	83		

国132 96-3区 南辺断面	147	国195 96-1区 打製石器2	227
国133 96-3区 西辺断面	147	国196 96-1区 磨製石器・管玉	228
国134 96-3区 第3面	149	国197 96-1区 土製品・金属製品	229
国135 96-3区 第5面	149	国198 96-1区 木製品1	230
国136 96-3区 第6面	150	国199 96-1区 木製品2	231
国137 96-3区 第7面	150		
国138 96-3区 土器器・縄文土器	151	国200 志紀遺跡調査位置	234
国139 96-3区 弥生土器	152	国201 志紀遺跡95-1区 北壁断面	234
国140 96-3区 打製石器	153	国202 志紀遺跡95-1・2区 第1道構面平面	235
国141 96-3区 磨製石器	153	国203 志紀遺跡 第1層出土土器	235
		国204 志紀遺跡95-1・2区 第2道構面平面	236
国142 95-1区 北辺断面(部分)	155	国205 志紀遺跡 第2層出土土器	236
国143 95-1区 第1面・第2面	157	国206 志紀遺跡95-1・2区 第3道構面平面	237
国144 95-1区 第3面・第4面	158	国207 志紀遺跡 第3層出土土器	237
国145 95-1区 第3面掘立柱建物45・55	159		
国146 95-1区 第3面ピット2・土坑74	160	国208 噴砂発生のメカニズム	241
国147 95-1区 第4面遺構断面	162	国209 砂脈の平面形態	241
国148 95-1区 瓦器・須恵器	163	国210 波状化跡の断面形態	241
国149 95-1区 上部器1	164	国211 国210の砂に関する粒径加積曲線	241
国150 95-1区 上部器2	165	国212 南部地震・東部地震・関東地震の発生時期	241
国151 95-1区 弥生土器	166	国213 田井中遺跡95-2区第1面土坑395の	244
国152 95-1区 打製石器1	167	主要珪藻化石群集組成	244
国153 95-1区 打製石器2	168	国214 田井中遺跡95-2区第1面土坑188の	249
国154 95-1区 磨製石器1	170	主要珪藻化石群集組成	249
国155 95-1区 磨製石器2	171	国215 田井中遺跡95-2区第1面土坑395の	252
国156 95-1区 玉類	172	主要珪藻化石群集組成	252
国157 95-1区 第3面出土木製品	173	国216 田井中遺跡95-2区第1面土坑395の	254
		植物珪酸組成と組成片の産状	254
国158 96-2区 南辺断面	175	国217 田井中遺跡95-2区第1面土坑188の	255
国159 96-2区 西辺断面	176	植物珪酸組成と組成片の産状	255
国160 96-2区 第1面	178	国218 志紀遺跡95-2区の試料採取層位	257
国161 96-2区 第1面・井戸5	179	国219 志紀遺跡95-2区主要珪藻化石層位分布	257
国162 96-2区 第2面	180	国220 志紀遺跡95-2区主要花粉化石層位分布	260
国163 96-2区 第3面	181	国221 志紀遺跡95-2区植物種類層位分布	263
国164 96-2区 第4面	182	国222 田井中遺跡96-1区基本上層の	278
国165 96-2区 第4面溝断面	183	様式柱状図と試料採取層準	278
国166 96-2区 第4面土坑・井戸・ピット断面	186	国223 田井中遺跡96-1区溝および溝状凹地附近的	279
国167 96-2区 第5面	190	上層断面図と試料採取層準	279
国168 96-2区 磁器・須恵器・土師器	191	国224 田井中遺跡96-1区の珪藻化石分布	282
国169 96-2区 弥生土器1	193	国225 田井中遺跡96-1区基本上層の	288
国170 96-2区 弥生土器2・縄文土器	194	主要花粉化石分布	288
国171 96-2区 打製石器	195	国226 田井中遺跡96-1区溝部の	289
国172 96-2区 磨製石器	196	主要花粉化石分布	289
国173 96-2区 土製品・木製品	197	国227 田井中遺跡96-1区溝状凹地の	290
		主要花粉化石分布	290
国174 96-1区 中央断面	199	国228 田井中遺跡96-1区の総合模式	291
国175 96-1区 第1面	202	主要花粉化石分布	291
国176 96-1区 第2面	203	国229 田井中遺跡96-1区基本土層の	291
国177 96-1区 第3面	205	プラン・オバール分布	297
国178 96-1区 第3面溝6・9分岐部	206	国230 田井中遺跡96-1区溝状凹地の	298
国179 96-1区 第3面遺構断面	207	プラン・オバール分布	298
国180 96-1区 第3面上土坑8	207	国231 田井中遺跡出土土モルタルの体積変動ヒストグラム	314
国181 96-1区 第4面	209	国232 田井中遺跡出土モルタル計測値分布	314
国182 96-1区 第4面遺構断面	210	国233 田井中遺跡95-2区出土灰化物付着土器	318
国183 96-1区 第4面溝61~75	211		
国184 96-1区 第5面	212	国234 弥生時代(上)と古墳時代(下)の	
国185 96-1区 第5面遺構断面	213	田井中・志紀遺跡	322
国186 96-1区 第6面溝86はか断面	216	国235 弥生時代前期の区画墓	328-329
国187 96-1区 第6・7面	217	国236 落込み48号出土土器部体破片	345
国188 96-1区 須恵器	218	国237 95-2区出土削片の長・幅比率	358
国189 96-1区 上部器1	220	国238 大正飛行場建設に伴う	
国190 96-1区 土師器2	221	施設移転(上)と空襲被害(下)	362
国191 96-1区 第3面土坑8出土土器	222	国239 旧陸軍大阪航空観測用門(上)と	
国192 96-1区 弥生土器1	224	96-1区格納庫基礎(下)	366
国193 96-1区 弥生土器2・縄文土器	225	国240 大正飛行場開通施設	371
国194 96-1区 打製石器1	226		

## 表 目 次

表1 弥生時代前期土器分類对照	10	表7 志紀遺跡95-2区花粉分析結果	261
表2 珪藻の生産性	243	表8 志紀遺跡95-2区植物珪酸体分析結果	262
表3 田井中遺跡95-2区珪藻分析結果	245~248	表9 田井中遺跡96-1区の珪藻化石底出表	281
表4 田井中遺跡95-2区花粉分析結果	250~251	表10 田井中遺跡96-1区の底出花粉化石一覧表	287
表5 田井中遺跡95-2区植物珪酸体分析結果	253	表11 田井中遺跡96-1区の試料1g当りの	
表6 志紀遺跡95-2区珪藻分析結果	258~259	プラン・オバール個数	296

表12	田井中遺跡95-2区出土動物遺体の 同定結果一覧	303~305
表13	田井中遺跡95-2区出土の イノシシおよびシカの出現頻度	306~307
表14	田井中遺跡出土植物遺体同定結果	312
表15	田井中遺跡95-1・2区出土モモ様の計測統計表	313
表16	田井中遺跡95-2区炭化物付着土器一覧	318
表17	弥生時代前期灰陶器一覧	326~327
表18	落込み48出土土器種構成一覧	341
表19	北土器群（上層）出土土器種構成一覧	341
表20	北土器群（下層）出土土器種構成一覧	341
表21	落込み848出土壺a 1・a 2 （+不明）頭部文様	342
表22	北土器群（上層）出土壺a 1・a 2 （+不明）頭部文様	343
表23	北土器群（下層）出土壺a 1・a 2 （+不明）頭部文様	343
表24	落込み848出土壺A 1・a 2 （+不明）頭部文様	343
表25	北土器群（上層）出土壺A 1・a 2 （+不明）頭部文様	344
表26	北土器群（下層）出土壺A 1・a 2 （+不明）頭部文様	344
表27	落込み848出土壺A 1・a 2 （+不明）頭部文様	344
表28	北土器群（上層）出土壺A 1・a 2 （+不明）頭部文様	346
表29	北土器群（下層）出土壺A 1・a 2 （+不明）頭部文様	346
表30	落込み848出土壺A 1・a 2 （+不明）頭部文様	347
表31	北土器群（上層）出土壺A 1・a 2 （+不明）頭部文様	347
表32	北土器群（下層）出土壺A 1・a 2 （+不明）頭部文様	347
表33	弥生時代前期土器編年対照	349
表34	田井中遺跡95-2区石器組成	354~355

## 写真目次

写真1	兵庫県南部地震によって流出した噴砂	240
写真2	田井中遺跡 95-2区珪藻化石 (1)	267
写真3	田井中遺跡 95-2区珪藻化石 (2)	268
写真4	田井中遺跡 95-2区花粉化石 (1)	269
写真5	田井中遺跡 95-2区花粉化石 (2)	270
写真6	田井中遺跡 95-2区植物珪酸体 (1)	271
写真7	田井中遺跡 95-2区植物珪酸体 (2)	272
写真8	志紀遺跡 95-2区珪藻化石 (1)	273
写真9	志紀遺跡 95-2区珪藻化石 (2)	274
写真10	志紀遺跡 95-2区花粉化石 (1)	275
写真11	志紀遺跡 95-2区花粉化石 (2)	276
写真12	志紀遺跡 95-2区植物珪酸体	277
写真13	田井中遺跡 96-1区堆積物中の珪藻化石	285
写真14	田井中遺跡 96-1区の花粉化石 (1)	293
写真15	田井中遺跡 96-1区の花粉化石 (2)	294
写真16	田井中遺跡 96-1区の花粉化石 (3)	295
写真17	田井中遺跡 96-1区のプランツ・オ・パール	300
写真18	田井中遺跡 95-2区動物骨 (1)	308
写真19	田井中遺跡 95-2区動物骨 (2)	309
写真20	田井中遺跡 95-2区動物骨 (3)	310
写真21	田井中遺跡 植物遺体	315
写真22	田井中遺跡 モモ核	316
写真23	田井中遺跡 95-2区土器付着炭化物	319
写真24	田井中遺跡周辺の戦争遺跡	376

## 写真図版

写真図版1	95-2区 第1面	
写真図版2	95-2区 遺構1	
写真図版3	95-2区 遺構2	
写真図版4	95-2区 第2面	
写真図版5	95-2区 遺構3	
写真図版6	95-2区 第0層出土土器	
写真図版7	95-2区 第1面遺構出土土器1	
写真図版8	95-2区 第1面遺構出土土器2	
写真図版9	95-2区 第1面遺構出土土器3	
写真図版10	95-2区 第1面遺構34出土土器	
写真図版11	95-2区 第1面土坑188出土土器1	
写真図版12	95-2区 第1面土坑188出土土器2	
写真図版13	95-2区 第1面土坑188出土土器3	
写真図版14	95-2区 第1面土坑188出土土器4 ・土器95出土土器	
写真図版15	95-2区 第1層出土土器	
写真図版16	95-2区 第2面遺構出土土器1	
写真図版17	95-2区 第2面遺構出土土器2	
写真図版18	95-2区 第2面溝590出土土器	
写真図版19	95-2区 第2面土坑657出土土器	
写真図版20	95-2区 第3面落込a48出土土器1	
写真図版21	95-2区 第3面落込a48出土土器2	
写真図版22	95-2区 第3面落込a48出土土器3	
写真図版23	95-2区 第3面落込a48出土土器4	
写真図版24	95-2区 第3面落込a48出土土器5 ・溝889出土土器	
写真図版25	95-2区 打製石器1 (石錐・石小刀・石錐)	
写真図版26	95-2区 打製石器2 (尖頭器およびその未成品)	
写真図版27	95-2区 打製石器3 (石剣)	
写真図版28	95-2区 打製石器4 (スクレイバー)	
写真図版29	95-2区 打製石器5 (楔形石器・その他)	
写真図版30	95-2区 打製石器6 (石核)	
写真図版31	95-2区 磨製石器1 (紡錘車・石矛・石錐・剥片石器)	
写真図版32	95-2区 磨製石器2 (石斧)	
写真図版33	95-2区 磨製石器3 (砥石・敲打石)	
写真図版34	95-2区 磨製石器4 (石廻丁1)	
写真図版35	95-2区 磨製石器5 (石廻丁2)	
写真図版36	95-2区 磨製石器6 (石廻丁未成品)	
写真図版37	95-2区 土製品	
写真図版38	95-2区 木製品	
写真図版39	94-1区 遺構1	
写真図版40	94-1区 遺構2・南辺断面・遺物出土状況	
写真図版41	94-1区 第1面・第2面遺構出土土器・土製品	
写真図版42	94-1区 第2面溝2出土土器	
写真図版43	94-1区 第2面溝2出土石器	
写真図版44	94-1区 第3面溝4出土土器・石器	
写真図版45	94-1区 ⑩層・⑪層・⑫層出土土器・石器・土製品	
写真図版46	94-1区 ⑬層出土石器1	
写真図版47	94-1区 ⑬層出土石器2	
写真図版48	94-1区 ⑭層出土土器1・土製品	
写真図版49	94-1区 ⑭層出土土器2	
写真図版50	94-1区 ⑭層出土土器3・石器	
写真図版51	94-1区 ⑭層出土土器4・⑮層出土土器1	
写真図版52	94-1区 ⑭層出土土器2・土製品	
写真図版53	94-1区 ⑭層出土土器3・⑯層・⑰層出土土器	
写真図版54	94-1区 ⑯層出土石器	
写真図版55	96-3区 第5面・第6面	
写真図版56	96-3区 土器	
写真図版57	96-1区 第1面・第2面	
写真図版58	96-1区 第3面・第3面遺構1	
写真図版59	96-1区 第3面遺構2・第4面	
写真図版60	96-1区 上器	
写真図版61	95-1区 磨製石器・玉類	
写真図版62	96-2区 第1面・遺構	
写真図版63	96-2区 第2面・第3面	
写真図版64	96-2区 第4面	
写真図版65	96-2区 土器1	
写真図版66	96-2区 土器2	
写真図版67	96-1区 第2面	
写真図版68	96-1区 第3面	
写真図版69	96-1区 第3面遺構	
写真図版70	96-1区 第4面	
写真図版71	96-1区 第5面	
写真図版72	96-1区 第6面・第7面	
写真図版73	96-1区 土器1	
写真図版74	96-1区 土器2	
写真図版75	96-1区 土器3	
写真図版76	96-1区 土器4・鉄製品	
写真図版77	96-1区 第1面・第2面	
写真図版78	96-1区 第3面	

## 第1章 調査に至る経緯と経過

**既往の調査** 田井中遺跡の発見は意外と新しい。1975年陸上自衛隊八尾駐屯地内の下水道工事で弥生土器が出土し、その存在が周知された。その後駐屯地内の施設整備に伴い、本格的な発掘調査が<sup>1)</sup>八尾市文化財調査研究会によって実施され、実態が徐々に明らかになった。以下駐屯地正門より西側を駐屯地区、東側を駐屯地東区と呼称し、前者より略述する。

1982年実施された1次調査は、遺構面数をはじめとする情報が全くなかったこともあり、盛土以下順次人力によって掘削された(図1-1)。その結果、表土下約1.5mまでは無遺物層となされたが、T.P.+9.2m付近に弥生時代前期～古墳時代中期の黒色包含層を確認し、小穴群を確認した。なおこのデータはその後の調査の基礎となる。続く2次調査では、弥生中期及び古墳中期の遺構を検出した(同2)。

3次・4次調査は1987年・1988年に実施され、小面積ながら弥生前期～古墳中期にかけての遺構群を確認した(同3・4)。このうち4次調査地は、本報告にある95-1区西側に接する地点に位置する。

1993年の調査は計約2000m<sup>2</sup>に及び、駐屯地西端では弥生前期末～中期初頭の堅穴住居4棟や古墳時代初頭の掘立柱建物2棟、さらには同中期初頭の古墳1基など多数の遺構とともに、コンテナ500箱近い遺物が出土した(同6)。また本書95-2区西側の調査区でも、弥生時代の堅穴住居1棟を含む多くの遺構がみつかり、田井中遺跡の中心部分が駐屯地西側に展開することを明らかにした(同7)。

駐屯地東区の調査はほとんどなく、1988年に実施された駐屯地東端での試掘調査が嚆矢となる。本格的な調査は1992年に実施されたが、T.P.+9.6～9.8mで平安時代末の水田面を、T.P.+9.4m付近で古墳時代中後期の遺構面を、さらにT.P.+9.1m付近で弥生前期末の遺構を確認した(同5)。しかし駐屯地西区と比較すると、黒色包含層の堆積もみられず、遺構・遺物ともに些少である。

一方大阪府教育委員会は、駐屯地西方にある八尾空港北濠・平野川の改修工事などに先立ち、1988年以来数次にわたる調査を実施し、現在も継続中である。一連の調査では、縄文時代晩期の自然河川や、3期に分れる弥生時代前期の環濠をめぐらせた集落を発見した。しかしこの前期集落の東側では、中期初頭以降の遺構・遺物は激減するようで、当時の集落域が駐屯地西側へ移動したものと推測される。

さて駐屯地南西に位置する八尾空港では、1982～1984年にかけて空港内整備事業に伴う発掘調査が実施されている(木の本遺跡)<sup>7)</sup>。この調査ではT.P.+8.8m付近で古代の条里水田跡を検出し、駐屯地に近いB滑走路北側で弥生中期～古墳前期の遺構を検出したという。

田井中遺跡の北東に隣接する志紀遺跡は、1983年府営住宅建設に際して発見された。その後府営住宅改築に伴い、大阪府教育委員会や<sup>8)</sup>八尾市文化財調査研究会などが継続的な調査を実施し、弥生時代前期～古墳時代中期に至る耕作面を検出している。

**調査に至る経過** アジア太平洋戦争後の1954年、当地には陸上自衛隊が伊丹分屯地を開設、1974年八尾駐屯地に昇格する。その後も諸部隊の整備・拡充に伴い、駐屯地内の諸施設新築を実施してきたが、今回の調査は、隊員宿舎・体育館厚生センター・整備格納庫および付帯施設建設に伴うものである。

既述したように、これまで駐屯地内の調査は<sup>1)</sup>八尾市文化財調査研究会が行ってきたが、大阪防衛施設局と大阪府教育委員会による協議の結果、1994年は<sup>9)</sup>大阪府埋蔵文化財協会が、1995～1996年は<sup>10)</sup>大阪府文化財調査研究センターが、それぞれ委託契約を締結し調査を実施した。

**トレンチ位置** 今回の田井中遺跡の調査地点は6ヶ所で、調査着手順に94-1区(同8)、95-1区(同9)・95-2区(同10)、96-1区(同11)・96-2区(同12)・96-3区(同13)と呼称する。志紀遺跡は95-1・2区(同14)である。



図1 調査位置

## 第1章 注

- 1) 姫八尾市文化財調査研究会 1989 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和63年度』
- 2) 姫八尾市文化財調査研究会 1995 『田井中遺跡』
- 3) 姫八尾市文化財調査研究会 1994 『平成5年度姫八尾市文化財調査研究会事業報告』
- 4) 八尾市教育委員会 1989 『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書』 II
- 5) 注2) と同じ
- 6) 大阪府教育委員会 1991 『田井中遺跡発掘調査概要』 I  
大阪府教育委員会 1992 『田井中遺跡発掘調査概要』 II  
大阪府教育委員会 1993 『田井中遺跡発掘調査概要』 III  
大阪府教育委員会 1994 『田井中遺跡発掘調査概要』 IV  
大阪府教育委員会 1996 『田井中遺跡発掘調査概要』 V
- 7) 姫八尾市文化財調査研究会 1984 『木の本遺跡』
- 8) 大阪府教育委員会 1986 『志紀遺跡発掘調査概要』  
大阪府教育委員会 1992 『志紀遺跡発掘調査概要』 II  
大阪府教育委員会 1993 『志紀遺跡発掘調査概要』 III  
大阪府教育委員会 1995 『志紀遺跡発掘調査概要』 IV
- 9) 姫八尾市文化財調査研究会 1985 『昭和59年度事業概要報告』
- 10) 姫八尾市文化財調査研究会 1986 『昭和60年度事業概要報告』
- 11) 姫八尾市文化財調査研究会 1987 『昭和61年度事業概要報告』
- 12) 姫八尾市文化財調査研究会 1988 『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』
- 13) 姫八尾市文化財調査研究会 1989 『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』
- 14) 大阪府埋蔵文化財協会 1995 『志紀遺跡』

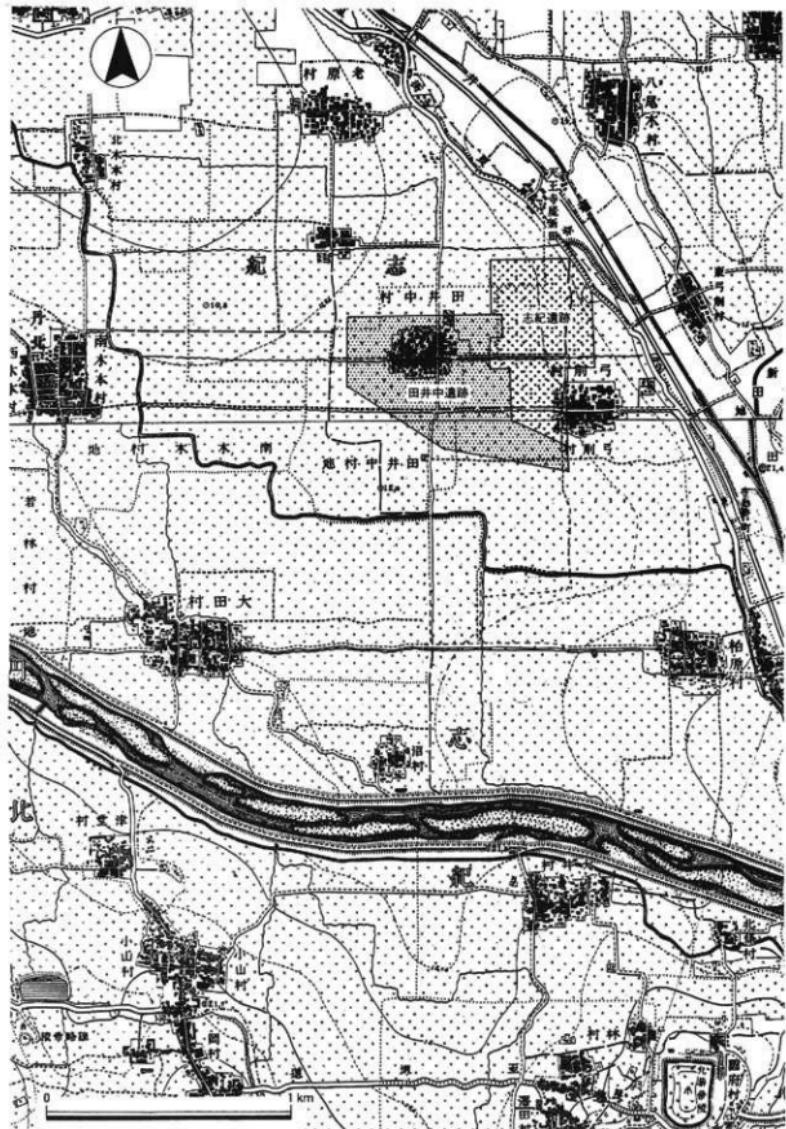
## 第2章 位置と環境

田井中遺跡（田井中1～4丁目、志紀町西2丁目、空港1丁目所在）と志紀遺跡（志紀町西1～4丁目、東老原2丁目所在）は、生駒山地・上町台地・淀川・羽曳野丘陵によって東西南北を囲まれた、河内平野の南部に位置する。旧大和川・長瀬川・玉串川・平野川などの大小河川が北または北西方向に流れ、これらの河川による河内湾・河内潟への沖積作用を繰り返しながら陸地化したのが河内平野である。この地で生活する人々にとって、これら大小河川によって引き起こされる災害は、時に生命を脅かすほどの多大な影響をおよぼしたものであると考えられる。平野川の自然堤防上に立地する田井中遺跡や、埋没開析谷内に位置する志紀遺跡においても同様で、常に自然の影響を受け、また巧みにそれを利用しながら集落を営み発展させていったものと思われる。



『大阪府文化財分布図』（大阪府教育委員会文化財保護課（1996）より遺跡範囲を抜粋し、  
国土地理院 1:50,000地形図「大阪東南部」（1997）に加筆

図2 田井中・志紀遺跡周辺の主要遺跡分布



陸地測量部叢書地図 1 : 20,000 「國分村」・「八尾」 (1885年測量)

図 3 田井中・志紀遺跡周辺の地形

田井中・志紀両遺跡周辺には、東に東弓削遺跡・弓削遺跡・恩智遺跡、西に木の本遺跡・八尾南遺跡・長原遺跡、南に船橋遺跡、北に老原遺跡・植松遺跡・矢作遺跡・中田遺跡・小阪合遺跡が位置している。以下、これら周辺の遺跡も加味しながら、田井中遺跡・志紀遺跡の環境とその変遷について概観していく事とする。

**縄文時代後期** 志紀遺跡・田井中遺跡におけるこれまでの調査において、最も古く遡る事ができるのは縄文時代後期である。しかし、当該期の遺構・遺物を検出した志紀遺跡においてもその量はごく僅かであり、実態は不明である。<sup>1)</sup>

**縄文時代晩期～弥生時代前期** 縄文時代晩期終末の刻み目突帯文土器の時期では、田井中遺跡において集落の一端が検出されている。<sup>2)</sup>しかし不明瞭な部分が多く、付近に存在する弥生時代前期古～中段階の集落との関係など、多くの課題を残しているのが現状と言えよう。またこの時期、多くの調査区で当該期に比定し得る自然河川が検出されている。志紀遺跡においても同様で、包含層から遺物の出土はあるものの、明瞭な遺構は検出されていない。この時期の代表的な遺跡としては、羽曳野丘陵北端に営まれている長原遺跡<sup>3)</sup>・船橋遺跡<sup>4)</sup>を挙げる事ができる。特に長原遺跡においては、当該期の集落と墓域が確認されている。ここでは、縄文時代晩期終末の刻目突帯文土器が主体的に使用され、弥生の壺がわずかに出土する事がわかっている。

縄文時代晩期以前は、断片的な情報しか得られなかった田井中遺跡において、本格的な集落が出現する時期が弥生時代前期中段階である。集落の範囲と考えられている中でも、付近に縄文時代晩期終末の集落が存在すると考えられている範囲において、若干古い様相がみられる。ここでは、弥生土器を主体としながらも、全ての遺構において数%の刻み目突帯文土器が出土しており、長原遺跡とは対照的な出土状態を示す。この時期以降、田井中遺跡では中心部分を移動しながらも、継続的な集落經營が行われ、新段階には当初の中心地よりも東方に移動した地点で、集落が発展していると想定される。このような、田井中遺跡における集落の存続・発展は、志紀遺跡における当該期の水田の存在と不可分の関係にあると思われる。これまでの調査の結果、志紀遺跡では当該期の水田が部分的に検出されており、その状況から水田が辺り一面に広がっているというよりは、条件の良い場所を選択して耕作を行っている様子が伺える。なお周辺遺跡においては、八尾南遺跡で水流の激しい自然河川やしがらみなどの遺構が、長原遺跡では新段階の水田が検出されている。<sup>5)</sup>

**弥生時代中期～後期** 中期になると、周辺の遺跡では東弓削遺跡・弓削遺跡・木の本遺跡が出現する。田井中遺跡においては、中期前半の遺構・遺物が顕著にみられる。特に、大阪府教育委員会が平成3年度に発掘調査を実施した調査区では、2基の木棺が検出されており、その内の1基（1号木棺墓）の周囲には、方形周溝がめぐっている。田井中遺跡では、前述のように中期前半の遺構・遺物は多いのであるが、後半になると希薄になる事が看取される。一方、志紀遺跡では中期初頭（II様式）から、本格的な水田經營が開始されるようであるが、中期中頃（III様式）以降の遺構面が今のところ検出されておらず、次に現れるのは後期になってからである。

後期における周辺の遺跡としては、八尾南遺跡で居住域と12基の方形周溝墓が検出されているほか、新たに小阪合遺跡・中田遺跡が現れる。田井中・志紀両遺跡においても当該期の遺構・遺物が、散在的に検出されている。<sup>6)</sup>

**古墳時代** 田井中・志紀両遺跡周辺の遺跡は前代から引き続く形で、小阪合遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡・弓削遺跡・木の本遺跡・八尾南遺跡等で活発な人間活動の痕跡が見出される。特に八尾南遺跡では、

初期須恵器と韓式系土器を伴う遺構のほか、八尾南1号墳が検出されており、長原古墳群と共に当該期の墓制を考える上で、貴重な資料を提供している。田井中遺跡では若干の遺構・遺物は検出されているものの、全体的に見ると中期を境に衰退していくようである。他方、志紀遺跡においては、安定した水田の運営が連続と行われており、中期を境に収束していく田井中遺跡とは対照的である。<sup>17)</sup>

歴史時代 田井中・志紀両遺跡周辺における奈良時代の遺跡としては、東弓削遺跡・弓削遺跡・小阪合遺跡がある。田井中遺跡・志紀遺跡では明瞭な遺構・遺物はみられない。

平安時代から鎌倉時代にかけては、老原遺跡において水田・井戸・溝をはじめとした遺構・遺物が検出されている。志紀遺跡においては、この時期条里水田が多く検出されており、田井中遺跡においても同様である。すなわち、田井中遺跡・志紀遺跡一帯では、この時期から後は耕作地としての利用が主であったようで、周辺には田畠が広がっていたと思われる。

江戸時代前期の宝永元（1704）年、大和川は8ヶ月余りの期間で付替えが行われた。この改修によって大和川の氾濫が減少し、新たに開発された新田では主に木綿・大根などの栽培が行われた。周知の事ではあるが、河内木綿が盛大を極めたのもこの改修に依拠するものである。しかし、北・中河内に多大な耕地をもたらした改修工事も、大和川が運ぶ土砂の堆積により、中世以来の栄華を誇っていた堺の港にかけりをもたらすこととなる。

## 第2章 注

- 1) 秋山浩三氏に御教示いただいた。
- 2) 大阪府教育委員会 1994 『田井中遺跡発掘調査概要・IV』
- 3) 大阪府教育委員会 1994 『田井中遺跡発掘調査概要・IV』  
大阪府教育委員会 1996 『田井中遺跡発掘調査概要・V』
- 4) 大阪市文化財協会 1983 『長原遺跡発掘調査報告III』
- 5) 平安学園考古クラブ 1972 『船橋』I・II合冊
- 6) 大阪府教育委員会 1996 『田井中遺跡発掘調査概要・V』
- 7) 秋山浩三氏に御教示いただいた。
- 8) 八尾南遺跡調査会 1981 『八尾南遺跡』  
㈱八尾市文化財調査研究会 1988 『八尾南遺跡（第5次調査）』 『八尾市文化財調査研究会年報昭和62年度』
- 9) ㈱大阪市文化財協会 1984 『発掘された大阪』  
趙哲済ほか 1987 「大阪市長原遺跡の地層と鍾火山灰層について」（第22回埋蔵文化財集会『火山と考古学をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会・鹿児島集会実行委員会）
- 10) 八尾市教育委員会 1976 『東弓削遺跡』
- 11) ㈱八尾市文化財調査研究会 1985 「弓削遺跡」 『昭和59年度事業概要報告』
- 12) 八尾市教育委員会 1983 「木の本遺跡発掘調査概要報告」 『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報』1980・1981年度
- 13) 大阪府教育委員会 1992 『田井中遺跡発掘調査概要・II』
- 14) 8) に同じ
- 15) ㈱八尾市文化財調査研究会 1990 『小阪合遺跡』
- 16) ㈱八尾市文化財調査研究会 1995 『中田遺跡』
- 17) 8) に同じ
- 18) 八尾市教育委員会 1983 「老原遺跡発掘調査概要報告」 『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報』1980・1981年度  
㈱八尾市文化財調査研究会 1987 『老原遺跡（第2次）』 『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要』昭和61年度
- 19) 八尾市役所 1988 『八尾市史（前近代）』本文編

## 第3章 調査・整理の方法

### 第1節 調査の方法

**調査区の位置** 田井中遺跡は、大阪府八尾市田井中1～4丁目・志紀町西2丁目・空港1丁目に所在する。そのなかで、本書に報告する田井中遺跡94-1・95-1～2・96-1～3区は、八尾市空港1丁目に位置する。

志紀遺跡は八尾市志紀町西2丁目・東老原2丁目に所在し、志紀遺跡95-1～2区は、八尾市志紀町西2丁目に位置する。

遺跡の範囲は第2章を、また調査区の配置は第1章参照。

**調査区の呼称** たとえば「田井中遺跡96-2区」の遺跡名の後の数字〔96-2〕は、1996年度に発掘した調査区のうち2番目ということを示す。田井中遺跡は、1994年度は財大阪府埋蔵文化財協会が1か所(94-1区)、1995年度は財大阪府文化財調査研究センターが2か所(95-1・2区)、1996年度は同センターが3か所(96-1～3区)調査した。また、志紀遺跡でも1995年度に同センターが2か所(95-1・2区)調査を行った。

**地区割り** 本書では、財大阪府埋蔵文化財協会が定めた地区割りに則り、国土座標第VI系(原点 東経136° 00' 北緯36° 00'・福井県越前岬付近)を基準として使用する。調査時には4×4m四方の区画にアルファベット大文字と数字の組み合わせによる5文字の地区名を冠し、位置を特定した。

**方位** 地区割り同様に国土座標に則り、座標北を採用した。磁気の偏角は時につれ変化するが、調査時点で調査区の座標北は、磁北より東へ6° 40'、真北より西へ13' 14"振れていた。

**高さ** 東京湾平均海面(T.P.)を適用した。なお、T.P.と大阪湾低潮位(O.P.)とは、T.P.+0.0m=O.P.+1.3mの関係にある。

**面と層の呼称法** 機械掘削を終了し人力による調査の開始される面を第1面と呼び、以下、上から順に面の番号を付す。層名は第1面と第2面との間の層を第1層とし、以下同様である。ただし、田井中遺跡95-2区では機械掘削停止面から第1面までの層も人力掘削しており、これを第0層と呼ぶ。なお、ここでいう「第\_層」はあくまでも掘削と遺物取り上げの単位であり、ある面と次の面との間の堆積は土層観察の結果「○層」に細分されることがある。

**遺構番号** 田井中遺跡では、複数の調査機関の複数の担当者が15カ年にわたって多くの区に分けて調査したので、遺構番号の付け方は調査年度によって異なる。本書に報告する1994～1996年度では、次のようにになる。

94-1区では、財大阪府埋蔵文化財協会の発掘調査規定に則って、遺構の種類にかかわらず、発見順に通し番号を付けている。この年度では、1つの調査区で満4条を検出しただけなので、混乱は生じていない。

95-1・2区でも、同様に財大阪府埋蔵文化財協会の発掘調査規定に則っているが、1・2区を分けずに通し番号を付けている。そのため、遺構の種類や数については、各調査区の報告を参照されたい。

96-1～3区では、調査区ごとに、遺構の種類にかかわらず発見順に通し番号を付けた。したがって、各調査区の最終の遺構番号が検出遺構数に一致する。

本来であれば、調査年度によって異なるこのような扱い方は報告の際に是正すべきではあるが、すでに整理途上にある図面や写真的ラベルに混乱をきたさないように、改訂を一切せずに踏襲する。

**遺構面の対照** 本書での田井中遺跡の報告対象は、1994年度から1996年度の3か年にわたる6調査区である。担当者が異なり調査区が離れていたこともあり、遺跡の基本層序の作成にまでは至らず、各調査区ごとに遺構面番号を付してきた。そのため、同一呼称の面であっても、調査区が異なれば違う面を指すことになった。ただし、隣接する調査区では面の対照ができるものもあり、具体的には以下に記す面がそれぞれ同一遺構面と考えられる。94-1区第1面と96-3区第4面、94-1区第3面と96-3区第6面、95-1区第2面と96-1区第2面、95-1区第4面と96-1区第4面。

**遺物の取り上げ** 遺構出土の遺物は検出遺構（遺構埋土の状況によっては遺構内の層位）別に、包含層の遺物は層位的には「第<sub>1</sub>層」ごとに平面的には国土座標の4×4mの単位で取り上げたが、必要に応じて出土位置を3次元で記録した。遺物登録番号は取り上げ単位ごとに付した。

**図面作成** 面ごとの調査区全体図は、航空測量または平板測量で縮尺1/20～1/200で作成した。他の図面はすべて手描きで、土層断面図は縮尺1/20に統一して幅10mごとに1枚の図面に記録し、単独の遺構平・断面、遺物出土状況などは任意に図化した。

**各種分析** 花粉分析、珪藻分析、プランツ・オパール分析、サヌカイトの産地同定、石材の顕微鏡鑑定、木材の樹種鑑定、種子同定、などの分析を依頼ないし委託した。花粉分析、珪藻分析、プランツ・オパール分析、種子同定、以上の成果は第11章に掲載する。サヌカイトの産地同定については、別稿での公表を予定している。その他の石材と樹種は各遺物の項で述べる。

## 第2節 整理の方法

田井中遺跡では、調査区ごとに各担当者が遺物などの整理にあたった。

田井中遺跡の94-1区については、林が担当した。

田井中遺跡1995・1996年度調査分の遺物は、現場で洗浄・注記などの基本整理を終え、一部接合・復元・実測まで行った。図面・写真も調査中に整理した。内業に入り、担当者間の協議の下、95-1・2区の遺構と両年度のサヌカイト製石器を駒井が、96-1～3区の遺構・遺物と磨製石器類を本間が、1995年度の大量の土器などを田坂が、主に整理し調査補助員がこれを助けた。

志紀遺跡95-1・2区は、岩崎が担当した。

**弥生時代前期土器の分類** 本書で報告する、過去3年間に行った田井中遺跡の調査によって、主として弥生時代前期～古墳時代中期までの土器が出土した。その中でも特に95-2区の調査によって、大量の弥生時代前期の土器が出土し、それらを報告するためにも一度土器の形態分類を行い、整理をする必要があると思われる。形態分類を行うにあたっては、先学諸氏により行われている分類を基本的に踏襲することとしたが、本遺跡の実情に沿う形にするため一部改変した箇所がある。それについては下記の分類基準の中で触れることとし、混乱を解消するために対照表（表1）を掲載する。なお本報告書では、ここで提示する形態分類に則って弥生時代前期土器の報告を進めていく。

- 壺 —— a 1 — 口縁部は短く外反し、頸体境には段をもつものがある。調整は基本的に内外面とも横方向のミガキを施しているが、頸体部に縱方向のミガキを行っているものも若干みられる。個体数が少なく、主要な構成要素ではない。
- a 2 — a 1に比べると口縁・腹径共に大きく発達しており、器高と腹径がほぼ等しい。調整は基本的に、内外面とも横方向のミガキ。
- b — 球形に近い体部に、長い頸部と大きく開く口縁部をもつ。個体数は少ない。

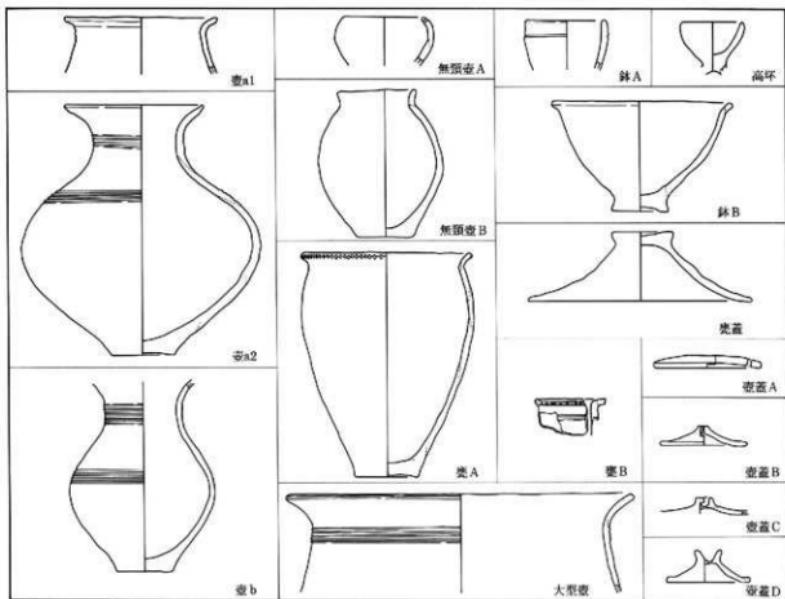


図4 弥生時代前期土器形態分類 (S=1/6)

大型壺 ————— 口径20~30cm前後で、上記した壺の形態のいずれにも属さないもの。全体を何うものは不明であるが、調整は基本的に内外面とも横方向のミガキ。

無頸壺 A — 口縁部が直行しており、かつ内向するもの。調整は内外面とも横方向のミガキ。

B — 口縁部が短く外反するもの。調整は、内外面とも横方向のミガキ。

壺 A — 外反する口縁をもち、体部は倒鐘形のもの。調整は、基本的に口縁部は横方向のナデ、体部は内外面とも不定方向のハケ（又は板ナデ）かナデ。まれに、内外面にミガキあり。

B — 口縁端部に外接して粘土紐を貼り付け、口縁が逆L字状を呈する。倒鐘形の体部をもつ。口縁部の小破片が数点出土しているのみで、調整は不明瞭である。

鉢 A — 口縁部が直口するもの。

B — 口縁部が外反するもの。

A・B共に把手を備えたものがある。調整は内外面とも横方向のミガキ。

高坏 ————— 椭形の坏部をもつもの。出土数が少なく、詳細は不明。

壺蓋 ————— 直径20~30cm前後で笠形のもの。調整は内外面とも横方向のミガキ。まれにハケ。

壺蓋 A — 円板状のもの。調整は内外面ともミガキ。

B — 笠形のもの。調整は内外面ともミガキ。

C — 笠形で中凹みの環状つまみ又はつまみをもつもの。調整は内外面ともミガキ。

D — 笠形でつまみが突起状に2つに分かれたもの。調整は内外面ともミガキ。

表1 弥生時代前期土器分類対照

	壺		無頸壺				甕		鉢		高坏		壺蓋								
	a	b	A		B	口縁外反・倒錐形			A	B	A	B	円盤状のもの	笠形のもの	覆口状・中凹み	笠形・つまみ突出	起状にわかれが突	壺蓋	大型變形土器		
佐原 1968																		壺蓋			
井藤 1981	a	b	b	c	d	a	A	B	C				口縁直口	口縁外反	楕形の坏部				壺蓋	大型の變	
陣内 1991	a	b	B	C			A	A	B	C	D	B	A	A	B	A	B	壺蓋	大壺壺		
本報告	a1	a2	b		A		B	A		B		A	B		楕形の坏部	A	B	C	D	壺蓋	大型壺

なお、各器種毎にミニチュアが出土しており、おおむね口径が8cm以下のものを呼称する際に用いることとする。また、蓋類を除いて器種名の頭に小型と付く場合は、口径9cm~12cmのものを示し、壺以外で大型と付く場合は、口径30cm以上のものを指し示すものとし、特に断りの無い場合は、中型を示している事とした。

**土器観察の表現方法** 本報告書を作成する際、多量の土器をどのように報告するかということが課題の1つであった。本来ならば、個々の土器について器形・調整・文様・焼成・色調・胎土などの観察結果を記述するべきではあるが、記述が繁雑になることや、紙面の関係上割愛しなくてはならない箇所が多くある。故に、個々の土器から得られる情報はできるだけ図面の中で表現するよう心掛けたつもりである。なお、図面によって伝達できない情報（焼成・色調・胎土など）は、特に目についたものに関してのみ記述するようにし、肉眼観察で生駒西麓産と判断できる胎土を有するものには遺物番号に○を付けた。調整については、本報告書の中において極力統一をとるように心掛けた。基本的に今まで用いられてきた表現方法と異なる所はないと思われるが、誤解の生じないよう以下に凡例をあげる（図5）。なお、ミガキ・ハケ・板ナデ・タタキなどで傾きの分かるものには、用語の前にタテ・ヨコ・ナナメ・右上がり・左上がりという言葉を付け、ヘラミガキなど調整を行う際の方向が分かるものには、右回り・左回りなどと表現する事とした。また、口縁などを整形する際に、指で皮などを挟んで横方向にナデている事を指す言葉として、「横方向のナデ」あるいは「ヨコナナデ」という用語を用いているが、図面では具体的に表現していない。ただし、その範囲の分かるものに関しては、図面上に二本線（真中で一旦途切れた線）を記入する事で表現する事とした。

**サヌカイト類の分類** 3ヵ年にわたる調査で約4500点出土した。整理作業では、まずこれらを成品・未成品・2次加工のある剝片・微細剝離のある剝片・剝片・碎片・石核に分け、さらに成品は、石鐵・石

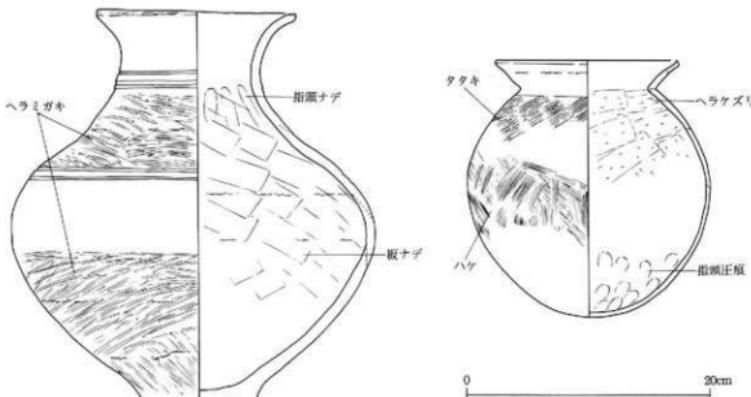


図5 土器調整凡例

小刀・石錐・尖頭器・石剣・スクレイバー・楔形石器に分類し、各々大きさ・重量を計測した。その際成品類は、長軸方向を長さとし、それに直交する方向を幅とした。また2次加工のある剝片・微細剝離のある剝片・剝片については、原則的に剝片剝離軸を基準として、全体を内包する長方形の長辺・短辺を計測した。以下分類基準を記す。

石錐・尖頭器：おおむね長さ5cm以下のものを石錐とし、10cm以下のものを尖頭器とする。

石小刀：外彫する外側の刃部と、内彫もしくは直線形の内側の刃部を対応にもつ細長い石器。<sup>2)</sup>

石剣：石槍・石剣もしくは畿内式打製尖頭器と呼ばれている、大型の打製尖頭器。

スクレイバー：素材剝片の少なくとも一側縁に、片面もしくは両面に調整剝離を施し、刃部を作出した石器。

楔形石器：表裏両面が上下双方からの剝離面で覆われ、両極打撃により製作されたと考えられる石器。<sup>3)</sup>

未成品：上記成品への加工途上とみなしうるもの。

2次加工のある剝片：剝片の縁辺部に非連続の調整剝離を施したもの。

微細剝離のある剝片：剝片の縁辺部に微細な剝離のあるもの。ただし人為的・非人為的の区別は不明。

碎片：石核などから剝離された破片のうち、便宜的に2~3cm四方以下の破片。

なお図示した石器については、左側をA面・背面、右側をB面・腹面と称する。

### 第3章 注

1) 佐原 真 1968 「近畿地方」 『弥生式土器集成 本編2』 東京堂出版

井藤曉子 1981 「入門講座弥生土器—近畿1—」 『月刊考古学ジャーナル』 No.195 ニューサイエンス社

陣内暢子 1991 「第Ⅳ章 遺物 第1節 遺構別・包含層別遺物の概略」 『河内平野遺跡群の動態II』 大阪府教育委員会・歴大阪文化財センター

2) 森本 晋 1985 「石小刀」 『弥生文化の研究』 5 雄山閣出版

3) 光石鳴巳 1996 「第6章 検出遺構と出土遺物の検討 第2節 長滻・安松遺跡出土の石器」 『植田池・長滻・安松遺跡』 勤大阪府文化財調査研究センター

## 第4章 田井中遺跡95-2区の調査成果

### 第1節 層序

95-2区は約400m<sup>2</sup>の小面積ながら、ほぼ中央を鋼矢板にて2地区（以下西区、東区と称する）に分断されている。そこで土層観察用の断面を東区東辺および南辺に設定したが、攪乱に加え、切梁など設置するため、記録前に上層部の掘削を余儀なくされた。さらに断面清掃直後、降雨に伴う崩落が生じ、上半部の記録はほとんど取れなかった。

さて今回の調査では、従前の調査成果を参考に現地表面T.P.+11.3mから2m余りを機械掘削した。図6では①～④層までが該当するが、①・②層には40cm近い砂層が堆積する。なお調査区東辺・南辺に設定した土層観察用断面を撤去する際、①～④層では須恵器8点、土師器29点、弥生土器104点（後期1点、中期3点、前期1点）、サヌカイト類2点が出土した。人力掘削は⑤層以下に対して実施した。

第0層は⑤～⑨層に対応するが、機械掘削層同様ほぼ水平堆積を示すものの、層厚は平均40cm、最大60cmにも及び、次のような膨大な遺物を包含する。黒色土器A類2点、須恵器42点、瓦1点、韓式系上器1点、土師器3157点、弥生土器33719点（うち後期796点、中期2702点、前期876点）、サヌカイト類1357点、磨製石器45点、玉類1点、木製品2点、土製円板27点、紡錘車2点、土鍾3点、土弾1点、製塙土器2点、合計38362点が出土した。この数字は、95-2区出土全遺物点数の約27%を占める。なお断面観察をした際には、第0層上面から切り込む遺構は確認できなかった。

これに対して層厚約30cm、最大50cmにおよぶ第1層は、極めて多くの遺構による複雑な切り合い関係を示す。つまり頻繁な活動を暗示する。しかし第1面上でその諸関係を把握できたものは、残念ながら東辺の溝384埋土5・6層、土坑380埋土7～9層、土坑395埋土11～20層、南辺の溝334埋土26層に過ぎず、ごくわずかといわざるをえない。また断面観察の結果、同層上面には著しい凹凸の存在が明らかとなつたが、実際の調査では凹凸を無視して水平に掘削したため、一部の遺構には時期の異なる遺物が混入する結果をまねいた。さらに46・47層、48層、49層、50層、51層、52層の存在は、第1層中に検出できなかった遺構面があったことを示している。

ここで第1層出土遺物を列記する。土師器3点、弥生土器7034点（うち中期126点、前期1239点）、縄文土器3点、サヌカイト類115点、磨製石器4点、土製円板8点、土鍾3点、土弾1点、合計7171点である。弥生土器から判断すると、前期を主体としつつも一部中期にまたがる可能性がある。

第2層は断面図上では東辺の60層のみである。色調は第1層と調査区の基盤層である⑫層などとの間色を呈し、調査でも「わずかな汚れ」を除去するという程度で、西区では検出できなかった層である。従って出土遺物も激減し、弥生土器1483点（うち後期1点、中期12点、前期260点）、サヌカイト類38点、磨製石器1点、土製円板2点の、合計1524点である。この出土遺物をみると、第2層は弥生前期に帰属する可能性が高い。

第3層、つまり当調査区の基盤層は、⑪層に代表される2.5GY3/1緑灰色微砂である。予定された掘削深度、調査期間の関係で、調査区内には確認トレンチを設定することはできなかつたので、下層の状況は明らかではない。

なお⑬層としたのは、地震に伴う液状化現象（噴砂）の痕跡である。この噴砂は、南辺断面西隅付近でも確認できた。後述するように調査では、第2面検出時に東区内の数ヶ所で確認することができ、寒川旭氏にご来訪、ご教示をいただいた。

## 田井中遺跡95-2区の調査成果

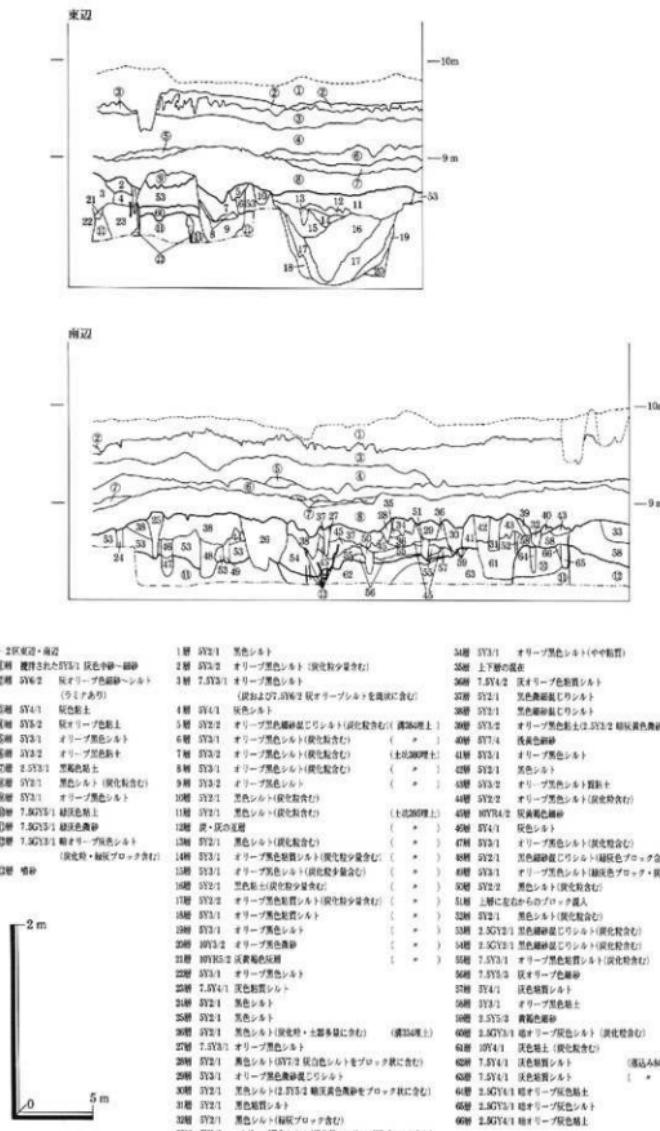


図 95-2 区 東辺・南辺断面

## 第2節 遺構

95-2区では3つの遺構面を検出した。第1面では弥生時代中期から古墳時代前期に至る堅穴住居1軒、土坑199基、井戸4基、溝13条、ピット116基を、続く第2面は、溝4条、土坑78基、ピット361基を検出した。第3面は東区で確認したが、落込みから大量の弥生前期の土器が出土した。

第1面(図7) ⑧層(一部では⑨層)掘削後に検出した遺構面であるが、既述したように、この上面を忠実に掘り出すことは極めて困難で、かなり時期差のある遺構を同一面で検出する結果となった。さらに本来の複雑に切り合った遺構すべてはもちろん、検出遺構の範囲認定にもかなりの誤りがあったことを明記する。以下主な遺構を時代順に記述する。

庄内～古墳時代前期にかけての遺構を4基検出した。古墳時代前期の井戸292は、東区南西隅付近で検出したもので、当初長辺3.3m、短辺1.8mの長方形プランを検出したが、実際に井戸状を呈するのは南側で、径1.1m、深さ約2mの凹みを確認した。底部から土師器壺1個体をはじめ、埋土中から土師器41点、弥生土器91点、サヌカイト類6点が出土した。埋土は5Y2/1黒色シルトである。

庄内期の井戸218は、西区南西隅で検出した長辺1.8m、短辺1.5m、深さ1.2mの井戸状遺構である。第1面を検出した際、図8中の遺物の一部がすでに姿を現していたことから、本米の遺構面はもう少し上であった可能性が高い。出土した土器は、その大半が原形を保った状態で出土した。それらはすべて



図7 95-2区 第1面

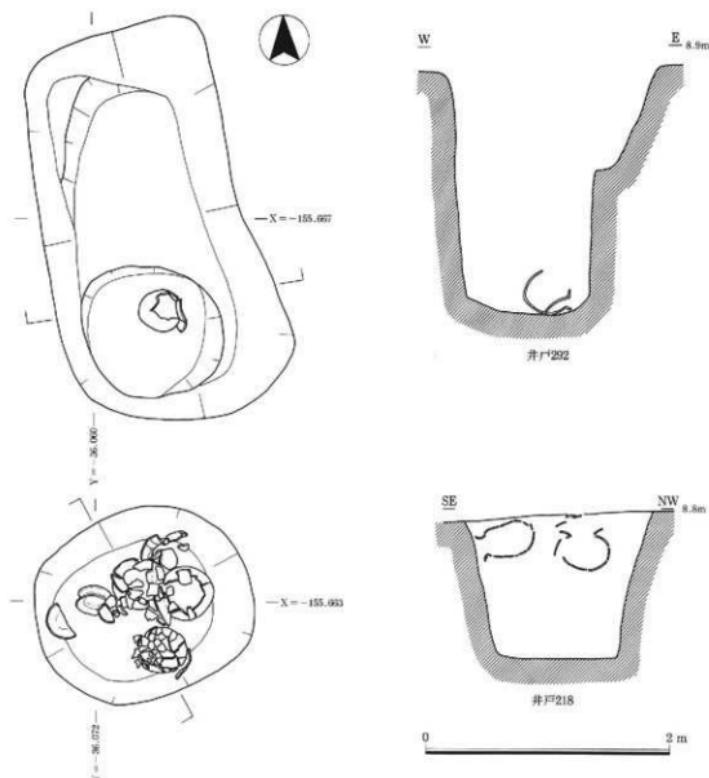


図8 95-2区 第1面井戸292・218

土ごと取り上げ、直ちに水洗したところ、甕（図17-31）の中から舟形土製品（同33）が出上した。しかし意図的に入れたものか否か詳細はわからない。埋土は5Y2/1黒色細砂混じりシルトで、上記土器類に混じって種子多数も出土した。出土遺物は、土師器113点、弥生土器394点、サヌカイト類19点を数える。

その他出土遺物から、明らかに庄内期～古墳時代に帰属すると思われる遺構は、以下のものである。

土坑259は東区北西隅で土坑258を切って検出したもので、さらに大半が側溝に切られており、正確な規模はわからない。埋土は5Y2/1黒色シルトである。出土遺物には、土師器33点、弥生土器115点、サヌカイト類3点がある。

土坑295は東区南西隅で検出したが、調査時は土坑281に切られていると判断した。埋土は5Y2/1黒色シルトである。出土遺物は、土師器31点、弥生土器81点、サヌカイト類6点を数える。

弥生時代の溝334は東区東半に位置し、一部は調査区外に延びる。出土遺物は弥生土器2422点（うち中期1831点、前期20点）、サヌカイト類52点、石庖丁1点、土製円板2点、紡錘車1点がある。

弥生時代の竪穴住居364は、その一部を東区北東隅で検出した。検出部分が不整円で、大半が調査区外に広がっているため正確な規模はわからないが、直径6m程度の規模を有していたと考える。検出時には、弥生中期の土器以外に部分的ながら炭化材や焼土が存したことから、最終的には火災によって廃棄されたらしい。周囲には壁溝ではなく、大小のピットを4個確認した。さらに掘り下げると、拡張前の住居に伴う壁溝1条と、ピット数個を検出した。この壁溝から判断すると、径5m程度の円形住居を想定できる。これらピットには若干切り合い関係もあり、さらに先行する住居があるかもしれない。出土遺物には、弥生土器496点（うち中期6点、前期50点）、サヌカイト類86点、石庖丁1点がある。なお炭化材は、京都産業大学理学部教授 山田 治氏に<sup>14</sup>C年代測定を依頼したところ（サンプル5点）、2000±90・2070±60・2170±60・1990±90・1640±30という測定結果をいただいた。

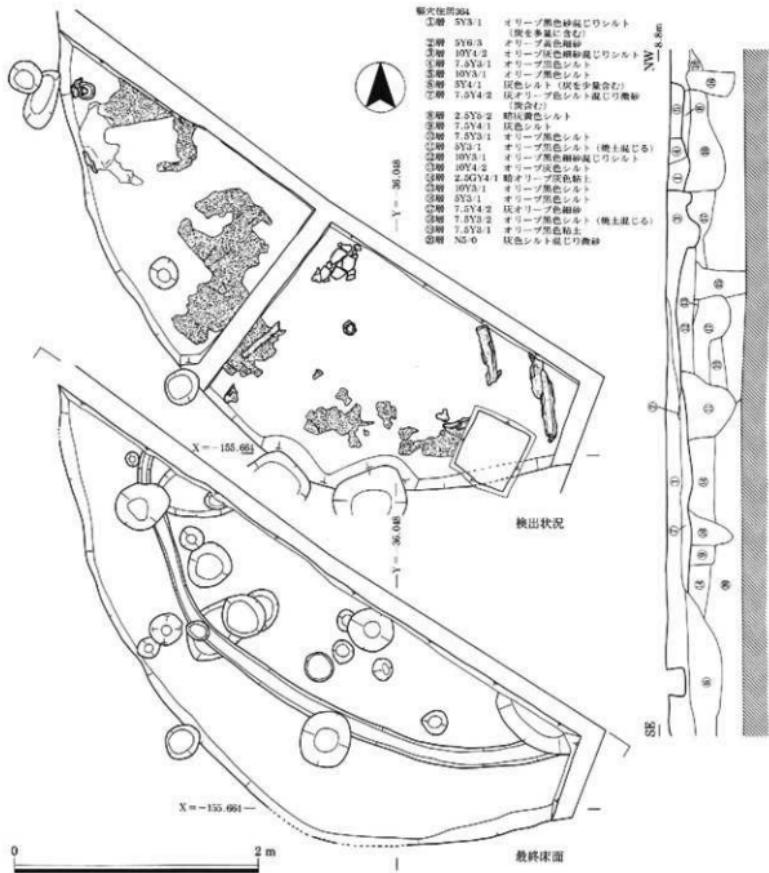
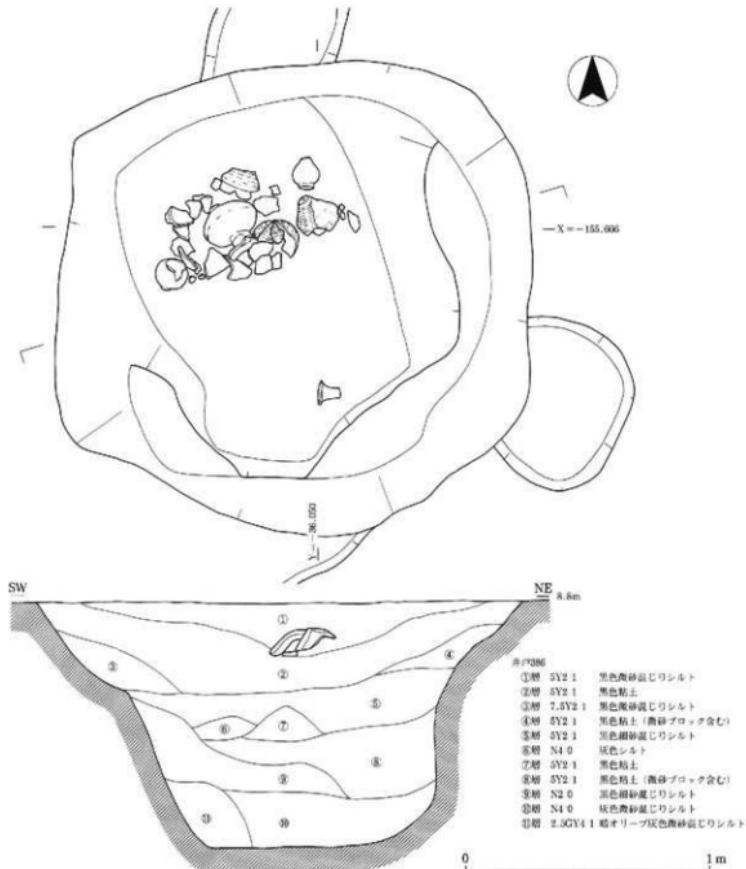


図9 95-2区 第1面竪穴住居364

弥生時代の井戸は、東区東端付近で検出した井戸386と、西区東端の井戸187がある。井戸386の平面形は、長辺約2.1m、短辺約1.9mの隅丸方形を呈し、深さ約1mをはかる。現状ではほとんど湧水もないが、形状より素掘り井戸と判断した。下図のように、埋土最上層付近で、弥生後期の土器がかなりまとまった状態で出土した。中には、体部下半に焼成後穿孔した壺がある。さらに井戸底面で、完形品の壺が1点出土したが、土器内の土を水洗中に炭化米を數十粒発見した。これら一連の土器は、何らかの祭祀行為に伴うものかもしれない。出土遺物は以下の通りである。弥生土器2117点（うち後期81点、中期201点、前期44点）、サヌカイト類116点、磨製石斧3点、土製円板3点。

井戸187は、直径約70cm、深さ1.2mの素掘り井戸で、底面から弥生後期の長頸壺1点が出土し、そのほか、土師器3点、弥生土器141点（うち後期4点、中期13点、前期4点）、サヌカイト類2点がある。



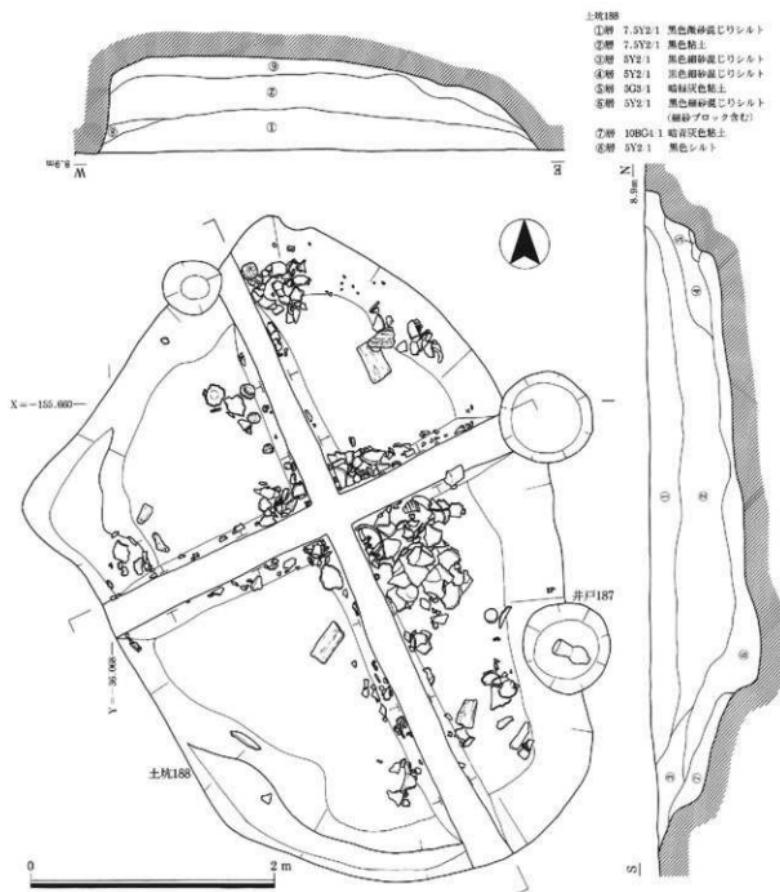


図11 95-2区 第1面土坑188・井戸187

土坑は、まず代表的なものを説明し、そのうち西区より順次記載を進める。土坑188は西区中央で検出した、長径5.6m、短径3.8mの不整橢円形を呈する土坑で、深さは最深部で約80cmをはかる。現状では湧水が著しい。出土遺物の大半は弥生中期（II～III様式）の土器器片で、上図のように土坑中央部に集中していた。その他、非常に摩耗したり破損した磨製石斧や石庖丁、破損した木器、さらには獸骨などが埋土中から出土した。おそらく廃棄土坑と考えられる。出土遺物の詳細は、弥生土器11160点（うち後期3点、中期2026点、前期332点）、繩文土器1点、サヌカイト類498点、磨製石斧5点、石庖丁8点、砥石7点、木製品15点、土製円板27点、種子・獸骨・歯多数である。なお大きく3層に分層した埋土は、花粉、珪藻、プランクトン・オパール分析を実施した。

土坑395は東区南東隅で検出したが、大半が調査区外に存在するため正確な規模は不明である。出土

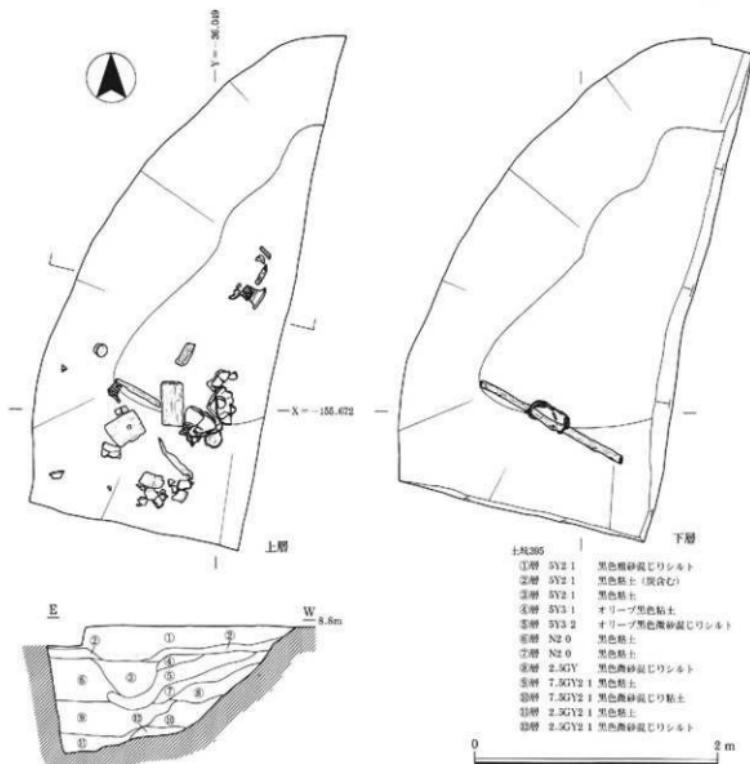


図12 95-2区 第1面土坑395

遺物は、土師器33点、弥生土器4011点（うち後期9点、中期387点、前期239点）、サヌカイト類230点、磨製石庖丁8点、砥石1点、木製品3点、獸骨4点である。この土坑も土坑188同様、花粉、珪藻、プランツ・オパール分析を実施した。

土坑110は西区北東隅で検出した長方形を呈する土坑で、一部は調査区外に広がる。埋土は5Y2/1黒色細砂混じりシルトで、炭化物が混じる。出土遺物は、弥生土器64点（うち中期13点、前期1点）、サヌカイト類2点、土製円板1点。

土坑129は、西区北西隅で検出した径1.1mの不整円形を呈した土坑で、深さ約30cmをはかる。埋土は5Y2/1黒色シルト、炭化物が混じる。出土遺物は弥生土器120点（うち中期12点、前期5点）、サヌカイト類22点がある。

土坑130は、土坑129のすぐ南側で検出した長径1.1m、短径80cmをはかる土坑で、深さは約50cm。埋土は5Y2/1黒色シルト。出土遺物は土師器4点、弥生土器207点（うち後期6点、中期15点、前期2点）、サヌカイト類3点、土製円板2点がある。

土坑160は西区東端、一部を側溝に切られており、正確な規模はわからない。埋土は5Y2/1黒色シルト。

トで、出土遺物には弥生土器143点（うち中期15点、前期12点）、サヌカイト類1点がある。

土坑222は西区南端で検出した長径2m、短径90cmの長楕円形土坑で、その一端を溝に切られる。深さは約10cm。埋土は5Y2/1黒色シルト、出土遺物には弥生土器181点（うち中期10点、前期18点）、サヌカイト類12点がある。

土坑238は土坑222の南側に位置し、その一部を側溝に切られる。埋土は5Y2/1黒色細砂混じり粘土、出土遺物は弥生土器101点（うち中期4点、前期5点）、サヌカイト類3点である。

土坑253は西区南東隅で検出した土坑で、やはり側溝でその一部を切られている。埋土は5Y2/1黒色細砂混じりシルト、出土遺物は弥生土器132点（うち中期17点、前期5点）、サヌカイト類2点である。

東区では土坑258は調査区北西隅で検出したが、一部を側溝に切られる。埋土は5Y2/1黒色シルトで、弥生土器158点（うち中期1点、前期25点）、サヌカイト類3点出土。

土坑266は土坑258の南側で検出した長径1.8m、短径1.2mの不整楕円形土坑で、深さ30cmをはかる。埋土は5Y2/1黒色微砂混じりシルトに細砂・炭化物が縞状に混じる。弥生土器182点（うち中期19点、前期12点）、サヌカイト類7点が出土した。

土坑279は調査区南西隅で検出した不定形土坑であるが、その形状からみて、複数の遺構を单一遺構として検出した可能性が高い。出土遺物は土師器1点、弥生土器836点（うち中期87点、前期38点）、サヌカイト類36点、磨製石庖丁1点、砥石1点、土製円板3点、紡錘車1点がある。

土坑281は、調査区南西隅で土坑279を切って検出した長径80cm、短径50cmの楕円形を呈する土坑である。深さは30cmをはかり、埋土は5Y2/1黒色シルトである。弥生土器247点（うち中期42点、前期4点）、サヌカイト類2点、土製円板3点を出土した。

土坑299は、調査区中央部南側で検出した長径70cm、短径50cmの平面卵形を呈する土坑で、深さ25cmをはかる。埋土は5Y2/1黒色シルトで、弥生土器32点（うち中期3点、前期1点）、サヌカイト類1点が出土した。

土坑301は土坑299の北側で検出した土坑で、一部を溝に切られる。深さは約20cm、埋土は5Y2/1黒色シルトである。出土遺物には、弥生土器30点（うち中期2点、前期1点）、サヌカイト類7点がある。

土坑308は、調査区中央部西寄りで検出した長径1.8m、短径80cmの不整楕円形を呈する土坑で、深さは約40cmをはかる。埋土は5Y2/1黒色シルトで炭化粒を含む。出土遺物には、弥生土器234点（うち中期14点、前期31点）、サヌカイト類25点がある。

土坑310は、土坑308に一部を切られる。規模は長径2.2m、短径1.2m、深さ30cmをはかり、埋土は5Y2/1黒色シルトで、炭化物を含む。弥生土器253点（うち中期22点、前期20点）、サヌカイト類8点が出土した。

土坑311は調査区北西隅で検出した、長径1.9m、短径90cmの楕円形土坑で、深さ約80cmをはかる。埋土は5Y2/1黒色シルト。出土遺物は、弥生土器97点（うち中期19点、前期6点）、サヌカイト類2点である。

土坑314は、調査区北側側溝に一部切られた状態で検出したため、正確な規模は不明である。埋土は5Y2/1黒色シルト、出土遺物には弥生土器6点（うち中期2点）、サヌカイト類1点がある。

調査区中央部北端に位置する土坑315は、一部側溝に切られている。埋土は5Y2/1黒色シルトで、出土遺物には弥生土器16点（うち中期3点、前期1点）、サヌカイト類2点がある。

土坑323は調査区中央部北側にある、最大長2.7m、最大幅1.6mの不定形土坑で、深さ10cm余りをは

かる。埋土は5Y2/1黒色細砂混じりシルトで、出土遺物には弥生土器356点（うち中期68点、前期17点）、サヌカイト類13点がある。

土坑331は調査区中央部南半で検出した。長径1.5m、短径1.1mの椭円形を呈し、深さ25cmをはかる。埋土は5Y2/1黒色シルトで、底部付近に5Y3/1オリーブ黒色粘土が堆積する。出土遺物は弥生土器224点（うち前期6点、中期21点）、サヌカイト類8点がある。

調査区南端で土坑333を検出した。一部は側溝に切られており、全貌はわからない。埋土は5Y2/1黒色シルトで、出土遺物には土師器1点、弥生土器167点（うち中期5点、前期12点）、サヌカイト類5点、土製円板1点がある。

土坑377は調査区北東隅で検出した、直径1.5mの不整円形をなす土坑で、深さ約10cmをはかる。埋土は5Y2/1黒色シルト、弥生土器56点（うち前期6点）、サヌカイト類1点が出土した。

土坑388は井戸386の西側で検出した、最大長3m、最大幅1.2m、深さ約20cmの不定形土坑で、その形状からみて複数の遺構を同時に掘削した可能性がある。遺構埋土は5Y2/1黒色シルトで、弥生土器417点（うち中期46点、前期13点）、サヌカイト類28点、砥石1点、土製円板1点が出土した。

土坑414は溝334を切り、井戸386に切られる遺構で、埋土は5Y2/1黒色シルト、出土遺物には弥生土器130点（うち中期8点、前期4点）、サヌカイト類2点出土。

**第2面（図13）** 第2面は、第1層除去後に検出した面であるが、凹凸のある遺構面に加え、第1層中にあった未確認の遺構面に伴う遺構も、当遺構面で検出することになった。図13では、第1層以外を埋土とする遺構にアミをかけ、本来第2面に伴わないであろう遺構として区別する。遺構面全体の傾向として、ピットがかなり顕著である半面、第1面土坑188のような大量の遺物を包含する遺構はほとんどなかった。以下代表的な遺構について紹介する。

溝593は、西区東端に沿って検出した溝で、調査区北東隅ではやや東側に向きを変えるようである。溝中央に矢板を打設しているため本来の形状はわかりにくいが、東区西端の溝658などと一連の遺構である可能性が極めて高い。とすると幅2.5~3m程度の溝となる。埋土は5Y2/1黒色細砂混じりシルト、出土遺物には、弥生土器4139点（うち中期6点、前期4030点）、サヌカイト類26点、磨製石器2点、紡錘車1点、土鍾1点がある。また溝658出土遺物には、弥生土器1028点（うち中期27点、前期161点）、サヌカイト類10点、土製円板4点がある。

土坑453は長径1.9m、短径1.7mの不整椭円形を呈し、深さは約60cmをはかる。土坑中央部から、底部を打ち欠いた大型の壺（図40-434）が、井戸枠状に据えられた状態で出土した。そのほかの出土遺物は、弥生土器100点（うち中期4点、前期15点）、サヌカイト類3点である。

土坑459は西区北側に位置する全長2.4m、最大幅70cmの溝で、一部は土坑453に切られる。出土遺物には、弥生土器421点（うち中期1点、前期55点）、サヌカイト類3点、磨製石器1点がある。

土坑657は東区北西隅に位置し、溝658を切る。規模は長径2.3m、短径1.5mの不整椭円形を呈し、深さ50cmをはかる。埋土は最上部に灰混じりの5Y2/1黒色細砂混じりシルトが約10cm、その下部には10Y4/1灰色シルトが堆積する。出土遺物には、弥生土器734点（うち中期1点、前期196点）、サヌカイト類2点がある。

土坑659は土坑657に切られた状態で検出した不定形土坑で、深さは50cm、埋土は5Y2/1黒色細砂混じりシルトである。出土遺物には弥生土器110点（うち前期21点）である。

土坑795は東区西端に位置し、溝658に切られる。深さ約20cmで、埋土は7.5GY4/1暗緑灰色粘土であ

る。出土遺物は、前期土器33点を含む弥生土器136点、砥石1点である。

土坑796も東区西端に位置し、同様に溝568に切られるようだ。埋土は5Y3/1オリーブ黒色粘土。遺構検出時、土坑表面全体に厚さ数cmの木質が敷かれた状態であった。出土遺物は弥生土器158点（うち前期27点）、サヌカイト類1点、磨製石器1点である。

土坑794は、東区南西で検出した長辺1.2m、幅50cm程度の隅丸方形を呈した土坑である。出土遺物には弥生土器102点（うち前期12点）、土製円板1点がある。

土坑661は、調査区北東で検出した長辺1.8m、短辺1.4mの不整方形を呈する土坑で、深さ20cmをはかる。埋土は5Y4/1灰色シルトで、炭化物が混入する。出土遺物は弥生土器297点（うち前期58点）、サヌカイト類1点である。

土坑836は調査区南端で検出したが、一部は側溝で切られる。出土遺物は弥生土器70点（うち前期14点）、土製円板1点である。

土坑857は調査区東端で検出したが、やはり一部を側溝で切られる。出土遺物は弥生土器271点（うち中期32点、前期11点）、サヌカイト類12点、土製円板2点である。

第3面（図14）落込み848は調査区中央で検出したもので、最大幅約8m、最深部では約70cmをかかり、北端では溝889と合流するようである。埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色シルト～粘土と、7.5Y4/2灰土



図13 95-2区 第2面

リープ色細砂混じりシルトが互層に堆積する。遺構底面は平坦なものではなく、所々で極端な凹みがあり、溝889と合流することから、ある時期流水していた可能性がある。この落込みに投棄された土器は、おもに南端付近に集中し（以下南土器群と称する）、すでに一部は第2面検出時に姿を現していた。土器は、このほかにも図15のように落込み北西部（以下北土器群と称する）などでまとまって出土したが、大半は投棄時すでに破碎していたので、ごく一部その場で割れたような状態を示すものもあった。これら土器の取り上げに際しては、南土器群を幾つかに分けて取り上げたほか、北土器群は上層・下層に分けて取り上げた。出土遺物は以下の通りである。弥生土器17398点（うち中期6点、前期17045点）、サヌカイト類91点、磨製石器19点、木製品2点、土製円板7点、紡錘車1点、土錘4点である。このほかにも北土器群から人骨が出土したのをはじめ、獸骨、種子類が多数出土した。

溝889は調査区東端付近で検出した、最大幅2.7m、深さ90cmの断面「U」字形を呈する溝で、埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色細砂に同色の粘土ブロックを含み、炭化物が若干混入する。基盤層との区別が極めてつきにくい。溝底部には流水を示す細砂が堆積する。出土遺物は弥生土器735点（うち中期6点、前期137点）、サヌカイト類14点、磨製石器1点、土製円板1点である。

土坑896は調査区南東隅で検出したが、一部調査区外に広がる。出土遺物には、弥生土器125点（うち前期26点）、サヌカイト類1点がある。

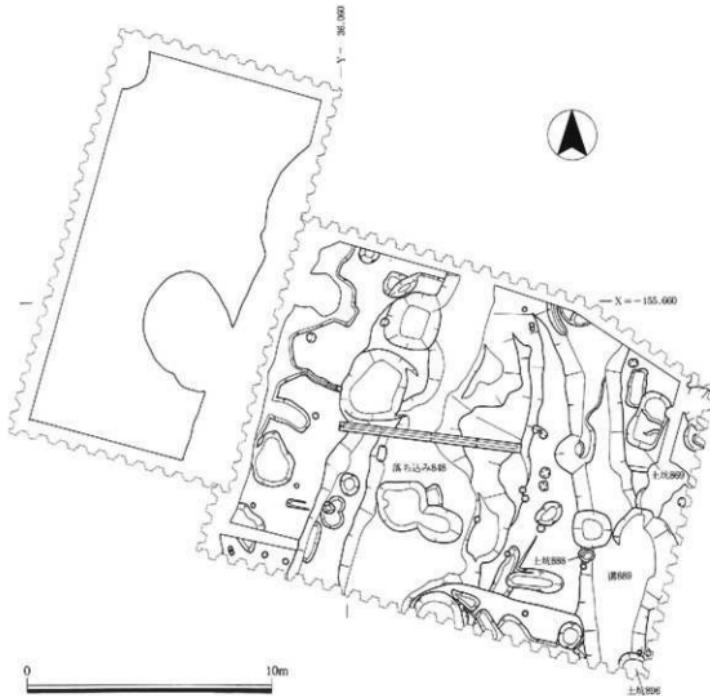


図14 95-2区 第3面



図15 95-2区 第3面落込み848

### 第3節 土器

95-2区から出土している土器類としては、小破片も含めて陶器2点、黒色土器2点、須恵器65点、韓式土器2点、土師器4109点、弥生土器109769点、縄文土器6点の総計113955点を数え、うち96.3%を弥生土器が占めている。以下、土器の種類ごとに出土層位等を含め記述していく。なお、陶器・黒色土器・須恵器・韓式土器に関しては、小片のため図化していないことをあらかじめ断っておく。

陶器 2点とも側溝出土のもので、明確な出土層位等は不明であるが、第0層相当もしくは機械掘削土からの混入と思われる。

**黒色土器** 第0層から2点出土しており、どちらもA類である。

**須恵器** 機械掘削土から23点、第0層から42点出土している。

**韓式土器** 機械掘削土から1点、第0層から1点出土している。

**土師器** 4109点の内、古式土師器と確認できたものが884点ある。土師器・古式土師器ともに機械掘削土と第0層からの出土が最も多く、土師器2971点、古式土師器766点を数える。第1面～第1層にかけては土師器253点、古式土師器118点が出土しているが、第2面以下での出土は土師器1点となっている。次に一定量の角閃石を含み、いわゆる生駒西麓産と称される土器を肉眼観察によって識別したところ、土師器3225点中76点(0.02%)、古式土師器884点中118点(13.3%)となった。

図16は第0層出土の土師器(古式土師器を含む)である。1～4は二重口縁壺であり、1は無文であるが、2～4は口縁部内外面、頸部共に竹管円形浮文・クシ描き文・刻み目などで加飾されている。おおむね庄内期のものであろう。5～11は甕である。5のみやや時期の新しいものであるが、6～11はいわゆる庄内甕である。12～16は小型丸底壺である。体部外面はヨコ・ナナメ方向のハケが主であるが、16のみ横方向のヘラミガキが施されている。17・18は直口壺であり、17の頸部外面に楕円痕がみられる。19・20は鉢である。19は調整不明、20は底部がややくぼみ底である。21・22は小型器台である。21は皿状の受部のみが残っている。22は脚部のみが残存し、器壁の磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、くびれ部の内面に絞り痕が観察できる。23～25は高杯の坏部である。25は外面の屈曲部より上にタテヘラミガキ、下がヨコハケのちタテヘラミガキ。内面は屈曲部より上にヨコヘラミガキ、下がタテヘラミガキであり、色調は浅黄橙色を呈する。26は手培りである。覆部面に竹管円形浮文が2つ残っている。覆部外面は粗いハケ、内面はナデ。20以外はおおむね布留期の範疇で収まるものであるが、20はV様式の新しい時期から出現しているよう、庄内期の古い時期までには収まるようである。

図17～27～33は第1面井戸218出土土器及び土製品であり、27～31は甕である。27は破片資料で、体部外面に右上がりのタタキが、内面にヘラケズリが行われている。28は口縁が直線的に開き、口縁端部は少しつまみ上げる。体部形態はほぼ球形である。調整は口縁内外面共に横方向のナデ、体部外面は左上がりの細かいタタキのち下半部のみハケ。全体的に煤が著しく付着している。体部内面は頸部から体部上半にかけて指頭ナデ、下半はヘラケズリ、底部には明瞭な指頭圧痕がみられる。29は口縁が外反気味に開き、口縁端部をつまみ上げる。体部形態はほぼ球形である。体部外面は不定方向のハケ、内面は上半と下半で方向が異なるヘラケズリを行う。下半部に煤の付着が認められる。31は口縁が直線的に開き、端部を丸く終わらせる。体部形態は球形を呈する。体部中程に煤の付着がみられるが、28・29のように著しいものではない。また、内外面共に体部のやや下がった箇所で黒斑が観察できる。なお、この甕を洗浄している際に、内部に溜まった黒色粘土の中から33の舟形土製品が検出された。ただし、舟形土製品が最初から意図された形でこの甕の中に入れられたものであるのか、井戸の埋没過程の中で入り

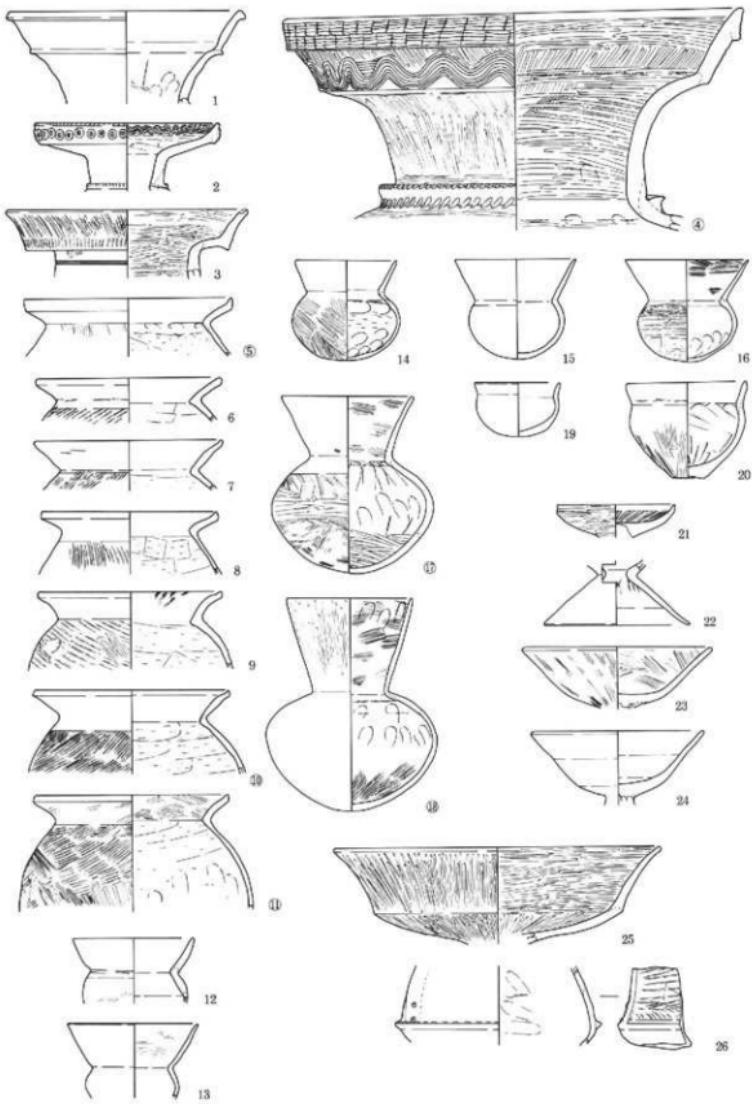


図16 95-2区 第0層出土土師器

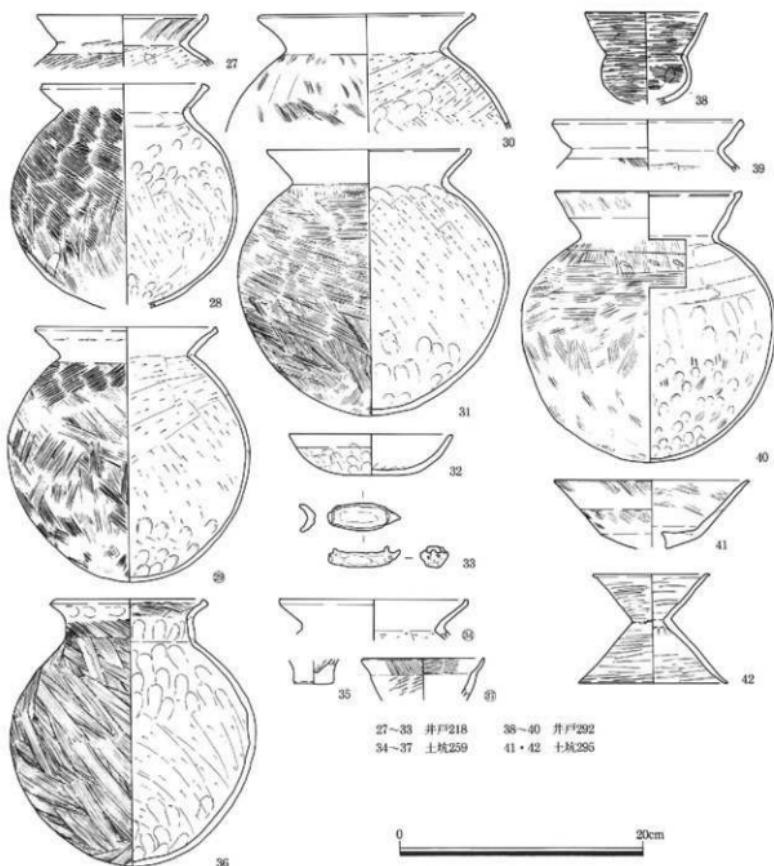


図17 95-2区 第1面出土土器・土製品

込んだものであるのかは全く不明である。32は壊であり、外面下半は板ナデと明瞭な指頭圧痕が残る。内面の底部には板状工具の圧痕がみられる。外面には全体的に煤の付着が認められる。33は舟形土製品である。前述のように、31の甌を洗浄している際に発見された。粘土塊から形造られたもので、明瞭な指頭痕が観察できる。触先部分には径2mmの穿孔が行われている。形状から準構造船を模したものと考えられる。これら井戸218出土土器は上記のような形態的・技法的な特徴から考慮すると、27~32の土器は、庄内式期から布留式期への過渡期を示すものであると考えられ、米田編年庄内式期Ⅳ~庄内式期Ⅴ（布留式期Ⅰ）を当てはめるのが妥当であると思われる。

図17-34~37は第1面土坑259出土土器である。34は甌である。口縁部は直線的に開き、端部は若干つまみ上げている。口縁の外側に煤の付着が認められる。35はミニチュアの底部であろうか。内面に板

状工具の圧痕が認められる。36は広口壺である。直線的に立ち上がった頸部の上に外反する口縁をもち、体部はほぼ球形をなす。口頸部の形状や内面調整等の諸特徴から四国系の土器から影響を受けたものであると思われる。37は鉢である。口縁・体部ともに外方に開く。庄内期から布留期にかけての一群であると考えられる。

図17-38~40は第1面井戸292出土土器である。38は小型丸底壺で、偏平な球形を有する体部にやや内湾気味にのびる口縁がつく。39・40は甕である。39は口縁部から頸体部にかけて約1/5が現存している。内湾気味にのびる口縁で、端部に面をもつ。40は口縁の一部が欠損しているが、ほぼ完形。直線的にのびる口縁に球形の体部を有する。口縁端部は折り曲げたように終わっており、面をもつ。特記すべき事項としては、体部外面の粗いヨコハケの直上に米粒形の列点文が3つ並んでいる事である。全体的に煤の付着が著しい。これら土器の諸特徴から布留式期古相の時期を当てはめることができる。

図17-41・42は第1面土坑295出土土器である。41は高坏の坏部であり、脚部との装着部分が良く観察できる資料である。坏底から屈曲して直線的に開く。42はX形を呈する中空器台である。調整は内外面ともに横方向のヘラミガキを散漫に行う。布留式期古相から中相にかけての時期に属す。

図39-342は第1面土坑188出土土器である。混入品であろう。

図41-43は第2面ピット471出土二重口縁壺である。破片資料ではあるが、口径が復元できたので掲載する事とした。口縁端部と屈曲部に竹管円形浮文を配し、上からクシ描き直線文・クシ描き波状文・凹線文の順に施文している。庄内期に属す。なお、第2節でも触れた様にこの二重口縁壺はピット471の時期を表すものとしては不的確であり、混入品であると思われる。

弥生土器 小破片も含めて、弥生土器と確認できたものは109769点あり、他の時期の土器に比べて最も多く出土している。時期の内訳を見てみると後期916点、中期8823点、前期26858点となり、70%以上が前期土器である。それらの土器を出土層位から概観すると、後期は機械掘削土～第1面、中期は第0層～第1面、前期は第1面～第3面を中心として出土していることがわかる。次に、時期別にみた生駒西麓産の比率であるが、後期916点中19点(0.02%)、中期8823点中2997点(33.9%)、前期26858点中281点(0.01%)となり、当遺跡の立地等を考え合わせるとその比率が若干低いように感じられる。

図18は第0層出土土器である。43・44は広口壺であり、43は口縁部に竹管状工具による沈線3条と、それを等間隔に止める事による刺突文が施文されており、頸体部には三角形の刺突がみられる。44は無文であるが、外面の頸体境にヘラ状工具による線刻が3条と、口縁部内面にヘラ状工具による沈線がみられる。45～47は甕である。47のみ受口状の口縁をなす。一様に接合痕が明瞭に観察できる。48～51は鉢である。口縁が外反するものと、椀形の形態のものがある。52～54は高坏で、口縁が外反し、脚台基部が中実である。53の高坏では明瞭な絞り痕が観察できる。52の坏部外面には、ヘラミガキと同じ原体で波状文が施されている。以上、43～54は後期後葉の時期を示すものである。55は甕で、内面に煤の付着が認められる。56は高坏の壠部であり、焼成前の穿孔が2個並列して7方向に配置されている。内外面ともに器壁が磨滅しており調整は不明瞭。57～60は壺である。57は大きく開く口縁に丈長な頸部をもつ。口縁部にはクシ描き波状文7条と刻み目がめぐり、頸部にはクシ描き直線文9条が2帯残る。58・60は大きく開く口縁にあまりすばまらない筒状の頸部をもつ。文様はどちらもクシ描き簾状文がめぐる。58の頸部内面には粘土の絞り痕が残る。59は口縁端部が上に大きく拡張した口縁部をもつ。口縁部の文様は、クシ描き波状文と、クシ描き波状文が一部クシ描き簾状文に変化している文様がめぐる。頸部文様は、上からクシ描き直線文2帯・簾状文の順に施文されている。61は無頸壺である。体部にクシ描き簾

状文8条が2帯めぐり、体部上位に焼成前の紐孔が1つ残る。62は大和形の壺である。口縁端部に木目が明瞭に残る刻み目がめぐり、内面には粗いヨコハケが、外面には粗いタテハケが観察できる。63は壺の底部である。内外面共に器壁が磨滅している為、ヘラミガキが少し残るのみ。64・65は壺。55～65は中期全般を示す。66・67は前期の土器であり、66はつまみを有する壺蓋C。つまみ部分には指で押さえた痕跡がある。67は無文の壺Aである。器壁外面が剥落しており、調整は不明。内面に著しい煤の付着が認められる。

図19-68・69は第1面井戸187出土土器であり、68は長頸壺である。体部上方には、ヘラ描きの平行する2条が弓形となる記号文がみられる。69は高杯の脚部である。穿孔が3つ残存しており、裾部内外面に煤の付着が認められる。後期前半に属す。

図19-70～88は第1面井戸386出土土器であり、70～75は壺である。72の口縁部には刺突文が残っている。75の体部や下方に焼成後の不定形な穿孔がある。76～80は壺であり、77の底部にはラセン状のタタキがみられる。81は鉢である。以上、70～81は後期後半に属す。82・83は壺の頸部破片、84は把手付の鉢A、85はミニチュアの高杯、86・87は壺、88は壺である。82～88は前期新段階から中期前半に属す。第1面井戸386からは、土器類として小破片も含め弥生前期44点、中期201点、後期81点、時期不明1791点出土している。出土状況は70～73・75～81が上層から、74が下層からほぼ完形でまとまって出土しており、これらの土器が井戸386の時期を示すものであると考えられる。他の時期の土器も多数出土しているが（図19-82～88など）、ほとんどが破片資料であること、下層の包含層を破壊して造られた井戸であること等の理由により混入品であると思われる。

図20-90～92は第1面土坑279出土土器である。90は壺の体部であり、ヘラ描きの流水文が2条一単位として2帯あり、間に3条一単位のヘラ描き直線文が配置されている。91は鉢Bであり、口縁端部の上と下にそれぞれ刻み目が配置される。体部には10条一単位のヘラ描き直線文2帯の上に、縦方向のヘラ描き直線文を4条一単位として不規則に配置する。92は無頸壺の底部と考えられる。底部を横に貫通する孔が認められる。前期新段階に属す。

図20-93は第1面溝431出土土器であり、無頸壺Aである。口縁下にヘラ描き沈線1条とその下をヘラ状工具で削り出しており、体部のほぼ真ん中には刻み目を有する貼り付け突帯1条がめぐる。前期新段階に属すと考えられる。

図20-96～98は第1面土坑308出土土器であり、97はミニチュアの壺である。

図20-99～107は第1面土坑310出土土器であり、前期新段階から中期前葉にかけてのものがある。106・107は同一個体の可能性がある資料で、口縁端部の上方と側面の2ヶ所に刻み目がめぐる大和形壺である。この土器は、隣合う破片でも全く色調が異なる部分があり、割れてから2次焼成を受けた可能性が考えられる。

図20-108・109は第1面土坑129出土土器である。108は大和形壺であり、口縁端部内外面に刻み目がめぐる。109は壺である。どちらも生駒西麓産の胎土を有する。第II様式に属す。

図20-110～114は第1面土坑266出土土器である。114は外面全体に煤の付着が認められる。第II様式に属す。

図20-115は第1面土坑266と土坑348から出土した破片が接合した壺である。内面と外面の対になる箇所に明瞭な黒斑がみられる。

図21-116・117は第1面土坑341出土土器であり、116は壺の頸部である。クシ描き直線文の間に円形

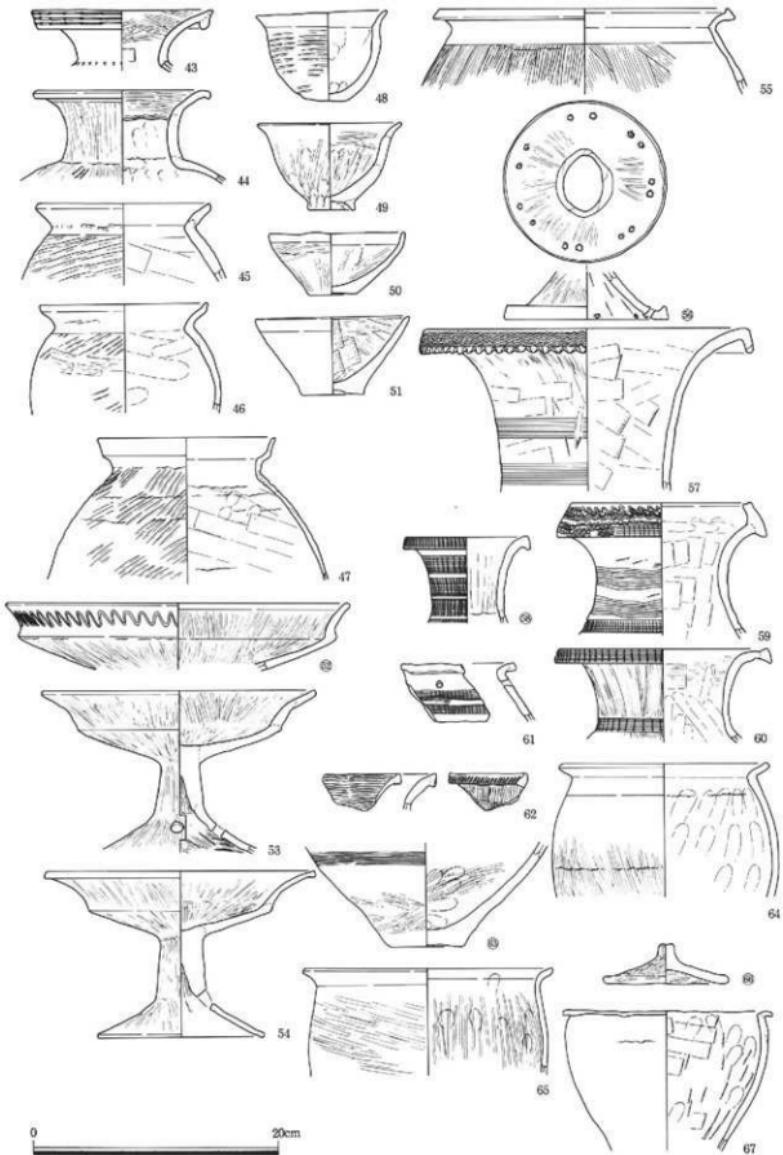


図18 95-2区 第0層出土弥生土器

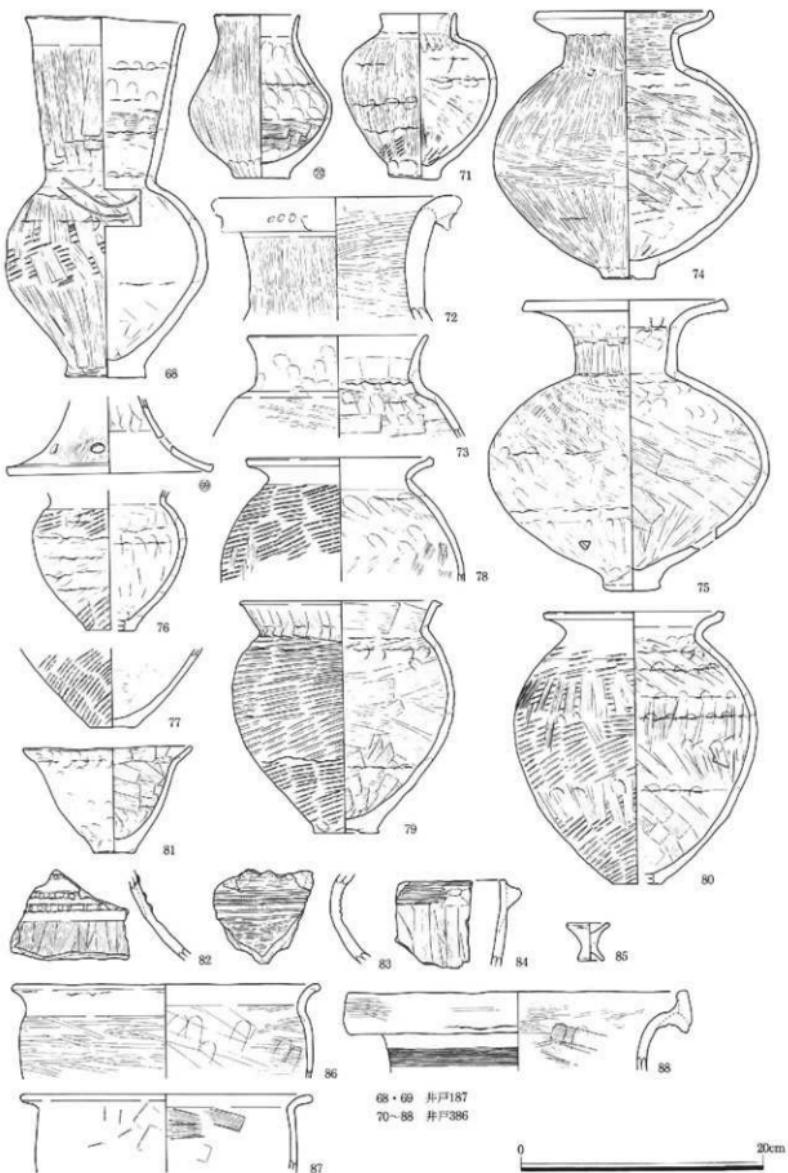


図19 95-2区 第1面井戸出土弥生土器

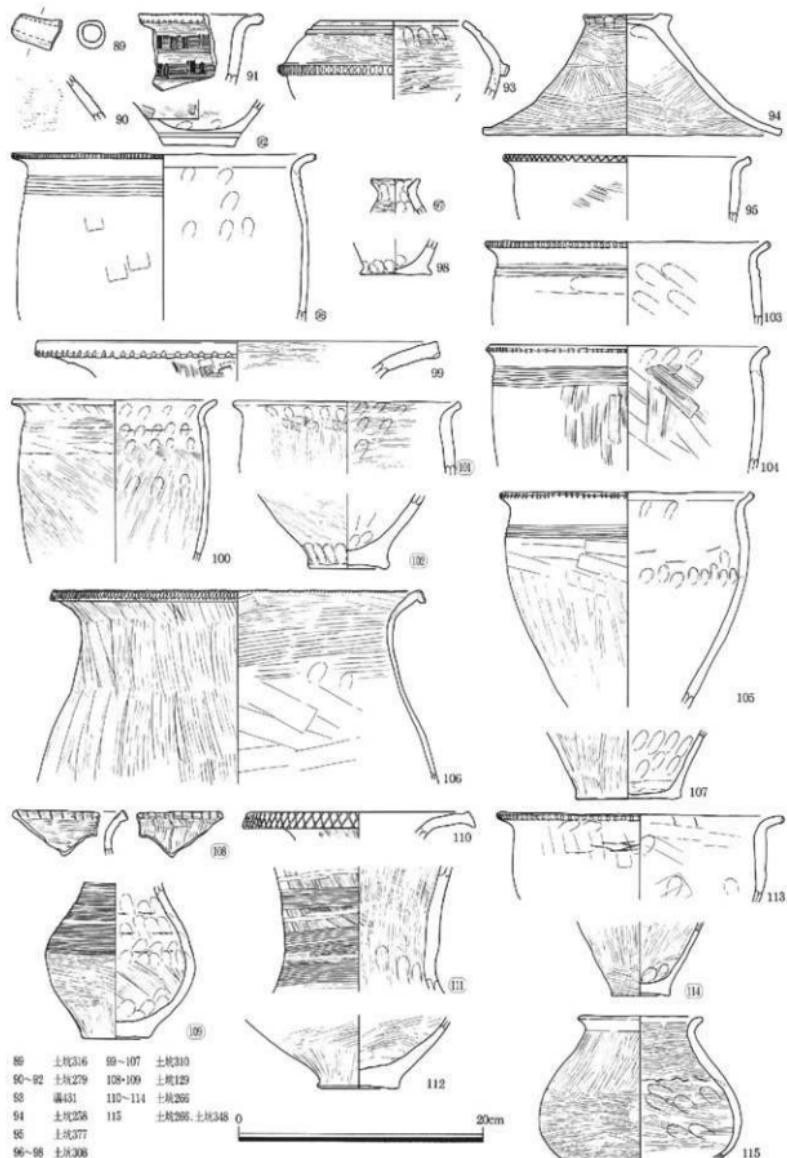


図20 95-2区 第1面溝・土坑出土弥生土器・縄文土器

竹管文が2条めぐる。第II様式に属する。

図21-118・119は第1面土坑333出土の底部である。

図21-120は第1面土坑299出土の甕蓋である。

図21-121は第1面土坑315出土の鉢。破片資料ではあるが、クシ描きの横型流水文が9条一単位として描かれている。内面はヨコヘラミガキ。第II様式に属する。

図21-122・123は第1面土坑301出土土器であり、122は壺の体部破片、123は鉢である。122の壺には4条一単位のクシ描き直線文があり、その上にヘラ状工具で描かれた文様がみられる。破片のため明瞭ではないが、複線鋸歯文であろうか。122・123共に第II様式に属する。

図21-124～126は第1面土坑388出土土器である。124・125は壺の体部破片であり、124にはクシ描き直線文11条の上に縦方向の沈線2条が、125には2条一単位のクシ描き流水文がみられる。126は鉢である。第II様式に属する。

図21-128～131は第1面土坑331出土土器である。130は壺の口縁部破片であり、内面に三角形刺突文4条とヘラ描き沈線1条がみられる。捕磨西部の土器と類似している。131は甕蓋である。小さい2対の縫孔は焼成前に穿孔されたものであるが、やや大きい孔は焼成後に穿孔されたものと考えられ、補修孔であると推測される。前期新段階から中期前葉に属す。

図21-132～135は第1面土坑130出土土器であり、第II様式に属す。

図21-136～145は第1面土坑281出土土器であり、136～139は壺、140は無頸壺、141は甕、142は甕蓋、143～145は甕の底部である。136の口縁には6条一単位のクシ描き波状文、137・139には刻み目がめぐる。138は頸部を打ち欠き、その部分を研いで成形している。ただし、打ち欠いた際に凹んだ箇所は研いでいない。140の上部には13条一単位のクシ描き簾状文と11条一単位の扇形文がめぐる。外面には全体的に黒色物質が塗布されている。第III様式古段階に属す。

図22-146～148は第1面土坑253出土土器であり、146・147は鉢、148は甕の底部である。146・147は、体部外表面ヘラミガキの前に板状工具を用いて器壁を成形しているが、その際に砂粒が移動し一見するとヘラケズリの様に見える。中期前葉に属す。

図22-149～153は第1面土坑323出土土器であり、149・150は壺、151・152は高杯、153は甕である。150の壺は口縁端部を上方に拡張するタイプで、6条一単位の扇形文が2帶めぐる。また、口縁部下に明瞭な指傾圧痕が残る。中期前葉～中葉に属す。

図22-154は第1面土坑314出土鉢。口縁部と体部にクシ描き簾状文がめぐる。第III様式に属す。

図22-155～159は全て出土遺構が異なるが、おおむね第III様式に収まる。

図22-160・161は第1面土坑311出土の甕である。中期後葉に位置する。

図23～図25は第1面溝334出土土器である。図23-162～167は大きく開く口縁に、体部に近づく程すばまる頸部を有する壺である。口縁部には刻み目やクシ描き波状文がめぐり、頸部にはクシ描き直線文が施される。162は図21-138と同様に頸部を打ち欠き、先端を研いで成形したものである。167の口縁内面には、4条一単位の扇形文が3つを一単位として、5方向に配置されている。168は口縁端部が上方に拡張するタイプの壺である。口縁部に6条一単位の扇形文が2帶めぐる。169は細頸壺であり、10条一単位のクシ描き直線文が数帯めぐる。170～173は壺または甕の底部である。174は甕であり、頸体境に明瞭な工具痕が残る。器壁外表面に煤が多く付着している。175は鉢であり、瘤状突起が1つ残る。図23-162～175はおおむね第II様式後半に属す。図24-176・177は大きく開く口縁に、体部に近づく程

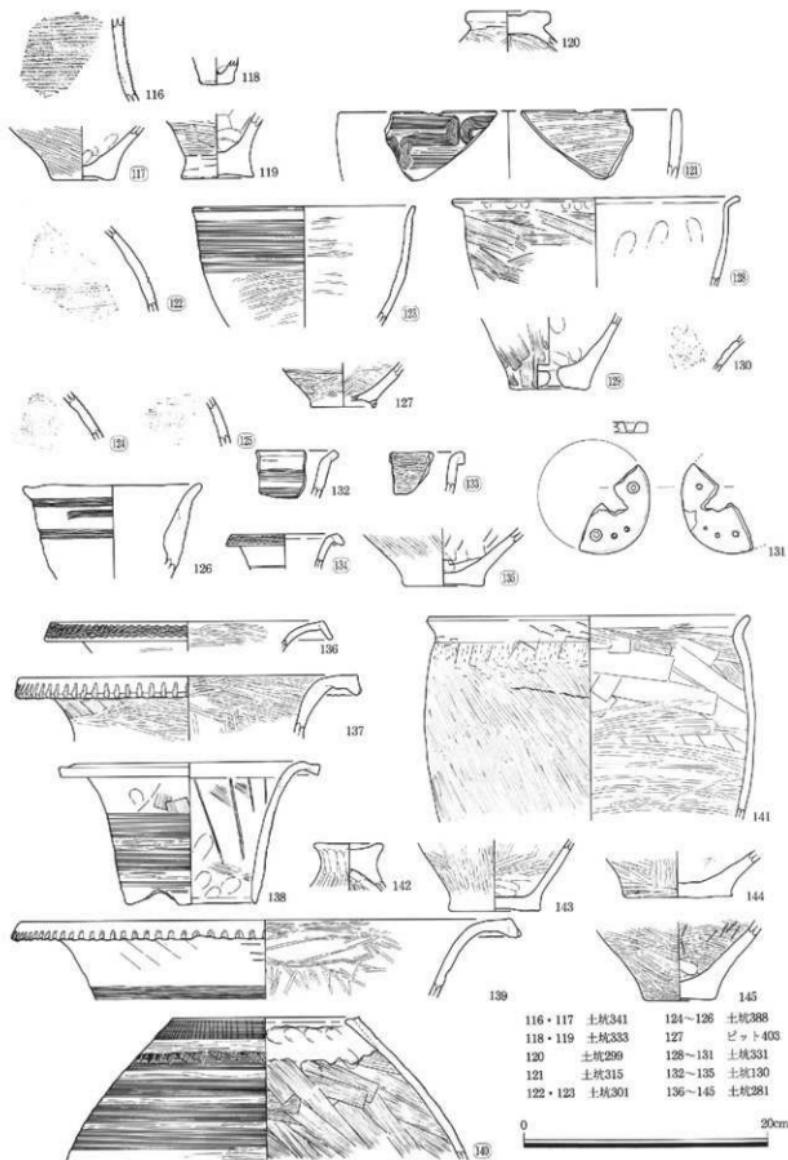


図21 95-2区 第1面土坑・ピット出土弥生土器

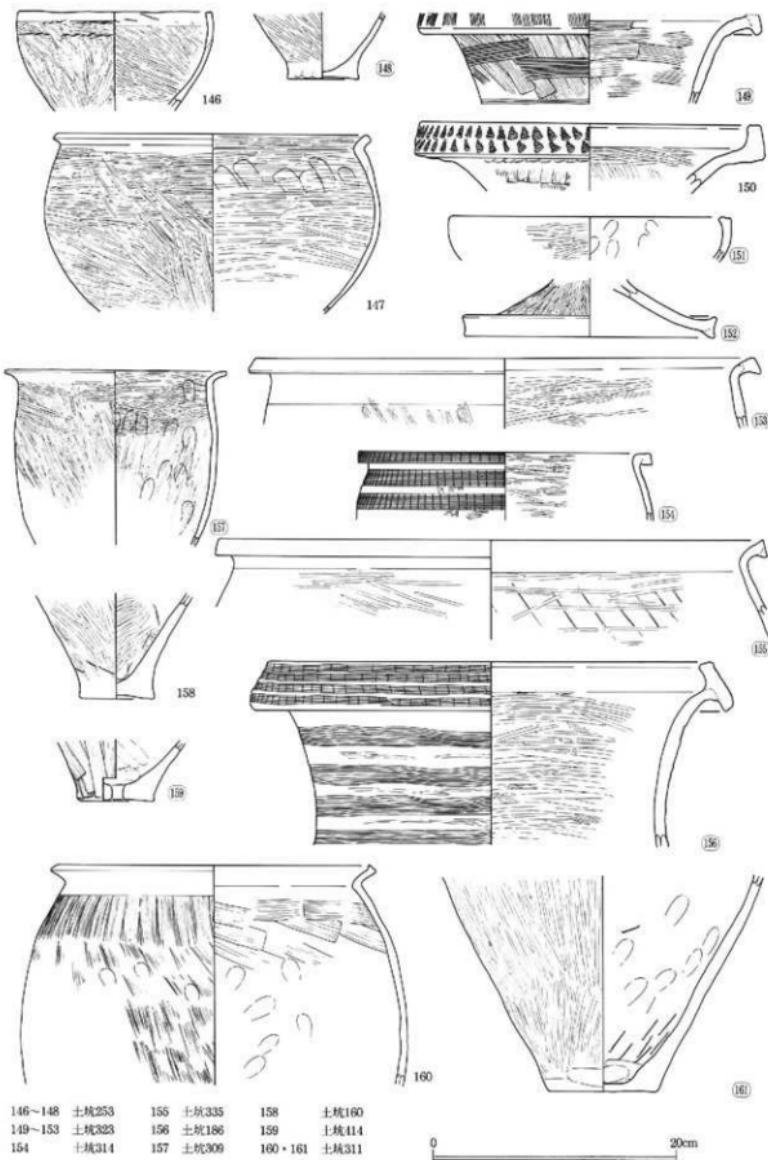


図22 95-2区 第1面土坑出土弥生土器

すばまる頸部を有する壺である。177は口縁部にクシ描き簾状文が、頸部にクシ描き直線文がめぐる。178～182は口縁端部が上下方に拡張する口縁を有する壺である。文様は、口縁部に簾状文・縦方向の直線文・扇形文・列点文を配し、頸部には直線文・簾状文・扇形文・列点文がめぐる。183は細頸壺である。図25～184・185は壺の底部である。186～189は甕、190は鉢、191～194は甕の底部。191の内面には赤色顔料が付着している。図24と図25～184～194はおおむね第III様式古～中段階の範疇に収まるものである。図25～195はタタキ甕である。

図26～図32は第1面土坑188出土土器である。図26～196～205と図27～207・208は大きく開く口縁に、体部に近づく程すばまる頸部を有する壺である。口縁部にはクシ描き波状文や刻み目がめぐる。図26～197・198では指頭によるつまみ上げを行っている。図26～201の口縁部内面には組紐の様なものを押さえつけて施文している。頸部の直線文は条線がはっきりせず、板状工具で施文しているようである。図26～203は頸部のクシ状工具を数回軽く停止させ、簾状文が確立する以前の様相を呈する。図26～205の体部上半には、扇形文をクシ描き直線文の上に4つ単位で4方向に配置している。図26～206の壺は、頸体境に焼成前の穿孔が1つ確認できた。内外面共にヘラミガキ。図27～209～212は大きく開く口縁に、あまりすばまらない頸部を有する壺で、無文。図27～213～228は壺の底部である。217には焼成後の穿孔が1つある。221の底面には木葉痕が確認できた。228の内面には全体的に煤の付着がみられる。図28～229～232は、無頸壺の口縁部破片と底部である。口縁端部の内外面には刻み目があり、外面には波状文・直線文・扇形文がみられる。全ての底部に1対の穿孔が確認できる。図28～233～250は甕である。体部外面に煤の付着しているものが多い。240の体部内面には赤色顔料が少量認められた。247の口縁端部上下には、木目が明瞭に残る刻み目がめぐる。体部外面には原体のやや太いタテヘラミガキが行われ、器壁が乾燥していた為か砂粒の移動がみられた。249の体部はヘラケズリが行われ、胎土からの確認は行っていないが、紀伊形甕の可能性がある。250の底部には焼成前の穿孔が認められた。図28～253～260は甕の底部である。252・257の底面には穿孔がある。図29～261は鉢のミニチュアであろうか。図29～262～264は鉢であり、262・263の口縁端部には刻み目がめぐる。263の体部には波状文が、264の体部には直線文の上に9条一単位の扇形文が認められる。図29～265～269は高坏であり、265の内面にはヘラ描き沈線が1条めぐる。266の坏部外面には、クシ描き直線文が3帯めぐり、口縁端部には波状文が施文される。267～269は脚部であり、全て中実。268・269の裾部内面はヨコヘラミガキ。図29～270～275は蓋であり、272はミニチュア。以上、図26～図29～261～275はおおむね第II様式後半の範疇に収まるものと思われる。図29～276～280は大きく開く口縁に、体部に近づく程すばまる頸部を有する壺である。各種のクシ描き文があり、口縁部に刻み目・簾状文の施されるものが多い。頸部には直線文がめぐるものや、280の様に頸体境にのみ明瞭な簾状文が施文される場合がある。281～283は大きく開く口縁に、あまりすばまらない頸部を有する壺で、無文と有文とがある。有文のものは口縁部に簾状文・列点文が、頸部には282の様に簾状文がめぐるもの、283の様に直線文・簾状文・列点文が施文されるものがある。図30～284～287の壺はやや小型であり、口縁端部を上下に拡張した口縁を有し、ややすばまる頸部をもつ。口縁部文様には列点文・簾状文があり、頸部には直線文を頸体境には簾状文がめぐる。288～292は口縁部の直径が30cm内外ある大型の壺である。口縁部には簾状文・扇形文がめぐり、頸部には直線文が頸体境には簾状文・扇形文が施文されている。293・294は無頸壺である。外面には簾状文・扇形文・列点文・直線文がめぐる。295は台付無頸壺の脚部と考えられ、内面には粘土を充填した痕跡が伺われる。脚柱部外面には貼り付け突帯3条がめぐる。肉眼による胎土観察では、際立った違いは無いが、

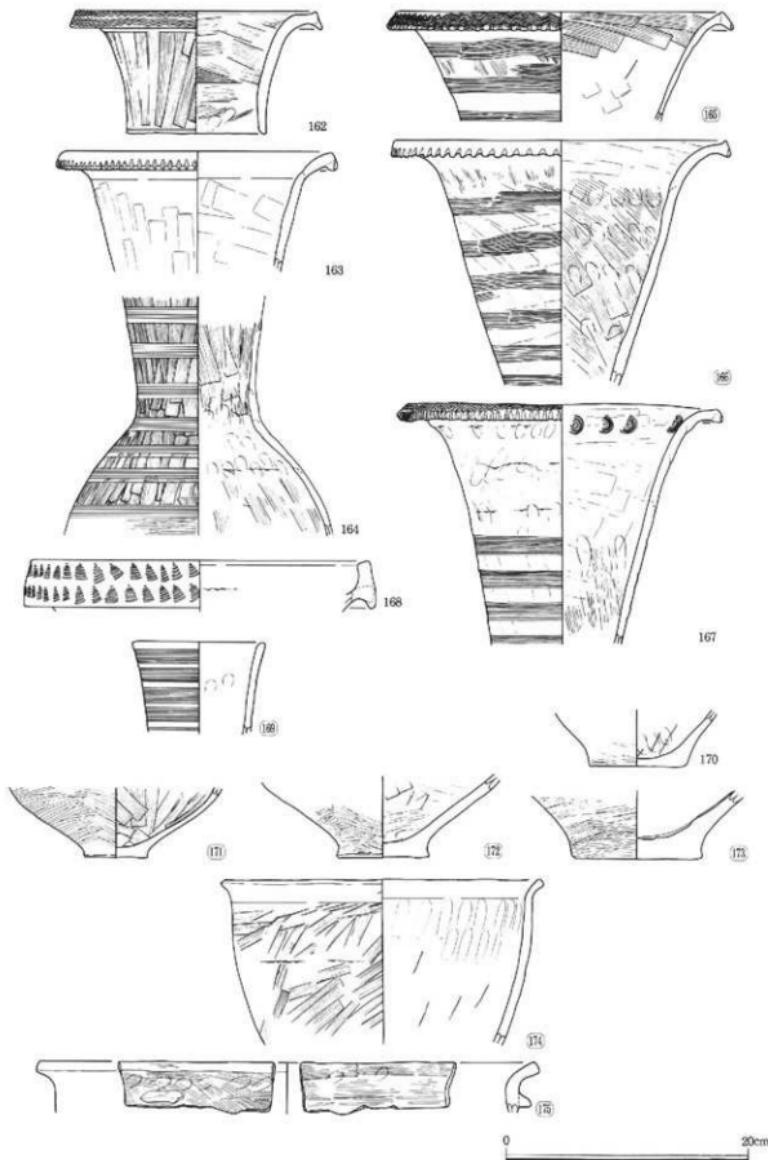


図23 95-2区 第1面溝334出土弥生土器1

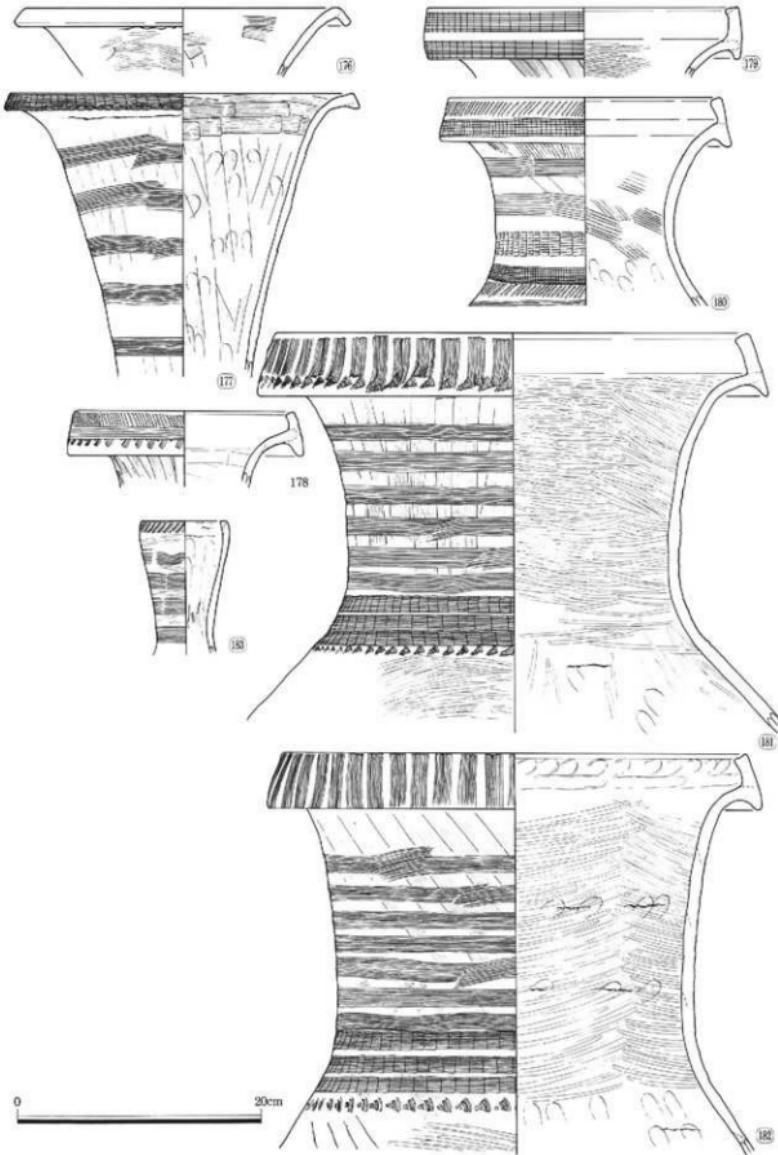


图24 95-2区 第1面溝334出土弥生土器2

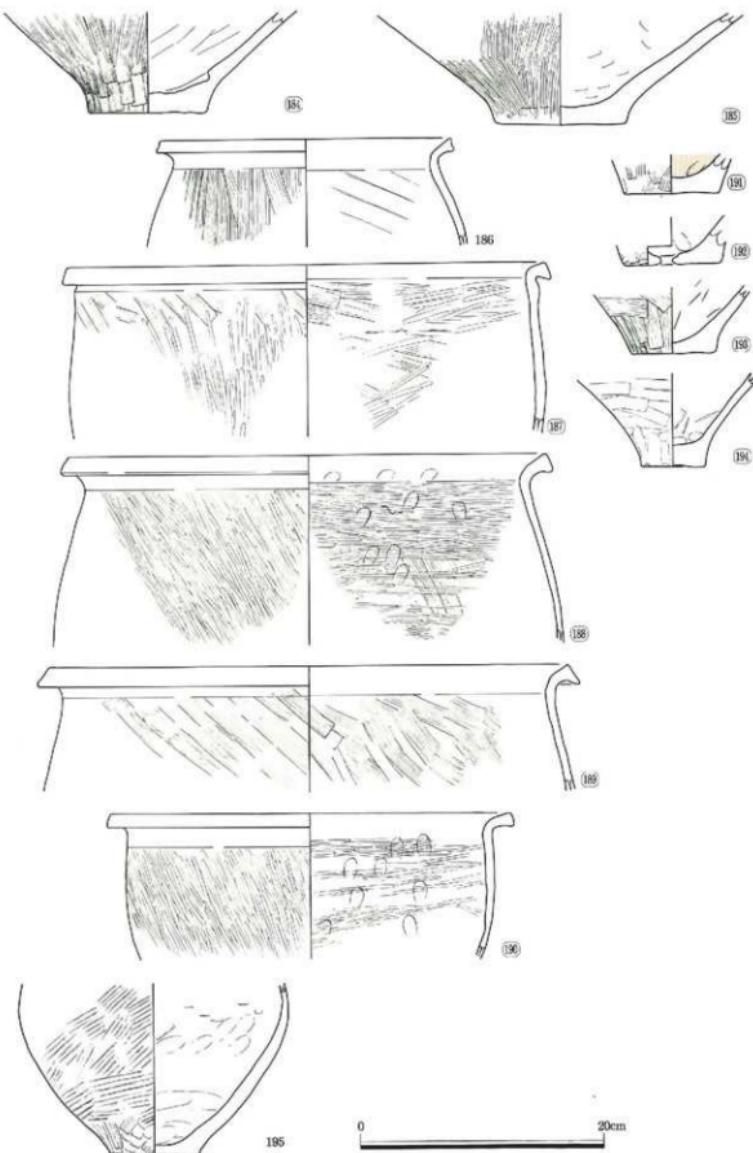


図25 95-2区 第1面溝334出土弥生土器3

播磨地域の土器である可能性あり。図30-296～299と図31-300～302は壺の底部である。図30-296・297・299の内面には煤の付着が認められる。299には焼成前の穿孔が1つある。図31-303～311は壺である。内外面共に、煤の付着が認められるものが多い。310は、体部中程に板状工具による刺突文がみられる。311は大型品であり、内外面共にヨコヘラミガキ。図31-312～319は壺底である。315・319の底面には穿孔あり。図31-320～324は鉢で、口縁が直行するものと、外反するものがある。321は口縁部に刻み目がめぐる。体部文様には廉状文や、322の様に列点文を施文しているものがある。また、無文の323もみられる。324は口縁部に刻み目が、体部には貼り付け突帯が1条めぐる。攝津地域からの搬入品であると考えられる。図32-325～327は高坏である。325の坏部には列点文がめぐる。328～330は蓋である。以上、図29-276～283・図30・図31・図32-325～330はおおむね第III様式古～中段階に属すると考えられよう。図32-332～336は前期後半の土器である。332は壺B。333はミニチュアの壺。334は壺蓋Bで内外面共に黒色物質が付着している。紐孔が1つ残る。335は壺a 2で、頸部には削り出し突带上にヘラ描き沈線が1条めぐる。外面全体に黒色物質が付着している。336は壺底。337～339は壺であり、339の体部には波状文・直線文が施文されている。340は高坏で、凹線文3条がめぐる。341はタキ壺の底部である。337～341は中期後葉以降に属し、土坑188出土土器の内においては主要な位置を占めていない。

図33は第I面土坑395出土土器である。343～347は大きく聞く口縁に、体部に近づく程すばまる頸部を有する壺である。343は頸部にヘラ描き沈線が6条めぐる。344の頸部には11条一単位のクシ描き直線文が施文される。345は口縁部に6条一単位のクシ描き直線文が、頸部には8条一単位のクシ状工具を不規則に停止させる廉状文がめぐる。346の口縁部文様は、扇形文を上から下へと連続して施文している。頸部には直線文がめぐる。347は頸部に12条一単位のクシ描き直線文を6帯巡らし、頸体境には廉状文を置く。外面は全体的に黒色物質が付着している。348は壺の体部破片であり、クシ描き直線文と波状文が残る。349～354は壺である。350は、体部外面ヘラミガキの前に板状工具でナデているよう、砂粒の移動がみられる。351は、体部やや上方に焼成後の穿孔がある。349～351・353・354の体部外面には煤の付着あり。355はミニチュアの鉢で、356は把手を備えた鉢である。外面に煤の付着あり。357～360は大和形壺と考えられるものである。口縁端部に刻み目をめぐらし、体部外面と口縁部内面に粗いハケを行う。以上、土坑395出土土器は第II様式後半に属したものと考えられる。

図34に掲載する土器は、隣り合う遺構である第I面溝334・土坑395から出土したものである。調査時の混乱により、どちらの遺構から出土したものであるのか判然としない面があり、掲載しない方が適切であるとも思われた。しかし、土器の残存状態が良好であった事や、本報告書に掲載をしなければ二度と日の目をみると無いだろうという考え方から、掲載に踏み切ったものである。ただし、実際に調査を担当していた者からみると、土器の出土状況や残存状態、時期などから溝334出土の可能性がより高いと考えられる。361・362は大きく聞く口縁に、体部に近づく程すばまる頸部を有する壺である。362は第I面土坑281（図21-138）・第I面溝334（図23-162）出土のものと同様、頸部を打ち欠き、打ち欠いた面を研いで成形したものである。363・364は口縁端部が上下方に拡張する口縁を有する壺である。365・366は壺。366の内面には多量の煤が付着している。367は鉢である。第II様式から第III様式古段階に属す。

図35は第I面竪穴住居364出土土器である。368・369は壺である。368は壺a 2で、体部にヘラ描き沈線6条がめぐる。369は口縁端部にヘラ描き直線文5条がめぐり、内外面共にヨコヘラミガキ。370・

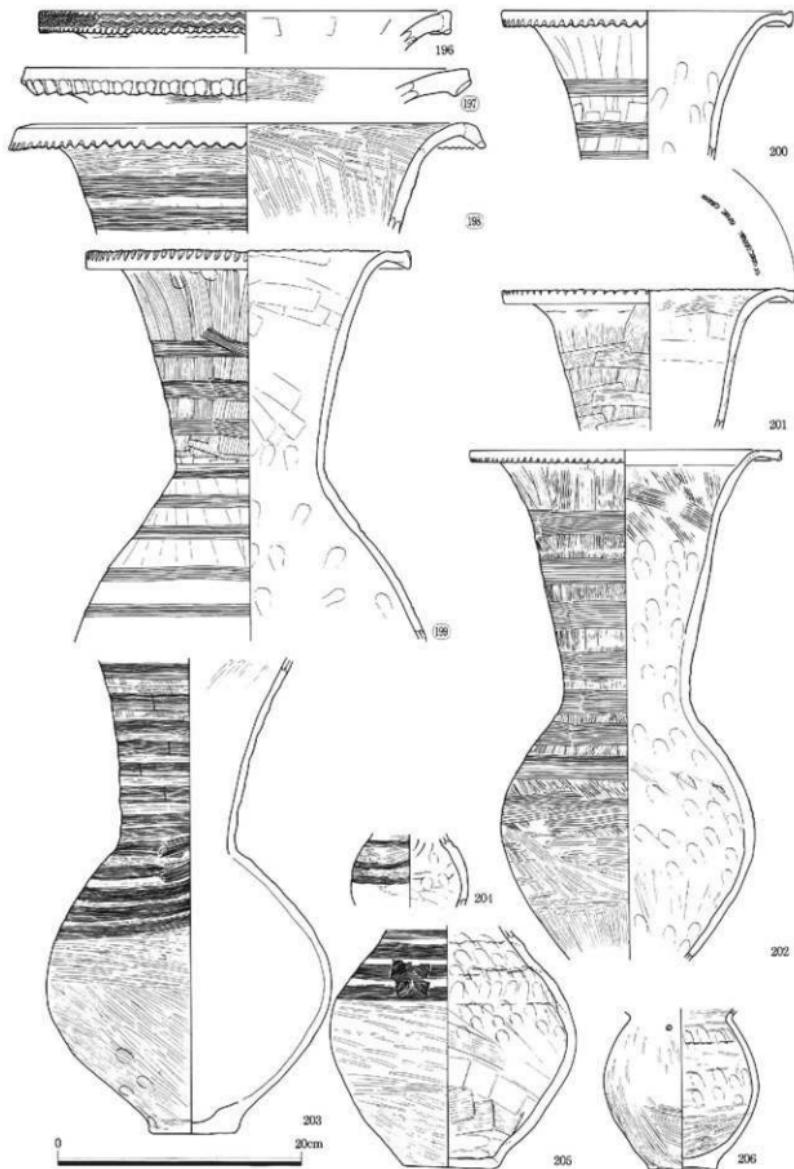


図26 95-2区 第1面土坑188出土弥生土器1

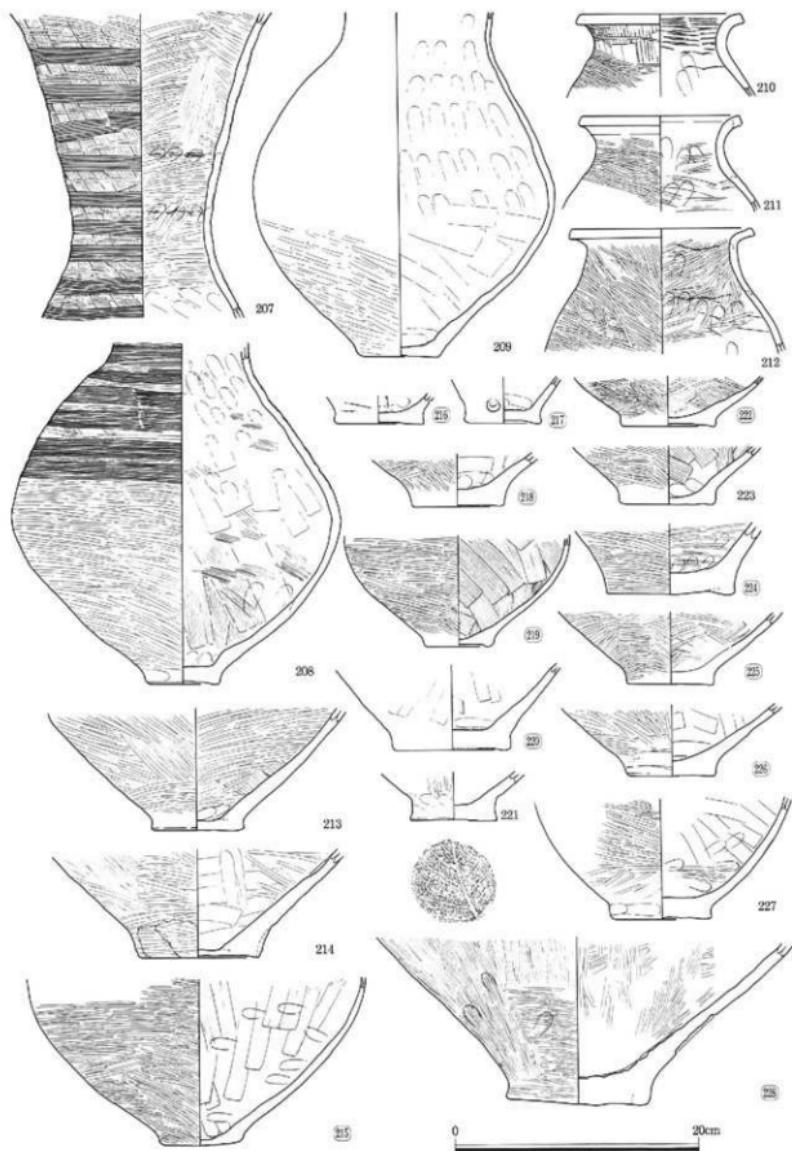


图27 95-2区 第1面土坑188出土弥生土器 2

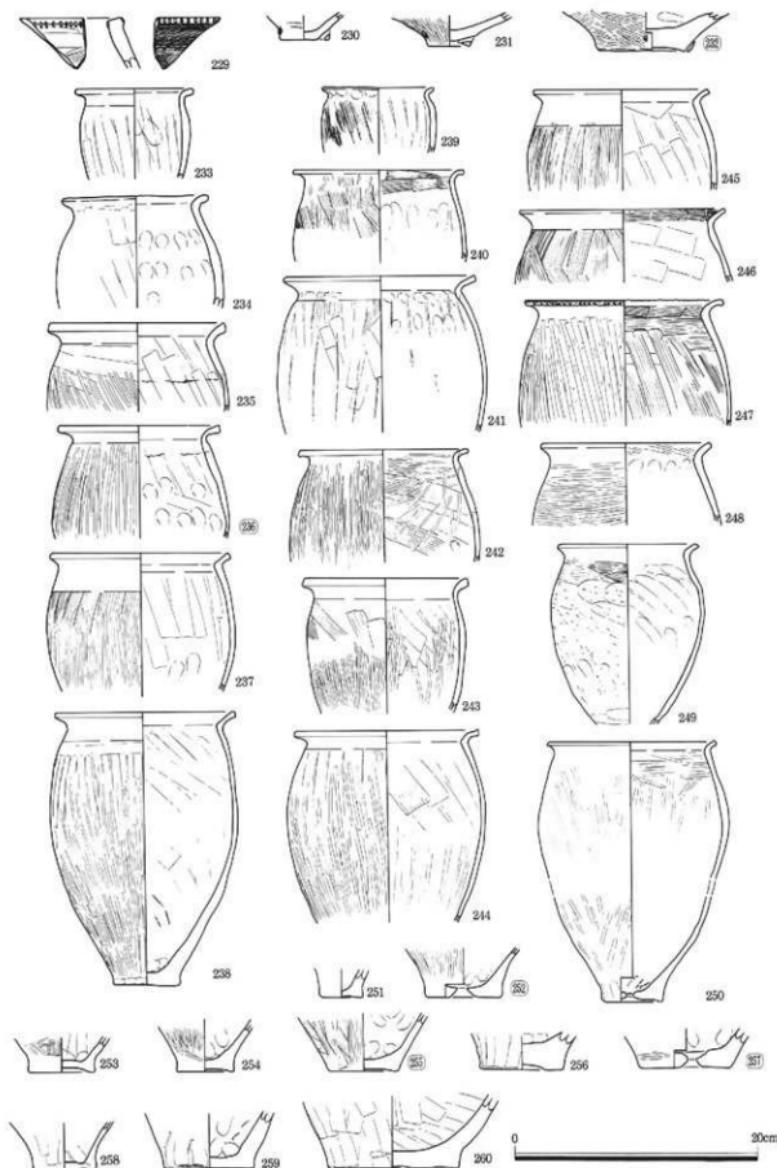


図28 95-2区 第1面土坑188出土弥生土器 3

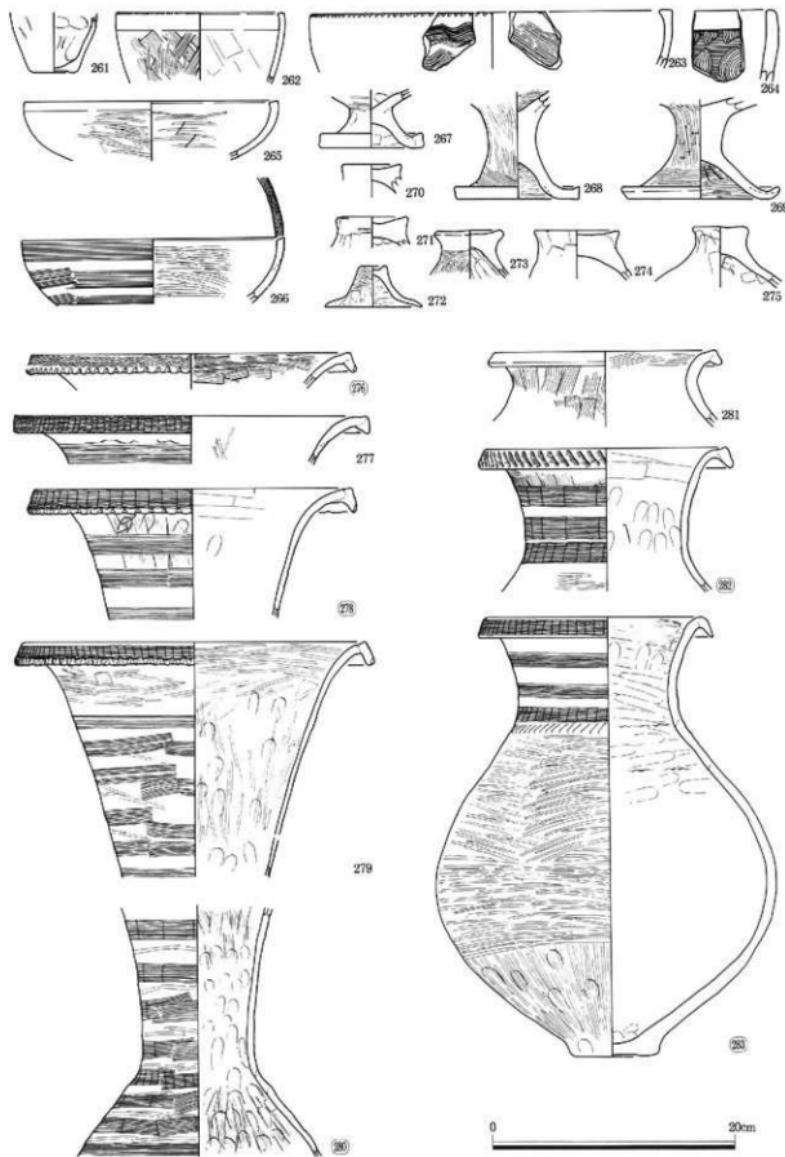


图29 95-2区 第1面土坑188出土弥生土器 4

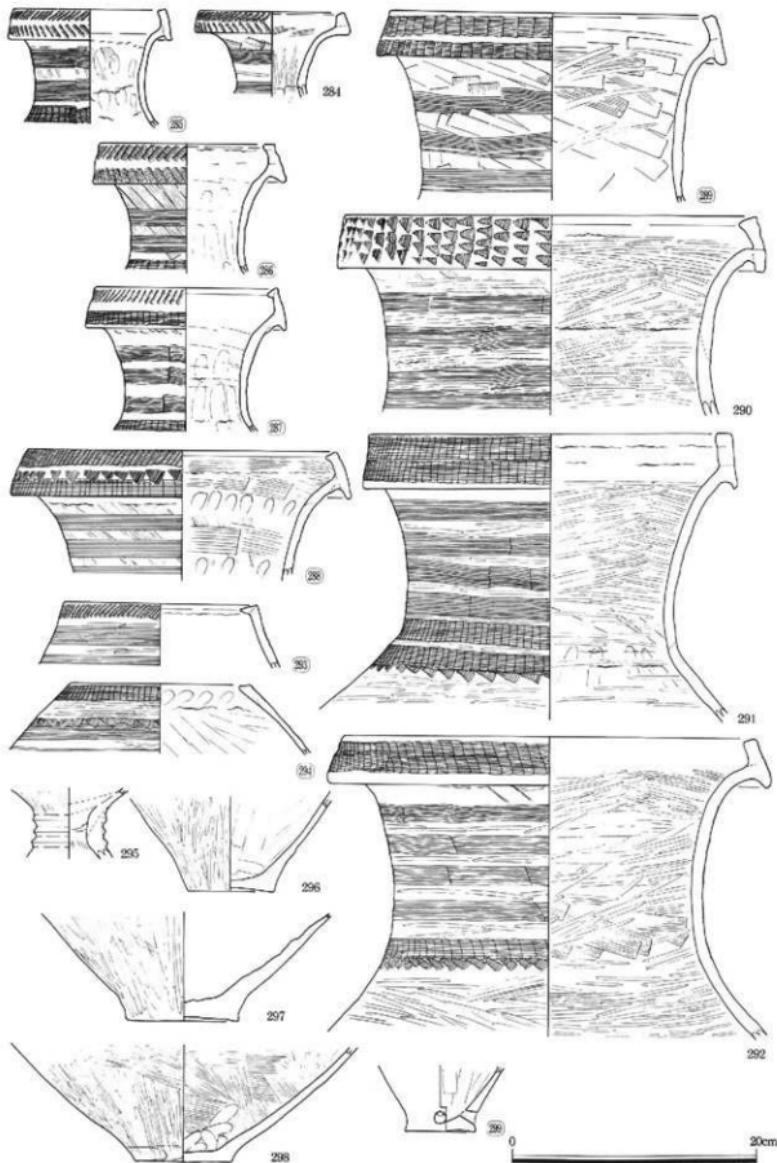


図30 95-2区 第1面土坑188出土弥生土器5

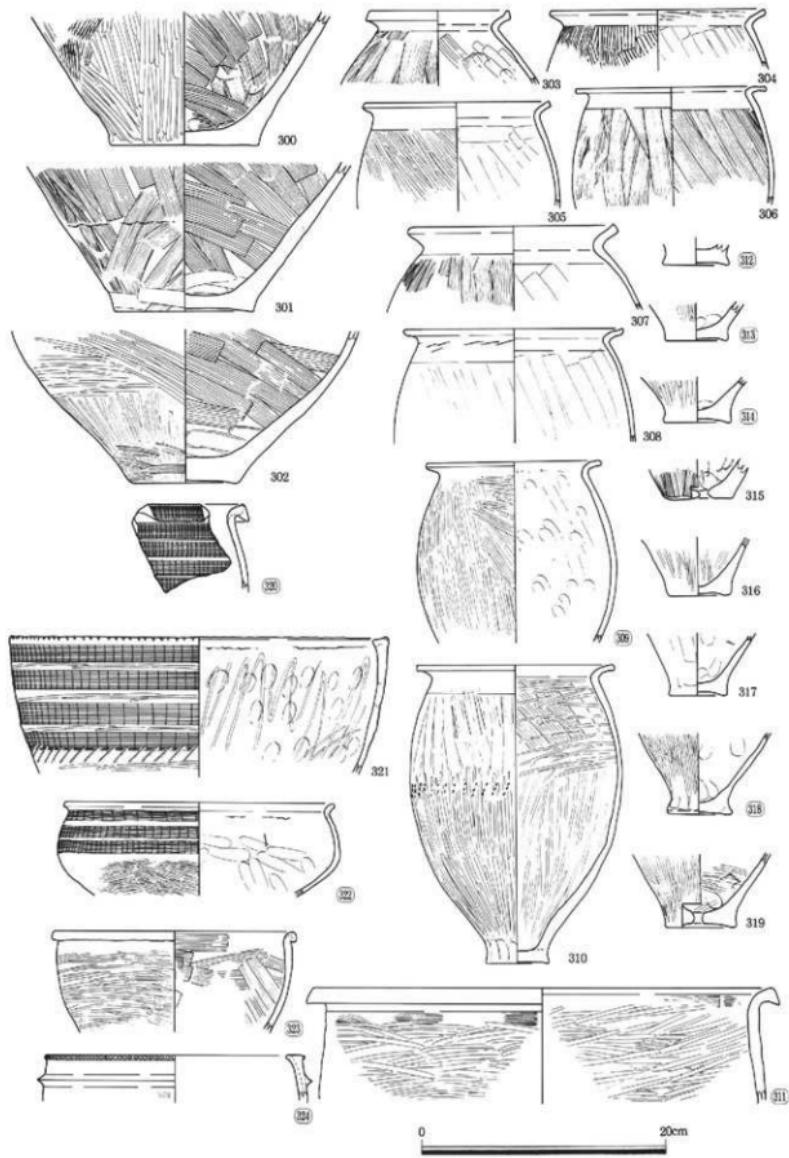


图31 95-2区 第1面土坑188出土弥生土器 6

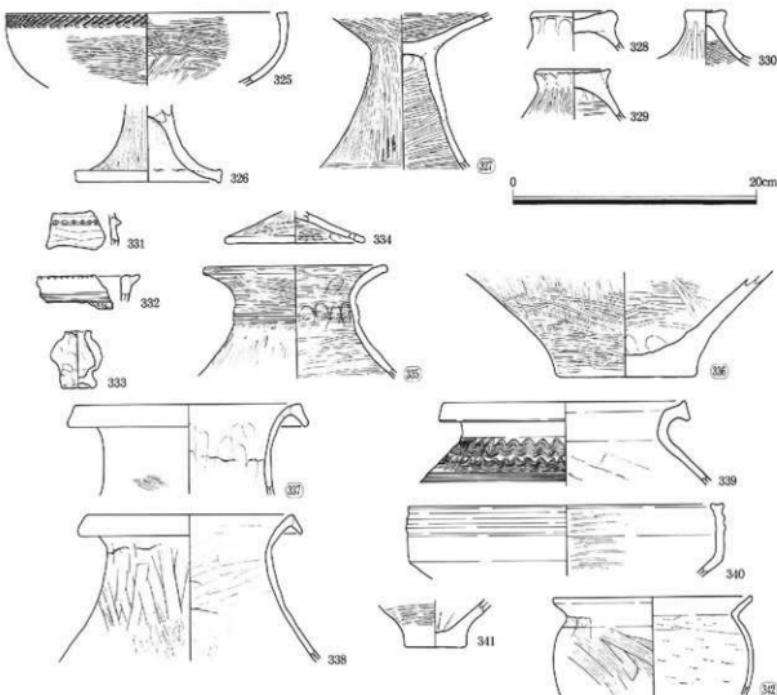


図32 95-2区 第1面土坑188出土弥生土器7・土器器・縄文土器

371は甕。371の体部外面には煤の付着が顕著。368は前期新段階、369~371は第II様式に属す。

図36・図37は第1層出土土器であり、372~383は壺である。374・382は壺b、373・375~379は壺a2、383はミニチュア。372は口縁の垂下した部分を指でつまみ上げ、刻み目の様である。373・374は頸部と体部に直線文をめぐらす。375~378は頸部文様のみが残っており、375は刻み目のつく貼り付け突帯とヘラ描き沈線3条、376は乳状突起、377は低く幅の広い削り出し突带上にヘラ描き沈線3条。378は削り出し突帯第1種で、体部に赤彩文がみられる。平塗りの木葉文であろうか。381の体部にはヘラ描き沈線が12条残る。382は口縁部を打ち欠いて使用した様で、破断面に煤と赤色顔料の付着が認められる。図36~384・385、図37~386~392は甕Aである。389の体部には柳状の圧痕がみられる。390の頸体境には三角形刺突文がめぐる。394は大型の鉢Bであり、瘤状把手が付く。395は壺蓋A、396は壺蓋B、297は壺蓋D、398は壺蓋Cである。399は壺蓋で柳状の圧痕がみられる。395のみ内外面共に黒色物質が付着している。およそ前期新段階から第II様式に属す。

図38~400は第2面土坑459出土の甕Aである。底面に焼成後の穿孔あり。土坑459からはこの甕のはかは全て破片であり、全体を何えるものは皆無であるが、壺の文様等を観察した結果、前期後半に属するものと考えられる。

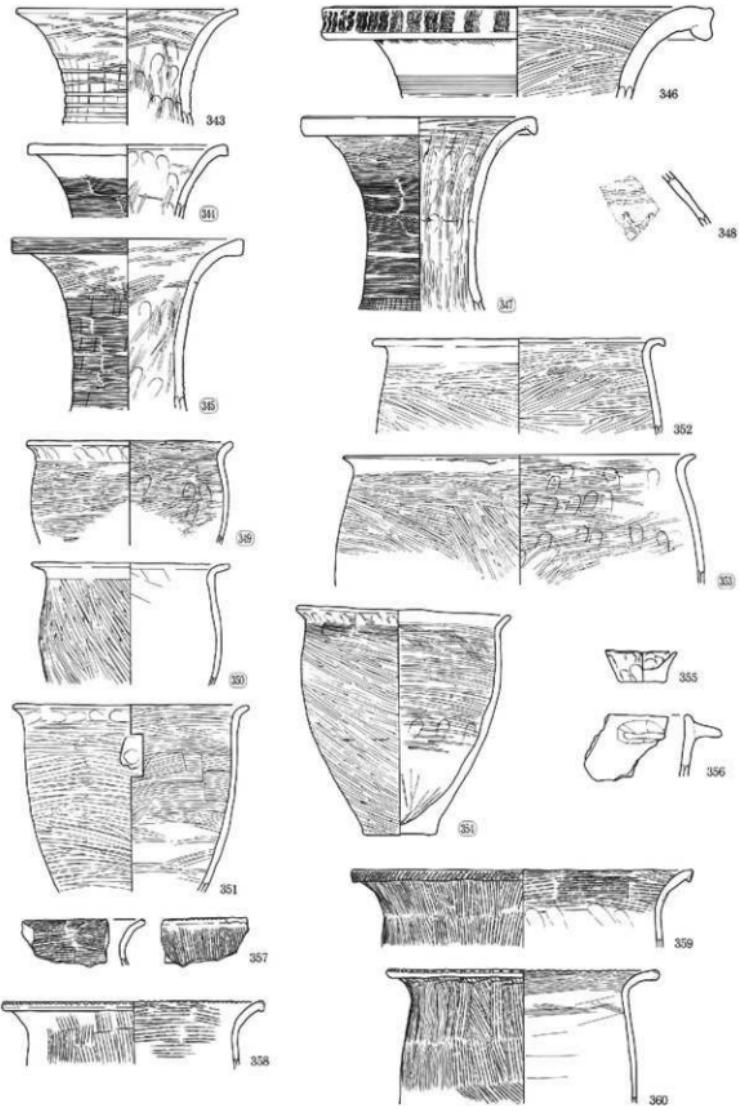


图33 95-2区 第1面土坑395出土弥生土器

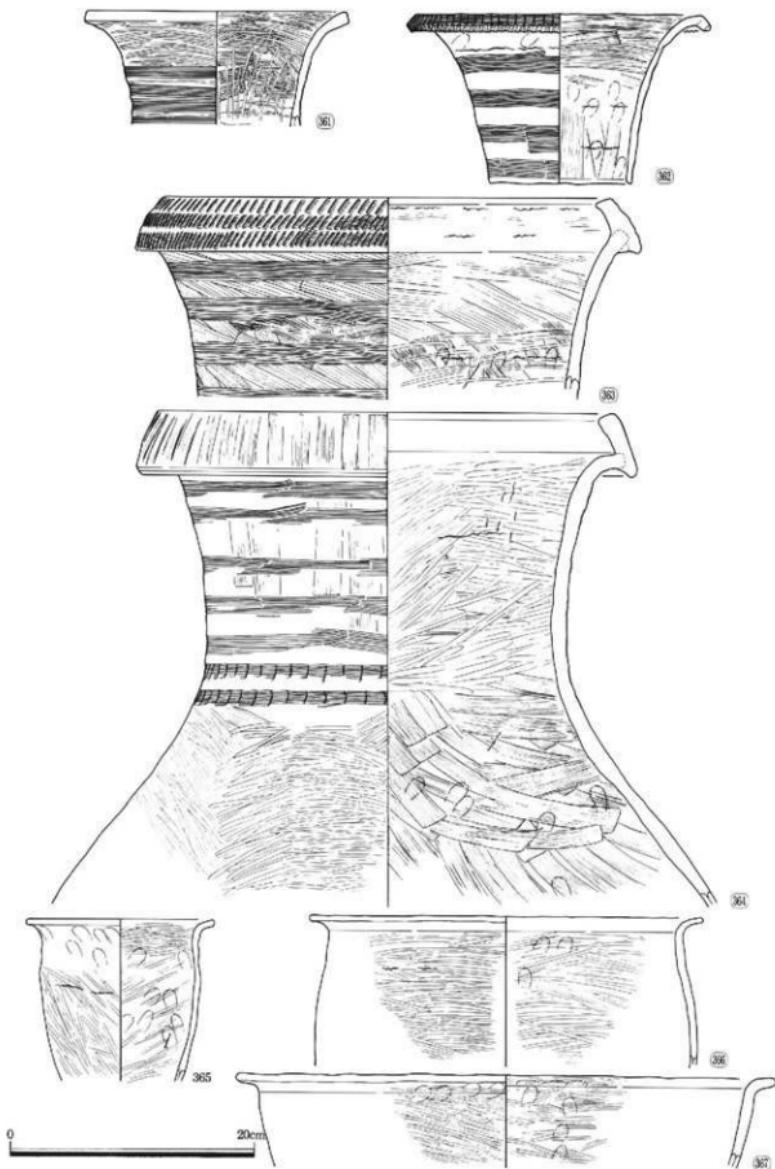


図34 95-2区 第1面溝334・土坑395出土弥生土器

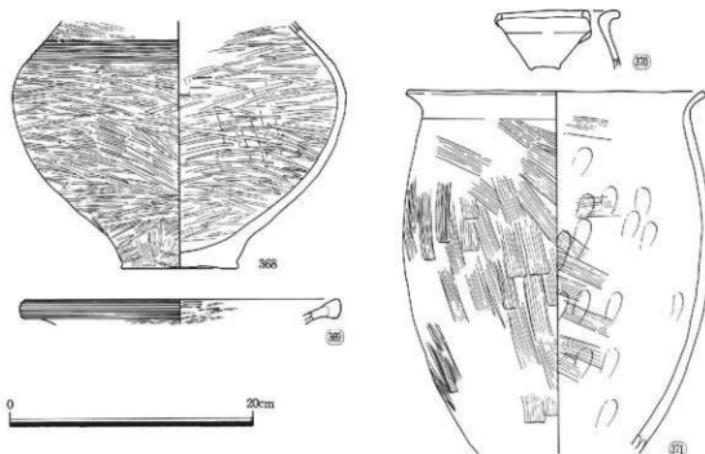


図35 95-2区 第1面堅穴住居368出土弥生土器

図38-401～414・図39は第2面溝658出土土器である。401は壺の体部であり、粘土紐を貼り付ける事によって弧線を形造っている。402は小型の壺a 2。403～406は壺a 2であり、頸部文様には削り出し突帯第I種(404)・第II種少条(403)、貼り付け突帯少条(405)、板状工具による削り出しの段(406)がある。405の体部文様は2帯あり、削り出し突帯第II種多条とヘラ描き沈線3条が残る。404・406の器壁内外面には黒色物質が付着している。407～409は壺a 1であり、頸部文様には削り出し突帯第II種少条(407・409)、ヘラ描き沈線1条(408)がめぐる。409の体部文様は削り出し突帯第II種少条である。410～412は壺の底部。413・414は壺Aであり、器壁外面には煤の付着が著しい。図39-420は鉢Bであり、内外面の同一カ所に黒斑あり。以上の土器は佐原編年第I様式中段階後半、井藤編年第I様式I-c段階にはば相当するものと考えられる。図39-415～418は壺、419は壺である。415～418の器壁外面には煤の付着がある。中期前半には収まるであろう。

図40-421～427は第2面土坑661出土土器である。421～424は壺A。421～423の口縁部には刻み目がめぐる。421・422の頸体境にはヘラ描き沈線が2条めぐるが、423・424は無文。421・422・424の器壁外面には煤の付着あり。425は把手付きの鉢A。器壁外面には黒色物質の付着あり。426は壺蓋C。427は壺蓋で、器壁内面に煤が付着している。壺の出土が無いので確実ではないが、前期後半に該当するものであると考えられよう。

図40-428は第2面土坑836出土壺蓋Bである。この土器のほかにはごく小片しか出土しておらず、確定な時期は不明。

図40-429は第2面土坑805出土壺a 2。頸部に貼り付け突帯1条がめぐり、紐孔が1つ残る。この土器のほか、小破片が数点出土しており、その内に把手付きの鉢Aがある。前期後半に属す。

図40-430は第2面土坑794出土の壺Aである。頸体境にはヘラ描き沈線4条が2帯めぐっている。この土器のほかは小破片が出土しているのみで、図示できなかった。前期後半に属す。

図40-431・432は第2面土坑857出土の壺である。431の壺bは体部内外面の同一カ所に黒斑がある。

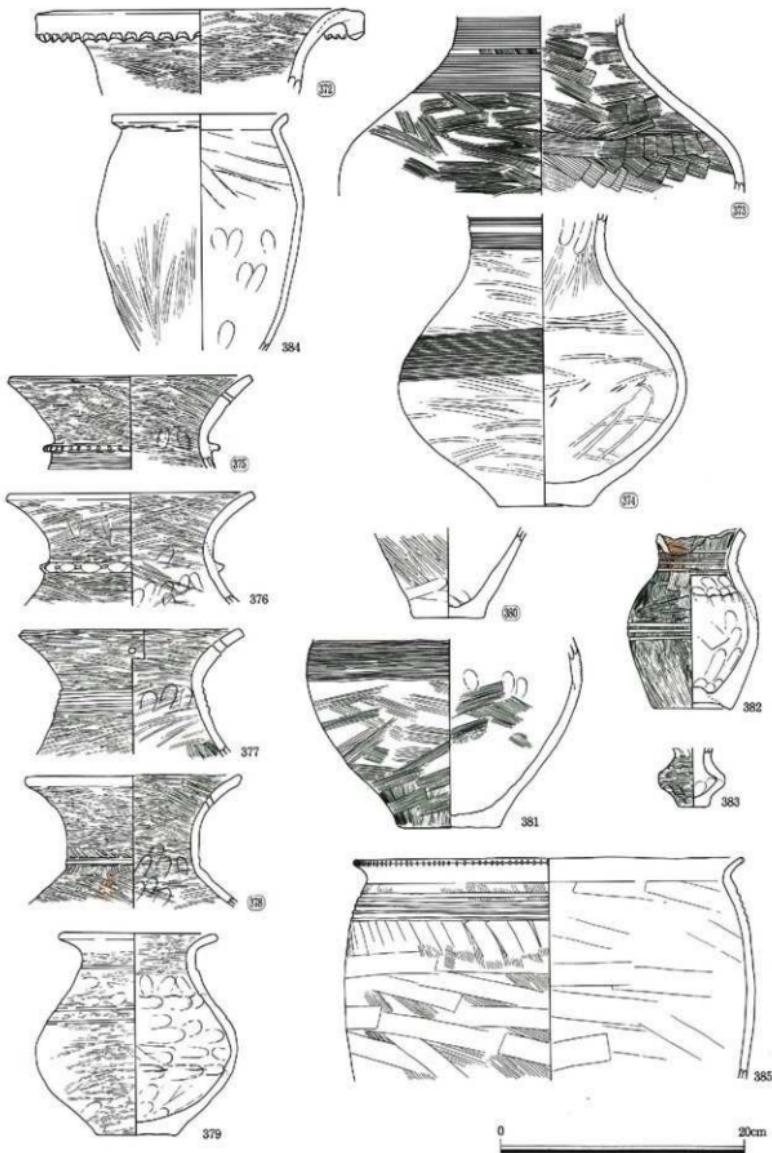


図36 95-2区 第1層出土弥生土器1

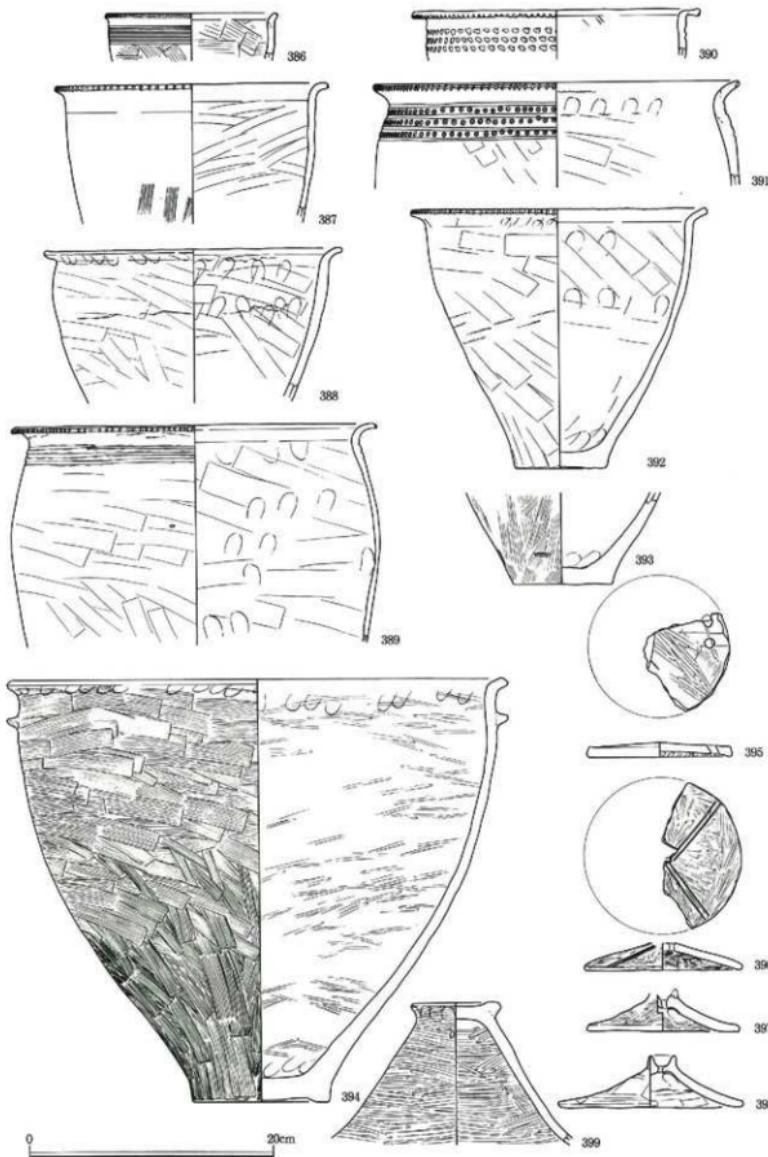


图37 95-2区 第1层出土泥生土器 2

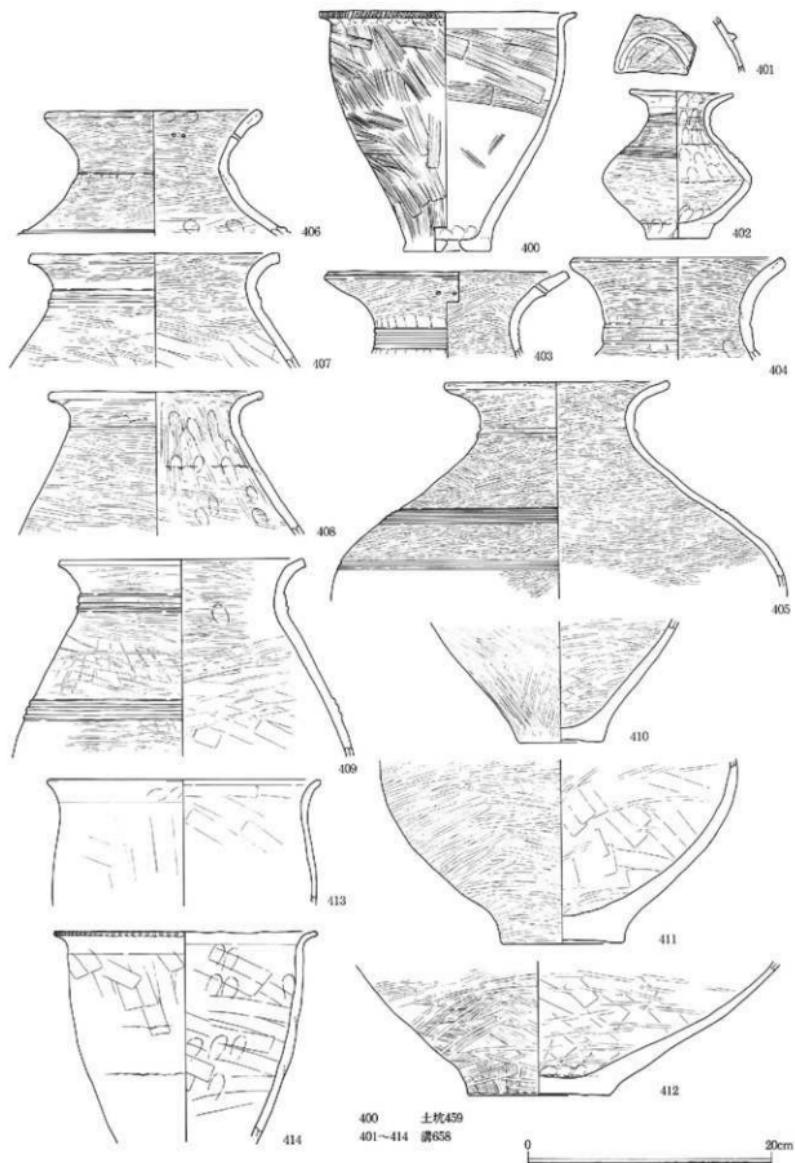


図38 95-2区 第2面土坑・溝出土弥生土器

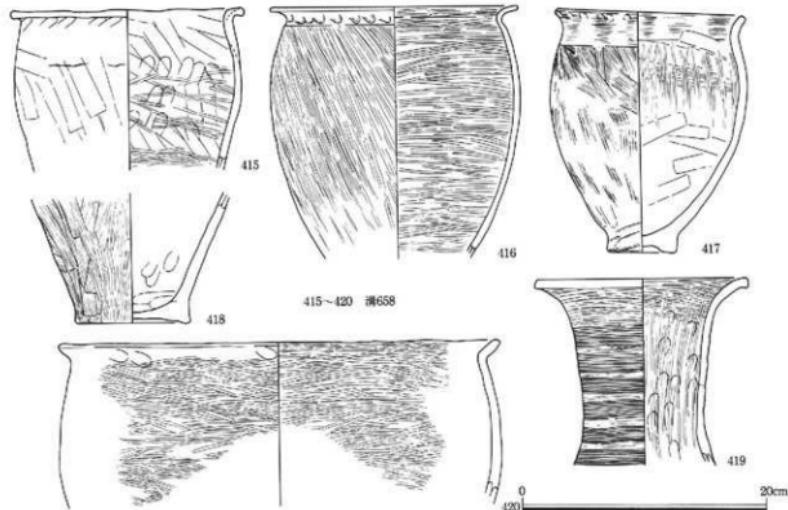


図39 95-2区 第2面溝出土弥生土器

432にはヘラ描き流水文が施文される。前期後半に属す。なお、これらの土器のほかに、図示はしていないが第II様式に属する壺・甕も出土している。

図40-433は第2面土坑659出土の壺体部破片である。ヘラによる無軸の木葉文が描かれている。外面には黒色物質の付着あり。前期前半に属す。この土器のほかに図示可能な資料なし。

図40-434は第2面土坑453出土の大甕である。口縁部のやや下方に板状工具による強いナデ、体部は内外面共に丁寧なヘラミガキ。底部は打ち欠いており、その後の成形などは行っていない。体部外面と内面の下方に著しく煤が付着している。この土器のほかは全て小破片であり、図化できなかった。中期前半に属するものと考えられる。

図41-435~437は第2面ピット845出土土器である。435は鉢Bで、内外面の同一カ所に黒斑あり。内面の所々に赤色顔料の付着が認められる。436は甕Aで、頸体境にヘラ描き沈線2条が2帶めぐり、その間にヘラ描きの山形文が施文される。外面に煤の付着あり。437は壺蓋Bであり、頂部に紐孔が1つ穿孔されている。内外面の同一カ所に黒斑あり。前期前半に属す。

図41-439は第2面ピット487出土の大型甕である。中期後半に属す。

図42-46は第2面溝593出土土器である。図42-440は壺a1であり、頸部には板状工具で削り出した段（井藤氏の段成形法c）がめぐり、削り出しを行った際の板状工具の痕跡がタテハケとして残っている。図42-441~464・図43-468・469は壺a2である。口縁部文様は殆どのが無文であるが、図42-442・443のみヘラ描き沈線が1条めぐり、442の口縁内面にはヘラ描き沈線3条が施文されている。頸部文様は削り出し突帯第I種・削り出し突帯第II種小条・削り出し突帯第II種多条・貼り付け突帯1条・ヘラ描き沈線・乳状突起があり、多様である。なお、ヘラ描き沈線帶の中には一番下の沈線の下方を削り、段としたものが見受けられた。体部文様は、ヘラ描き沈線・貼り付け突帯1条とヘラ描き沈線

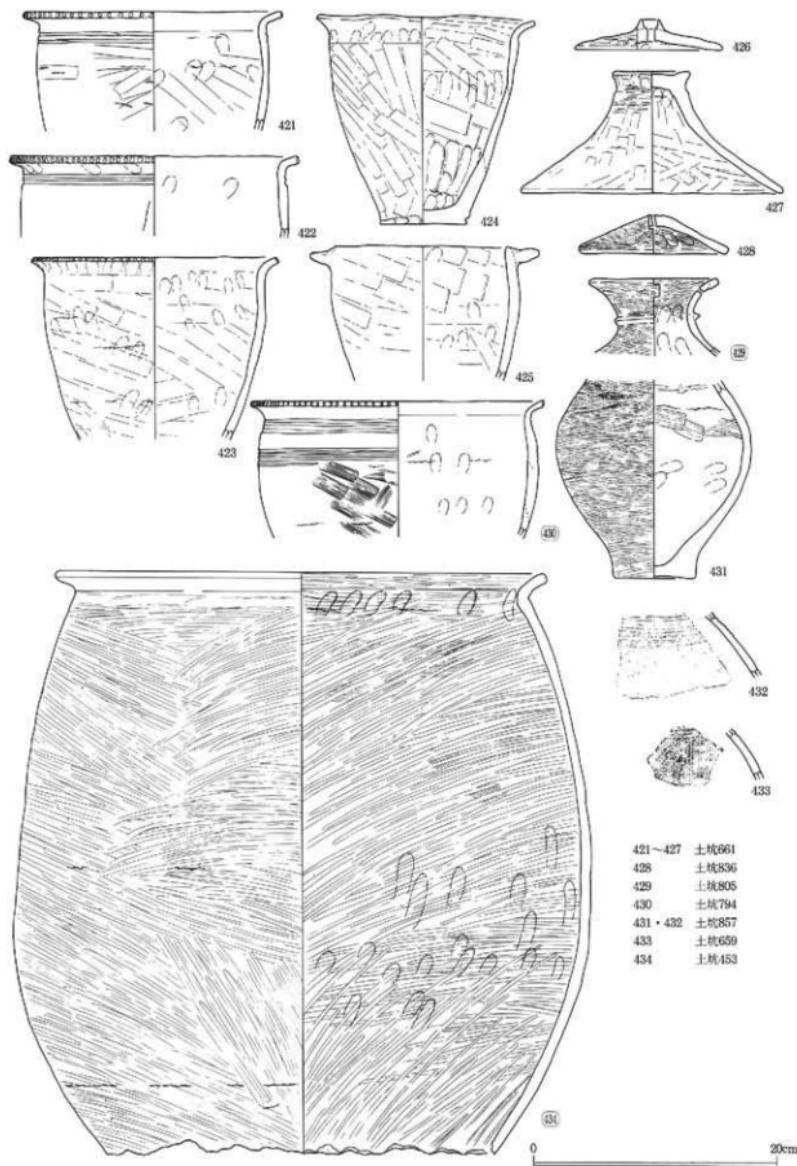


図40 95-2区 第2面土坑出土弥生土器

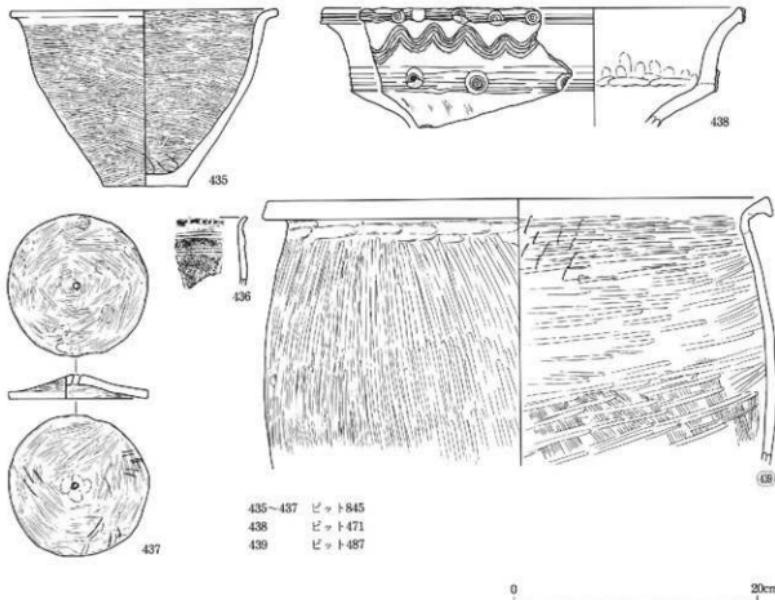


図41 95-2区 第2面ピット出土土師器・弥生土器

(図42-459)、削り出し突帯第II種小条が見受けられる。なお、図42-459の貼り付け突帯には焼成前の穿孔が1つ観察でき、図42-447・449には紐孔のほかに、貫通していない孔がある。図42-442・445・455・456の器壁には黒色物質が、図42-443・444の口縁部には赤色顔料の付着がみられた。図42-466は小型の壺、図42-465・467はミニチュアの壺である。図43-470は壺の頸部破片、図43-471~478は体部破片。図43-475・478には区画線の無いヘラ描きの無軸木葉文が、477には重弧文がみられる。図43-479は無頸壺Aであり、紐孔が1つ残る。図43-480~496・図44-497~500は壺の底部である。図43-480には焼成前の穿孔あり。図43-491は内外面共に黒色物質が付着している。図44-501は壺Bの口縁部破片である。口縁部上端にヘラ描き沈線2条。図44-502~511・図45-512・513・524は壺Aであり、524は口径45.5cmの大型品である。口縁端部に刻み目の有るものと無いもの、頸体境の文様が有文と無文のものとがある。頸体境の文様にはヘラ描き沈線2~3条めぐるものが多く、4条以上めぐるものは図44-509・511のみ。また、ヘラ描き沈線と他文様を組み合わせたものも散見できる(図44-505はヘラ描きによる山形の併行斜線文、510は円形竹管文、511は米粒形を横にした押捺文)。図45-512の底面には焼成後の穿孔あり。体部外面に煤の付着したものが多くみられる。図45-514~523は壺の底部である。515・523の底面には焼成後の穿孔あり。514~516・518・522の内外面に煤の付着あり。図45-525・526、図46-530~536は鉢B、図45-527・528はミニチュアの鉢A、図45-529は把手付きの鉢Aである。鉢Bで口縁端部に文様がめぐるのは、図45-526の円形刺突文のみ。頸体境にヘラ描き沈線が数条めぐるものは、図46-530・531・533・535で、その内の530・531はヘラ描き沈線帯の下をヘラ等で

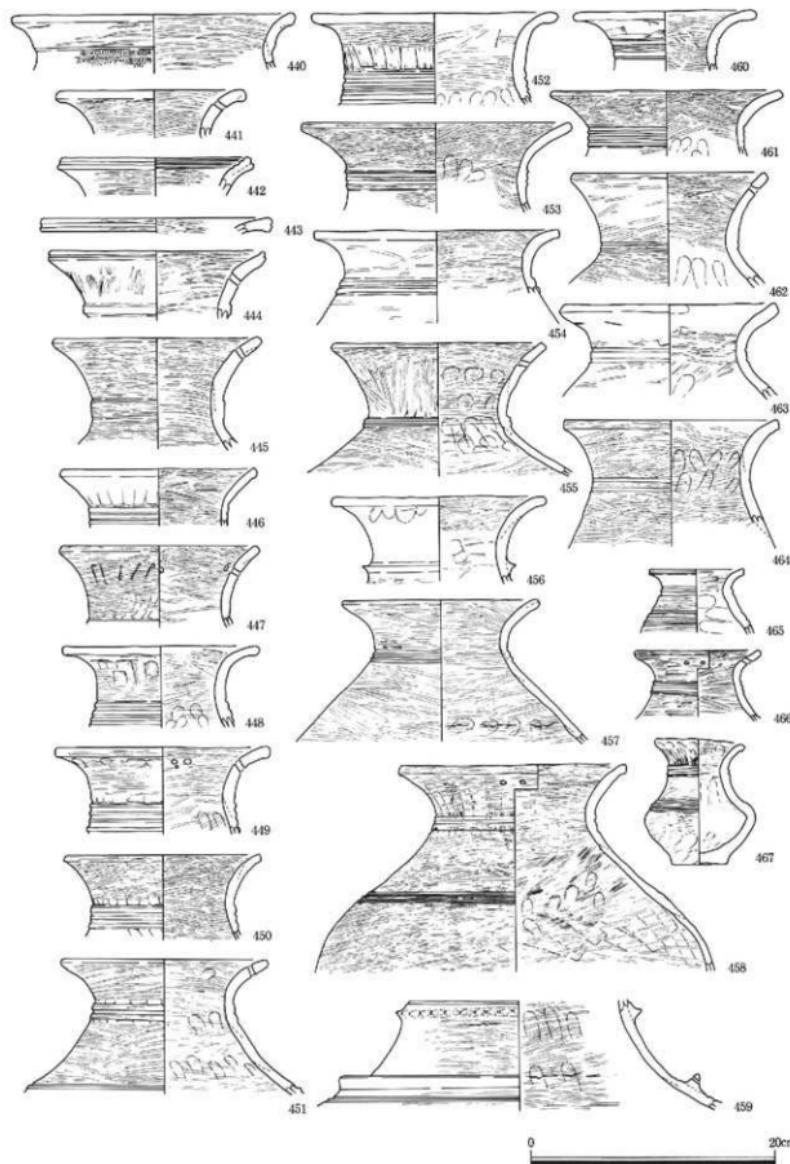


図42 95-2区 第2面溝593出土弥生土器1

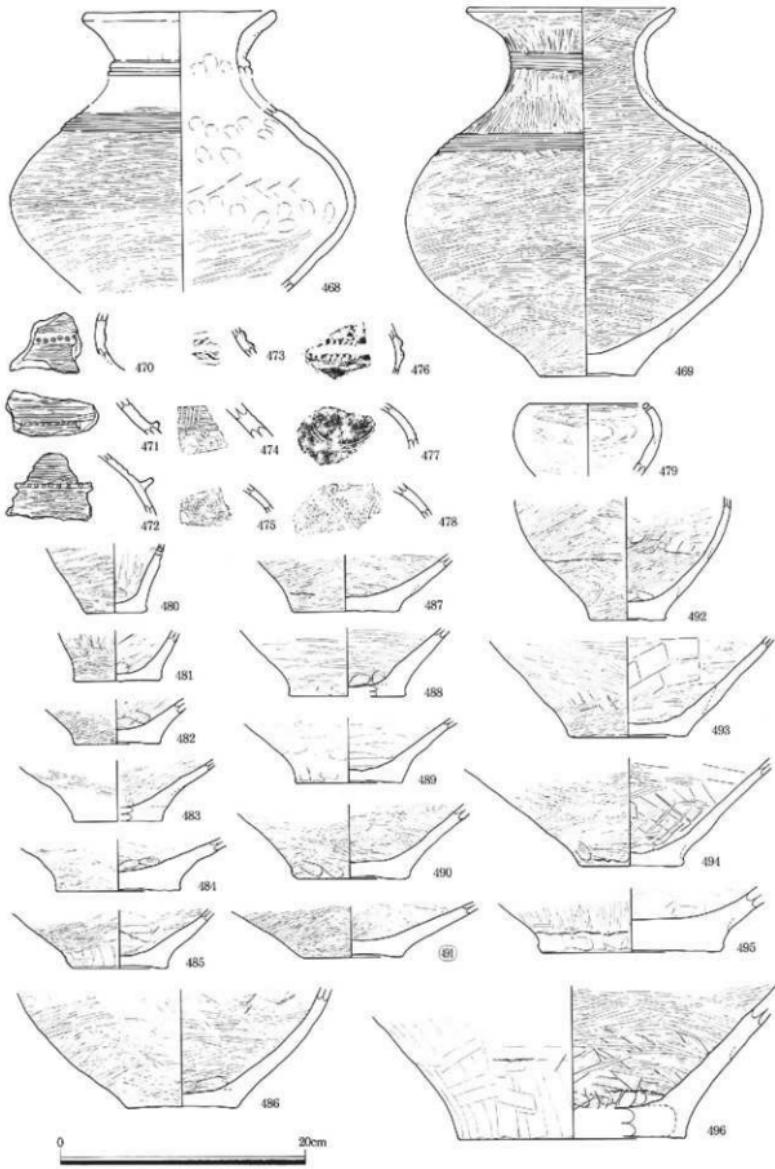


图43 95-2区 第2面溝593出土弥生土器2

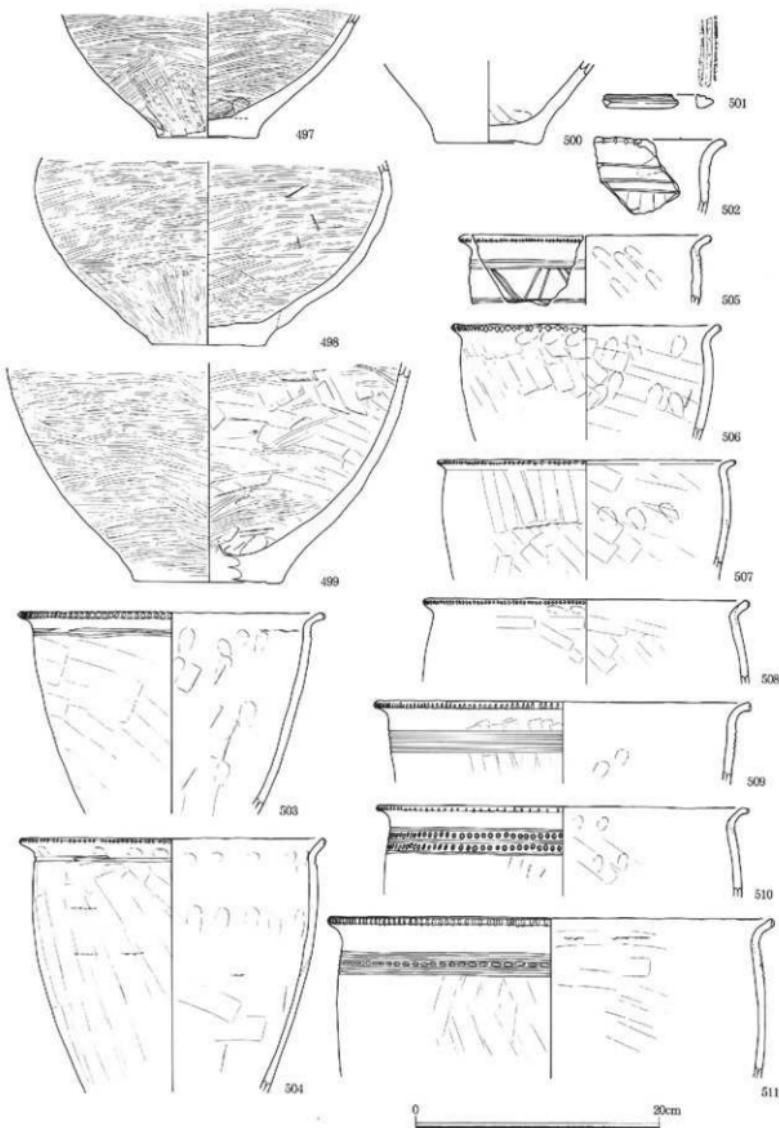


図44 95-2区 第2面溝593出土弥生土器 3

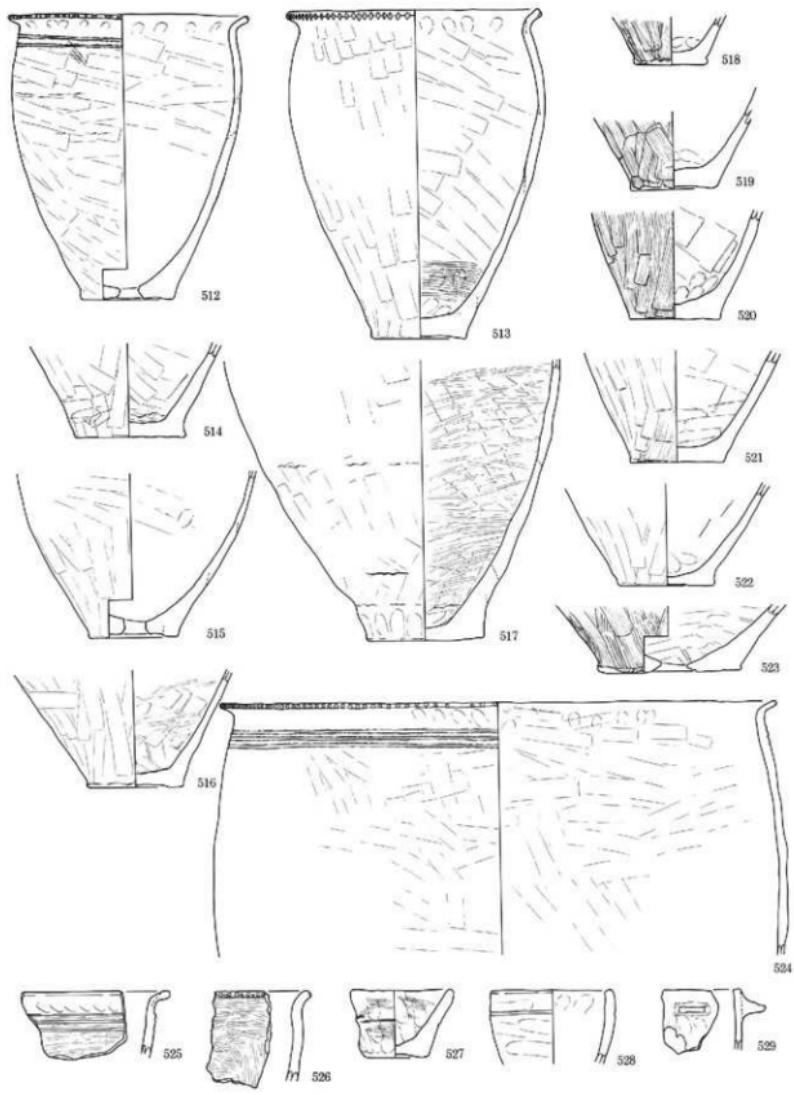


図45 95-2区 第2面溝593出土弥生土器 4

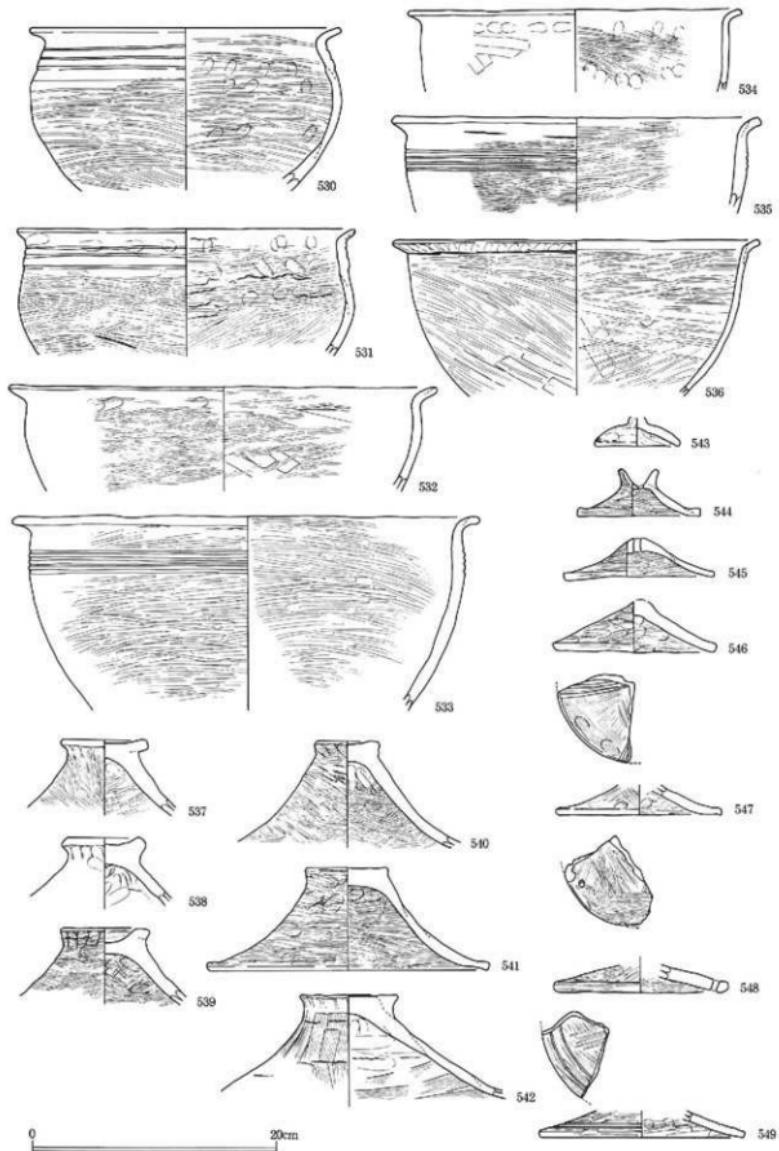


図46 95-2区 第2面溝593出土弥生土器 5

削り、段としている。図46-530のみ内外面に黒色物質付着。図46-537~542は壺蓋。内面に煤の付着しているものが多い。図46-543~549は壺蓋で、543は壺蓋C、545・546は壺蓋B、544は壺蓋D。544のみ内外面黒色物質付着。第2面溝593からは、ここに図示した土器を含め約4000点余りの土器及び土器片が出土した。その事からも時期幅を有する遺構であることがわかる。ここでは、壺a 2の頸部文様が削り出し突帯第II種小条を主体とし、貼り付け突帯を有するものが若干含まれる事から、佐原編年第I様式中段階後半、井藤編年第I様式I-c段階にほぼ相当するものとしておきたい。

図47~図49は第2面土坑657出土土器。図47・図48-562~564は壺a 2である。口縁端部の文様は、端部にヘラ描き沈線1条がめぐらる図47-551のみ。頸部文様としては、削り出し突帯第I種・削り出し突帯第II種小条・貼り付け突帯1条・ヘラ描き沈線3条等があり、そのほかヘラ描き沈線文帯の下をヘラ状工具でナデくぼめ、段としたもの(図47-554・561)がある。図47-552はヘラ描き沈線4条の間に円形刺突文をめぐらせ、赤彩文を施している。体部文様には、削り出し突帯第II種小条・ヘラ描き沈線2~4条があり、図48-562はヘラ描き沈線文帯の上をヘラ状工具でナデくぼめ、段としている。図47-558は無文であり、器壁の調整に用いるヘラミガキの手法が他の壺に比べて少なく、ハケが目立つ。図47-552・557・560、図48-564の器壁には黒色物質の付着あり。図48-565は無頸壺Bで、口縁が短く外反する。内外面共に器壁が著しく磨滅し、ヨコヘラミガキが所々に残るのみ。図48-566~570は壺底である。566のみ器壁内外面に黒色物質が付着している。図48-571~575・図49-577~580は壺Aで、口縁端部に刻み目を有するものが多い。頸体境にはヘラ描き沈線が1~3条めぐる。図48-575の口縁端部には、刻み目のほかにヘラ描き沈線1条が部分的にみられる。図49-578の口縁部には粗状の圧痕あり。図49-579は口縁部を形成する時の指頭痕が、爪痕と共に明瞭に残る。器壁内外面に煤の付着しているものが多く、時には高熱を受けた為であろうか、赤変しているもの(図49-579)も見受けられる。図48-576は壺の底部で、底に焼成後の穿孔あり。外面に煤が付着している。図49-581は鉢Bであり、頸体境にヘラ描き沈線1条めぐる。図49-582は壺蓋。図49-583は壺蓋C、584は壺蓋D、585は壺蓋Bで、583・584の器壁には黒色物質の付着あり。第2面土坑657出土土器は、溝593出土土器とかなりの同時性を有する土器群であると思われる。第2節でも触れたように、第2面上坑657と溝593とは矢板により調査区が分断されているものの、かなり近い距離で隣り合っており、同一遺構である可能性が高い。よって、第2面土坑657出土土器は溝593出土土器同様、佐原編年第I様式中段階後半、井藤編年第I様式I-c段階に属するものと考えられる。

図50-586~588は第2層出土の前期土器である。586・587は壺の体部破片で、586は削り出し突帯とヘラ描き沈線3条に挟まれた空間に、有軸のヘラ描き木葉文が描かれている。587は乳状突起2条の間にヘラ描きの斜格子文を配しており、乳状突起を付ける前の目安として、ヘラ描き沈線を1条めぐらしているのがわかる。588は壺蓋で、多くの乳状突起が不規則に配置されており、その大部分は剝離し、痕跡が観察できるのみ。

図50-589~597は側溝から出土した前期土器で、明確な出土層位等は不明。589は壺a 2で、頸部文様は削り出し突帯第II種小条、紐孔が1つ残る。590・591は壺bである。590は口縁が欠損しており、頸部には削り出し突帯第II種多条(6条)が、体部にはヘラ描き沈線5条がめぐる。592は小型壺の底部と考えられる。593は壺の体部破片で、ヘラ描き文あり。蕨手文であろうか。594は壺蓋B、頂部に紐孔あり。595は壺蓋、内面に煤が付着。596・597は壺A、596の頸体境にはヘラ描き沈線2条と円形竹管文がめぐる。

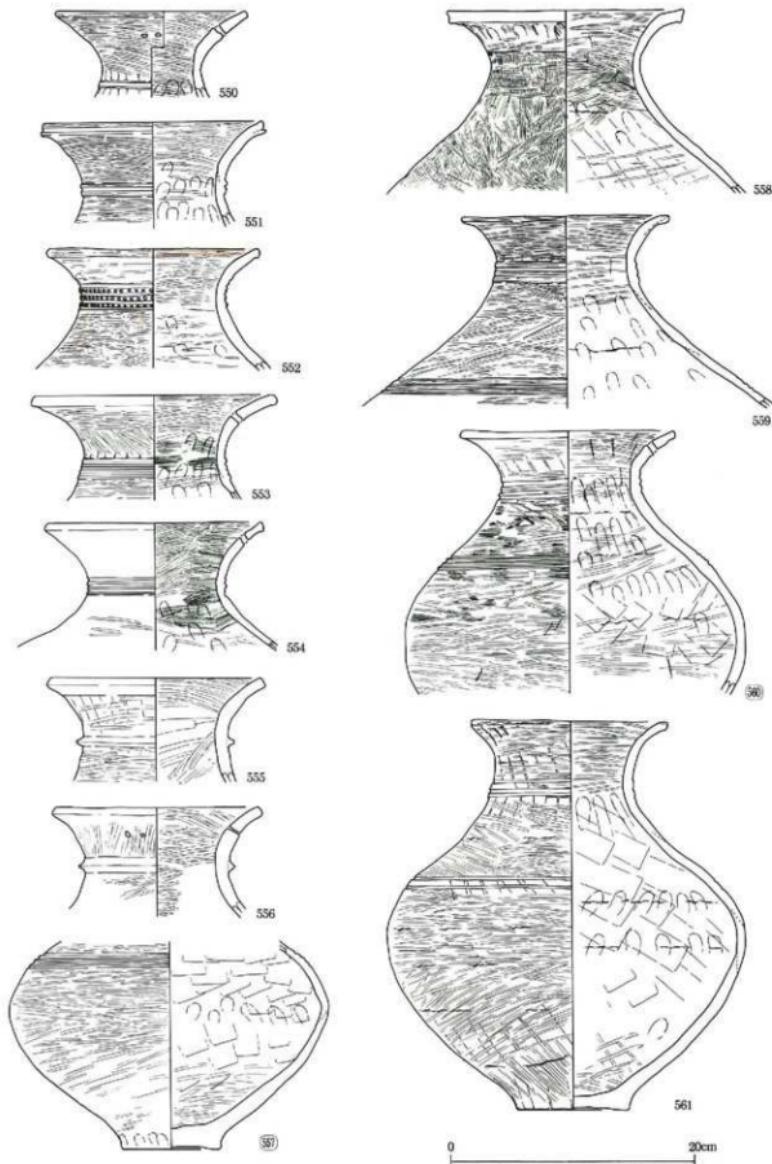


図47 95-2区 第2面土坑657出土弥生土器1

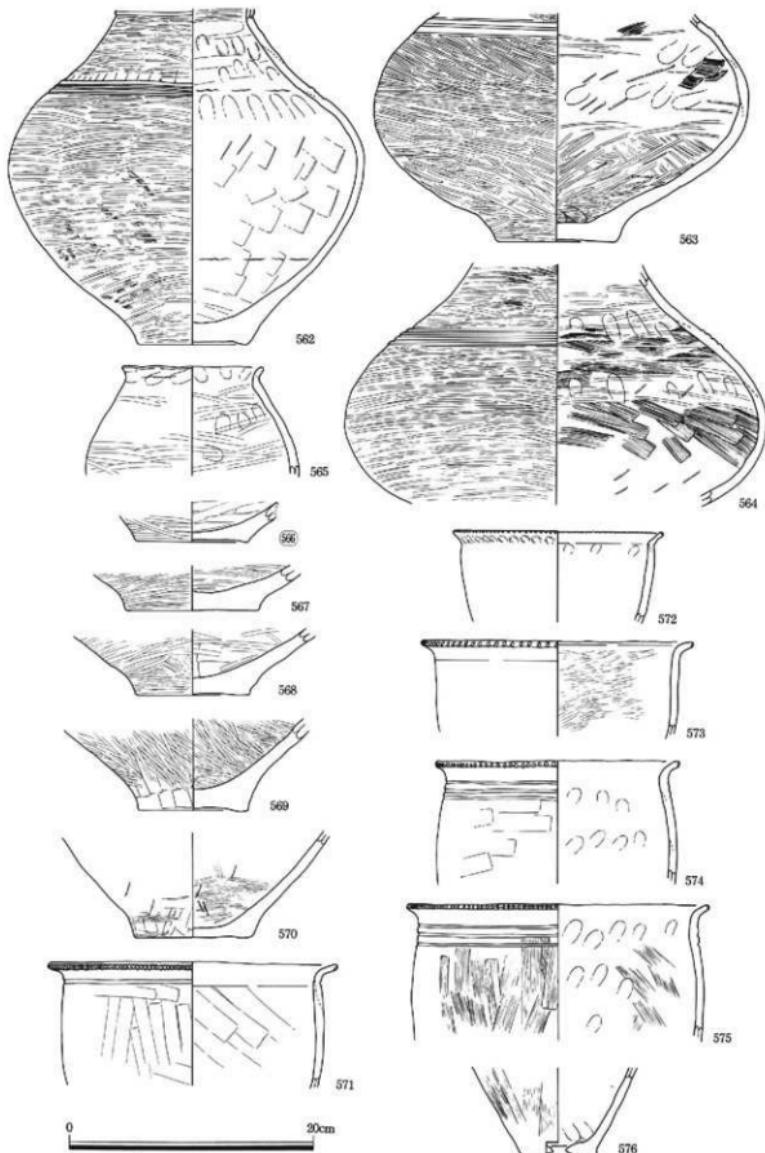


图48 95-2区 第2面土坑657出土弥生土器2

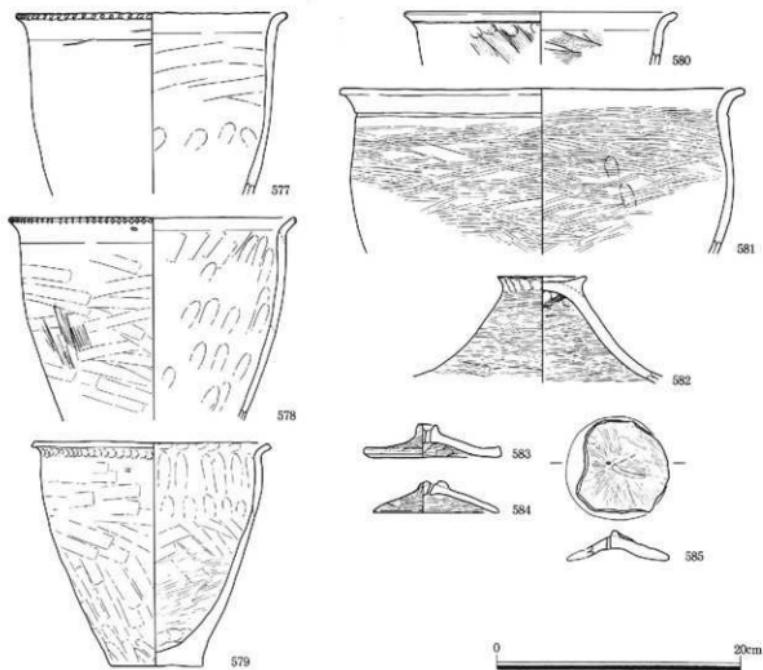


図49 95-2区 第2面土坑657出土弥生土器3

図51～図77は第3面落込み848出土土器である。落込み848については、第2節で詳しく述べられている。また、土器のまとめは第12章第4節で行う事とし、ここでは概略を記述するにとどめた。なお、第2節でも断っているように、落込み848出土土器の内において、ほかとは異質な状況で検出された土器群があり、これについてはほかの土器をまとめて報告した後に、落込み848北土器群上層・落込み848北土器群下層として報告する事をあらかじめ断っておく。落込み848出土土器は図51～図74-1157、落込み848北土器群上層出土土器は図74-1158～1173・図75・図76-1199～1203、落込み848北土器群下層出土土器は図76-1204～1214・図77に対応する。

図51-606は壺の体部破片、図51-607・608・614～616、図53-660は口縁部破片である。606は段成形法として井藤氏がいう所のc手法を用いている。図51-598～601は壺a1である。600の段には縁取り沈線がみられ、601の段にはc手法を用いてる。また、599の頸部にはタテヘラミガキが行われており、古い様相を呈している。599～601の器壁には黒色物質が付着。図51-602～605・609～613・617～630・図52～図57-716・717は壺a2。頸部文様・体部文様共に、段・削り出し突帯第I種・削り出し突帯第II種小条・削り出し突帯第II種多条・貼り付け突帯1～2条・ヘラ描き沈線1～5条などがあり、バラエティーに富んでいる。段成形にはc手法を用いる場合がある（図51-602・603）。削り出し突帯を成形する時には、ハケもしくはヘラなどで沈線帯の上下を押さえつけて突帯を作りだしているものが

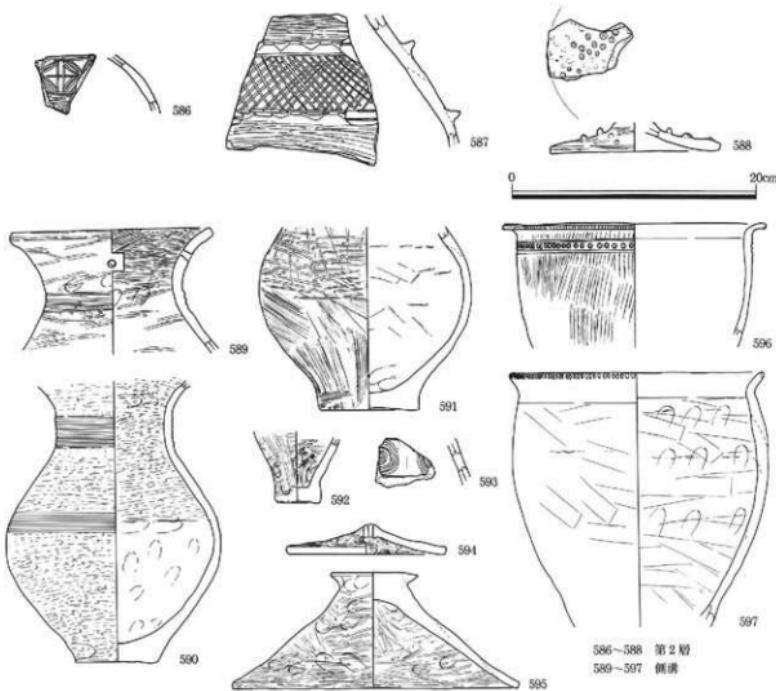


図50 95-2区 第2層・側溝出土弥生土器

多い。時には、削り出しを上下どちらか一方のみに行なう場合があり、突帯とは言えないものもある。削り出し突帯もしくはヘラ描き沈線と他文様を組み合わせる例(図55-597・598・599)も少数ではあるが存在し、他文様としては羽状文・円形刺突文・斜格子文等がみられる。貼り付け突帯には、刻み目が有るものと無いものがあり、ヘラ描き沈線等と組み合わせて施文されている例もある。図51-605は頸部に段を有するが、粘土接合の傾きが変化することによって、通常の段とは上下が逆転している。今後の検討が必要な土器である。図51-609には赤彩あり。図54-677の体部には、ヘラ描きの重弧文が3条一単位で1組残る。図56-715の壺は、腹部が大きく張出す偏平な体部を有する。頸部には刻み目をもつ貼り付け突帯1条、体部には削り出し突帯第II種多条と刻み目をもつ貼り付け突帯1条がめぐる。この土器に施文されている貼り付け突帯はほかのものに比べて、突起が高く、先端に丸みを帯び、全体的にしっかりとしたものである。また、そこに刻まれた刻み目も1つ1つが大きく、貼り付け突帯に対して深く刻まれており、大量の土器片の中に混じって接合を行う時でも、この土器の破片は簡単に判別することができた。調整は内外面共に密度の高いヨコヘラミガキを行っているが、外面の口頸部と体部の一部にハケが残っている。色調は2.5Y7/3浅黄色～2.5Y4/2暗灰黄色。胎土は肉眼により、1～3mm大の石英・長石・雲母などの砂粒が観察できた。焼成は良好。形態や文様等から尾張系であると推測される。図51-603・609・621・630、図52-637・646・649、図53-662・674、図54-676・689、図55-700、図